
IS 光の英雄

光を継ぐ者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 光の英雄

【Nコード】

N5448V

【作者名】

光を継ぐ者

【あらすじ】

ガタノゾーアとの戦いに勝利し、光の粒子になろうとしていたテイガの前に現れた“テイガの世界”の神である“ウルトラマンノア”。彼の力により飛ばされた世界は“I・Sの世界”だった。世界を超えて、光の英雄が再び立ち上がる時、奇跡が起こる。

第一話 プロローグ（前書き）

初めまして。

初めての投稿ですので、アドバイスの方は

よろしくお願いします。

第一話 プロローグ

ガタノゾーアは消滅した。

グリッターゼペリオン光線で倒した後、タイマーフラッシュユースペシャルで闇ごと消したからだ。

僕はウルトラマンティガ。・・・光となって消えるのに何で名乗ってたんだろう・・・。

膨大の闇を消滅させるためには、膨大の光をぶつけなければならぬ。

皆の光を受け取って『グリッターティガ』になっただとしても、ぎりぎり光が残るくらいで体の形を保てない。だから僕に光を貸してくれたマドカ・ダイゴのために最後の光を使って彼の体と分離し、消えないようにしたんだ。

・・・もう心配ないかな……。GUTSの皆は僕がいなくなっても頑張つていけそうだ。・・・もういいかな……。

「待ってくれ」

消えそうになった僕を呼び止めたのは、胸にY字みたいな赤いコアがあり、2つの翼をもつ銀色の“ウルトラマン”だった。

?? 僕以外のウルトラマン？あなたは誰ですか。

「私の名はウルトラマンノア。この世界での神だ。単刀直入に言うが、君には別世界へ行ってもらおう」

?? 転生・・・か。でも何故僕なんですか。ほかに適切な人がいるのに……。

「君にしか出来ないからだ。詳しくは言えないが、今から行ってもらう世界に本来ないはずの脅威が出現した。ガタノゾーアを闇ごと消滅させる力を持ち、優しい慈愛の心を持つ君なら解決できると判断したのだが行ってはくれないだろうか。」

??・・・僕は守れる命を守れず、救える命も救えなかった僕にどうしろと……。

僕はダイゴと同化していたためダイゴの想いが伝わっていた。

エボリユウ細胞を体に移植し、NO.1になるうとしたが、力を使い果たし死んでしまったサナダ・リヨウスケ。ムザン星人に標的にされ、助けようとした目の前で殺されたルキア。昔の村を取り戻すために人々に闇への恐怖を植えつけていたが、村が元に戻らないことを知り自らハンドスラッシュに当たって命を落としたオビコ。かつての友達を救うため体を張って止めようとしたら、その友であるイーヴィルティガの光弾に当たり命を落としたガーディ。

彼らを救えなかった僕が、他の世界を救えるのか分からなかった。「何を言っている。確かに救える命を救えなかったかもしれないが、その分多くの命を救えばいい。ナーガによって作られたアダムとイブや怪獣になったキングモーター、ゼルダガスの根絶という想いを叶えようとしたシーラ、宇宙で迷子になったタラバン、そして地球に住む人間たち。君はこれほど多くの命を救ったのだ。」

「君には守るための力がある。その力を他の世界でも使ってくれ。」
ノアはそう言ってくれた。

そうだ。救えなかった命があるのなら、その分多くの命を救えばいいんだ。

???・・わかりました。ぜひやらせて下さい。

「行ってくれると信じていた。あとは世界を跳ぶだけだが、君にパートナーをつけよう。そのパートナー」

と一緒に世界を救ってくれ。」

そう言うとノアは、手で空を切り裂き時空を歪ませた。その中に入ると歪みが小さくなっていった。するとノアは何か思い出したようにこういった。

「1つ言っておくことがある。君の能力は光線技のみ封印し、新たに能力をつけた。その内容はパートナーに聞いてみてくれ。期待しているぞ。」

僕が最後に見たのは次第に薄れていくノアの姿と4つの影が1つの

影になるところだった。

第一話 プロローグ（後書き）

ついに始まったウルトラマンティガ×IS《インフィニット・ストラトス》のクロス作品【IS 光の英雄】！！

ティガ（以後テ）：何で僕が主人公なの？

それは僕が君のことを一番気に入っているからさ。いつか君メイのクロス作品を書きたいと思っていたんだ。

テ：ふーん。ところでインフィニット・ストラトスの小説って学園恋愛小説だよ。僕にもヒロインがつくの？

ファンの人には大変申し上げありませんが一夏のヒロインは第6外のヒロイン全員をティガにつけるつもりなので君には最低でも6人つくかな。

テ：ちょっと待ってよ。それってどういうこと？

次は主人公と専用ISの紹介です。

テ：ちゃんと説明してよ！！

オリキャラ紹介（随時変更有り）（前書き）

投稿してたら停電でペアに……。

テ：それは残念。でも出来てよかったね。

・・・もしかして前のこと根に持つてる？

テ：……………（後ろからオーラが出ている。）

ぎゃあああああ……！！！！

テ：今回は僕の説明と僕のISの説明だよ。

オリキャラ紹介（随時変更有り）

オリキャラ紹介

ティガ（古代 光）

この小説の主人公。

ノアの力によってI・Sの世界に跳んだ際、15、6歳の青年になってしまった。光線技以外のティガの能力はすべて使える。

のみこみが早く、最初は『G4』（後程紹介）の補助が必要だったが、クラス対抗戦ではISを手足の如く使えるようになっていく。

ノアにより与えられた能力は“ニュータイプ”・“SEED”・“イノベイダー”がある。

ISのスーツはGUTSの隊員スーツで、跳んだ際なぜかこの服を着ていた。

技術力も高く、『G4』から教えてもらった情報から、1から『ハロ』や『須左之男』（後程紹介）を造っている。

国籍は諸事情により日本となっていて、パイロットレベルは未知数である。

ティガ専用IS 『G4』（ティガ命名） 第六世代 全ッ身ルスキ装甲

ノアがティガのために『ガンダム』・『ストライクフリーダム』・『ダブルオーライザー』・『ユニコーン』を1つにしたもの。自我を持っており、音声や立体映像、プライベートチャンネル、オーブンチャンネルで会話が可能。

ISとしては新たな武器を開発できるなどとても優秀。

待機形態はスパークレンス。なぜか変身ポーズをとらないとI

Sを装着できない。

ワンオフアビリティ
モビルチェンジシステム
単一仕様能力『M・C・S』^①

状況に合わせて、ユニットを変えることができる『G4』の第一形態専用の能力である。このシステムは機体だけでなく装備面にも適用される。

ワンオフアビリティ
モビルサモンシステム
単一仕様能力『M・S・S』^②

『G4』の第二形態専用の能力で、『M・C・S』とは違い色々な世界のロボットを召喚できるシステム。ノアにより数多くの世界の情報が入っているため、出せないものはない。最大で五体召喚できる。

第一形態『ファースト』

姿は『ガンダム』に似ているが所々が違う。色はメタリックグレーで、名前の通りISを起動させると、まずこの姿になる。ここから単一仕様能力^{ワンオフアビリティ}によってユニットを変えるが、ティガの操縦技術が上がってからは、この形態にならなくともユニットを展開できるように^{セカンドシフト}なった。第二形態移行すると展開できなくなる。

万能型『ガンダム』

バランスが取れていて、ティガが最も多く使用するユニット。武器の種類はトップクラスでその量はシャルロットのIS『ラファール・リヴァイブ・カスタム?』に匹敵する。相手によって装備を変える、まさに万能型である。得意な戦闘スタイルは砲撃戦。

全距離対応広域殲滅型『ストライクフリーダム』^③

射撃戦を重視した、1対多の戦闘を得意とするユニット。戦い方が特殊なためティガはあまりこのユニットを使わない。スーパードラグーンと呼ばれる自立型移動砲台により味方のサポートも出来

る。機動性も高く、序盤は振り回される。

近接格闘型『ダブルオーライザー』

格闘戦を重視した、ヒット&アウェイ戦闘を得意とするユニット。機動性がユニット1高い。光が『ガンダム』に次いで、多く使用する。『ダブルオーライザー』のGN粒子には通信妨害をする機能は無いが、そのかわり微細ながら治癒機能がある。

短期決戦型『ユニコーン』

射撃特化の『ユニコーンモード』と格闘特化の『デストロイモード』を使い分けるユニット。4機の中で最強だが、その反面負荷が掛かるため使われることが少ない。全ユニット同様に第二形態^{セカンドシフト}移行すると展開できなくなる。

第二形態『??.?』

解析不可能

バイオロイド『須左之男』

動力源がオリジナルGNドライブのグラハム専用機。姿はスサノオで、ISと違い有機物を使った機材を使用しているためISスーツを着なくても動きをトレースする。待機形態はスサノオの兜であり、被って装着する。武器は大型実体剣『舞零武』と小型実体剣『益荒男』である。チャクラムは使用可。

オリキャラ紹介（随時変更有り）（後書き）

テ：作者がいないから僕たちが後書きを担当するよ。

G 4（以後G）：私の情報が少ないのですが・・・。

テ：（作者の手帳を見て）サブタイトルからしてもどんどん公開されるんだね。

G：楽しみです。

・・・次の前書きと後書きには出ないでもらえる？

テ：あれ、もう復活したの。

G：なぜ出てはいけないのですか。

この物語に重要なキャラが出るからさ。

次はティガの敵キャラが出ます。

三話目もよろしく願います。

テ&G：感想もよろしく願います。

第二話

元凶（前書き）

初めまして、????さん。

?????：我もこの小説に出るのか・・・。

その通りです。しかもおいしい役です。

?????：期待しよう。

それでは、第二話始まり始まり。

第二話

元凶

・・・ついにこの時が来た・・・あの時は死ぬかと思ったほどだ。だが我も運がいい。この世界に来てから力がみなぎるようだ。我が“駒”達もしつかりやっているだろう・・・

これであの忌まわしきガンダム達に復讐ができる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・やはり邪魔だなこやつは。我が“地球浄化計画”に必要ない。消滅させるのも面倒だ。何もできないように封印しておこう。

・・・これで問題ない。さて・・・、また何か来たな。今度は何者だ・・・。

「つと。なんなんだ此処は。ってなんで俺がアルケーに!!」

「そう言われると私もシナンジュになっている。不思議だな。」

突如、2つの閃光が出て2つの真紅のMS??MFかもしれない??が現れた。どちらにせよ我と似ていることは確かだな。

会話から推理すると、どうやら人間のようだ。面白い。

「あつ。何だテメーはって、デカつ。なんじゃこりゃ!!」

「初対面の人に。失礼だぞ。」

??ほう、1つ目の方は礼儀正しいそうだな。もう一つの方は戦い好きとみえるな。

「へえ、解るのかい。面白いじゃねえか。俺の名前はアリー・ア

ル・サーシエス。戦争が好きで好きでたまらない、人間のプリミティブな衝動に殉じて生きる、最低最悪の人間だ。」

「サーシエス、もっと優しく自己紹介してみてはどうだろう。私の名はフル・フロンタル。私の世界の「シャア・アズナブル」の器にされた、ネオ・ジオンの首魁だった男だ。」

なるほど、興味深いな。この者たちなら我が計画に必要な……。

「おいおい。俺たちは名乗ったんだぜ。お前も名乗れよ。」

「サーシエス。」

??よいではないか。サーシエスのような者は嫌いではない。むしろ好きだ。

「いいねえ。俺もそんな奴は好きだぜ。」

「全く……。とりあえず名前を聞かせていただきたい。」

??そうだな。我が名は……。

第二話

元凶（後書き）

サーシエス（以後サ）：おい作者。

フロントル（以後フ）：サーシエス。

まあまあ。どうしたのサーシエス。

サ：何でおれたちも出るんだよ。

ちよっとシリアスな展開にしたいからね。
あと、いつから二人は仲良くなったの。

サ：俺とフロントルが出会ったのは、たしか……。

フ：死後の世界でなかったか？

死後つて、どこの戦線だよ。

サ：あいつら今何してるかな？

????：盛り上がっているな。

サ：おせーよ。

フ：サーシエス。

何回言ってるの、そのセリフ？

????:とりあえず、来たばかりだがお開きにしよう。

後書きが長い……。

次はテイガが飛んできます。

????&サ&フ:誰だそれは。

まあまあ。次回もよろしくお願いします。

????&サ&フ:感想よろしく頼む。

第三話 IS学園（前書き）

テ：とうとうこの時が来たね。

やっと君が跳んだ後の話が書ける。

テ：僕もなんだか楽しみになってきたよ。

・・・あの人に会ったよな、ティガは・・・。

テ：あの人って？

後書きでわかるよ。それでは三話目スタート！！

その瞳は、何を見る・・・。

テ：どこの通りすがり！！

第三話 IS学園

「つと危ない。」

目が覚めたと思ったら、なぜか落ちていて地面が迫っていたから、空中で反転して地面に降り立った。下が土でよかった。コンクリートみたいにならなかつたら頭をぶつけて出血していただろう。

「ここがその世界かな。何かローマのコロシムみたいな場所だね。」

僕が降り立ったところは、周りが観客席に囲まれた闘技場のようなどころだった。

「えっ。何でこの服を着ているの？それに、なぜか人間になってる！！」

僕が着ていたのはなぜかGUTSの隊員が着ているスーツで、たしか宇宙服にもなれる高性能のスーツだ。それよりも、僕の手をよく見ると見た感じ15、6歳の青年の手をしていた。さっきまではウルトラマンだったのに……。

それはさておき、まずこの世界のことを調べろ。その侵入者、手を上げる！無駄な抵抗はやめろ。」って、何ですか？

よく見ると、2人の女性がパワードスーツみたいな何かを付けて立っていた。今喋った人が付けているのは接近戦に特化したようなフォームで、もう1人のほうは射撃戦に特化したようなフォームだった。これじゃあ間が悪い。とりあえず相手の指示に従おう。その方が情報を集めやすいからね。

身柄を拘束された僕はどこかの部屋に連れて行かれた。そこで30分くらい待たされている。さっきの人たちは上の人に報告しているんだろうな。

言い忘れていたけど、僕がこの世界に来たのは夕方みたいで、さ

つき息苦しかったから服のファスナーを開けたらなぜかスパークレンス（？）が出てきて、2人に取られてしまった。

スパークレンスのことについて考えていると、扉が開きさっきの女性が入ってきた。年は20代後半で黒いスーツが似合う、俗に言う美人であった。

「お前には色々と聞きたいことがある。質問には全て答えてもらうぞ。」

今の僕の立場は、尋問されている容疑者みたいだ……。

「お前の名は『古代 光』で合っているか。」

今なんと……。僕はティガですけど……。

「着ているスーツの背中にそう書いてある。違うのか。」

この名前……。たぶんノアさんが考えてくれたんだろうな。

「いえ、合っています。」

「そうか。では古代、お前の出身はどこだ。」

「生まれはわかりませんが、日本で育ちました。」

……。嘘はついていないよね……。

「次の質問だ。」

そういうとスパークレンスを取り出して、こう言った。

「お前の持っていたこのISはなんだ。」

「IS？何ですかそれは。」

「ISを知らないだと。どういうことだ。」

しまった。僕はこの世界の間人じゃないということがばれる。どうしよう。

「そのことでしたら私がお説明します。」

今の声はどこから。この人も突然のことで驚いているよ。でもこの部屋には二人しかいないから、喋るとしたら……。まさか！

「初めましてマイスター光。」

僕たちに話しかけてきたのは、紛れもないスパークレンスだった。

第三話 IS学園（後書き）

だああああ！！考えていた所まで行かなかった。

テ：もう夜遅いからね。

千冬（以後千）：全くだ。考えもなしに書き始めるからだ。

いや考えてはいたんだけどね・・・。

テ&千：言い訳しない（するな）！！

・・・ごめんなさい。

G：次は戦闘シーンまで行けますかねえ。

頑張ってみるよ。何せ僕は光を継ぐ者だからね。

次回は初めてのIS起動をするよ。

テ&G&千：感想待っています（いる）。

第四話 新たな出会い（前書き）

本来3、4話は1つの話だったのに……。

テ：そうなるとても長くなるでしょ。

千：長くなると飽きられるからな。

確かにそうだね。頑張って書き直してみるよ。

次は2人の会話に『G4』が加わります。

作&テ&G&千：それではどうぞ

ティガの瞳は何を見る……。

テ：だからどこの通りすがり!?

G：作者は好きですね、そういうネタ。

第四話 新たな出会い

「君が……。でもマイスターはちょっと。」

「でしたらマスターと呼ばせてもらいます。」

「ISが喋るなど、聞いたことがない。」

あちらはあちらで驚いているようだ。でもなんで僕がISを？

『それは、マスターの世界の“神”であるノアが使わしたからです。ちなみにこの回線は、プライベートチャンネルと呼ばれるものです。頭の右後ろで話す感覚です。』

『……こんな感じかな。』

『さすがですマスター。これから重要な話にはこの回線をお使いください。』

「いつまで黙っているつもりだ。」

いけない。つい夢中になって忘れてた。

「すみません。ではマスターの世界について説明させていただきます。」

するとスパークレンスのクリスタル部分が光り、壁に映像が映し出さされた。そこに映ったものは、なんとガギ戦っている僕の姿だった。続いてゴブニュやウエポナイザー、イルド、ゾイガーにガタノゾーアと戦うところが映し出された。あちらはまるで夢でも見ているような顔になっていた。当然ですよ。だってあの巨人と怪獣が戦っているのだから。

「これはマスターがティガとして怪獣たちと戦っていた時の映像です。ティガとはこの巨人のことです。」

まあ間違っではないよね。……この場合、ティガが僕自身なだけで。

「マスターはこの世界の歪みを破壊するために来ました。私はそのパートナーとしてこの世界に来たのです。故に私たちに敵意はありません。」

「……つまりお前たちは別の世界から来たのか。」
話を分かってくれた。これほど嬉しいことはない。

「ならばお前たちにも話さなければならぬ。この世界について。」

そう言つと、この世界について話してくれた。解りやすく要約して言つと、

・この世界にはIS（正式名称インフィニット・ストラトス）と呼ばれる宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツがある。

・ISには核となるコアがあり、それを造れるただ1人のIS開発者の『篠ノ之 束』が行方をくらましているため、467個しかない。

・ISはその圧倒的な性能から軍事転用されかけたが、アラスカ条約により今ではスポーツとして使われている。

・本来ISは女性にしか使えないのだが、『織斑 一夏』はなぜかISを使い、世界で唯一の男性装着者である。

……こんな感じかな。うまく要約できているといいけど。

「さて、こちらの世界のことは話したぞ。次に古代のISのことについて説明してもらおう。」

「マスターとは違う世界の、MSモビルスーツと呼ばれるロボット達がISになつたのが私です。」

なるほどつて、どういうこと。達つて？

「私は『ガンダム』『ストライクフリーダム』『ダブルオーライザー』『ユニコーン』という4機のガンダムタイプのMSからなつているからです。」

すごいね。でもなんで僕の考えがわかるの？

『見え見えだからです、マスター。』

そんな……。僕つて思っていることが顔に出るのかな。

「とりあえず、君の名前を教えて。」

「まだ名前が決まっていなくて……。」

「そうなんだ。だったら4機のガンダムという意味の『G4』ってどう?」

我ながら最高のネーミングだよ。

「いや。最高とは言い難いな、そのセンスは。」

なっ、あなたにまで解られるとは。これはナンセンスだ!!

「でも嬉しいです。マスターが付けてくださったので、ありがとうございます。使わせてもらいます。」

「では『G4』。お前の情報を開示してもらおうか。」

「わかりました。それでは。」

『G4』はまたクリスタル部分から映像（今度はホログラムだ）

を出した。スペックが表示されている4つの機影がガンダムらしい。

・・・かつ、かつこいい!!

それを見ていた隣の女性は

「これからアリーナにて『G4』の性能を検証する。実践形式だから手を抜くなよ。あと私の名は織斑千冬だ。ここでは織斑先生だ。わかったな。」

・・・ということはここはISの操縦を教える学校で、織斑先生はその教師なんだ・・・。

第四話 新たな出会い（後書き）

次はやっと『G4』がその姿を見せます。ウェイクアップ!!

テ：もう慣れちゃったよ。

G：でもそうすると、相手はあの・・・。

千：いや、私ではないぞ。

そうですね。相手はあの先生です。

千：なるほど。そういうことが。

テ&G：????

今日の後書きはこれで終わり。

次回は初めてのISです。

千：感想を待っている。

テ&G：だから誰ですか。説明してください。

第五話 初めてのIS（前書き）

】『G4』の説明が追加されました。】

テ：やつと『G4』の姿が見られるんだね。

読者の皆さんは脳内で映像化してください。

G：ところで模擬戦の相手は誰なんですか。

まあそれは本文を見て確認してね。

それでは 第五話 初めてのIS 始まり始まり。

第五話 初めてのIS

織斑先生はISの動かし方を簡単におしえてくれた。ちょっと難しいけれど『G4』が補助をしてくれるから、とても嬉しい。

そうこうしていると、アリーナに到着した。ロシアムに見えた所はアリーナだったんだ。

「ISを装着させたら、対戦相手が来るまで少し待っている。余計な真似はするな。お前たちを信用していないわけではないのだが、こうしないと、上がうるさいからな。」

そういつと織斑先生は行ってしまった。まあ仕方ないことかな。事情が事情だからね。

「とりあえずISを装着させましょう。自分がISになる考えです。」

僕は、自分とISが一体化するというイメージを思い浮かべると、ISが装着され・・・なかった。あれ、おかしいな。イメージし間違えたかな。

「！！1つ言い忘れていました。」

「どうしたの、『G4』。」

「私の場合は特別みたいで、ノアさんから「なぜか変身ポーズをとらないと装着できない」と言われたことを忘れていました。すみません。」

「いやいや、大丈夫だよ。」

しかしこれはまた面倒なことになったね。仕方がないから、僕は右手にスパークレンスを持ち、右腕と左腕を前でクロス（右腕は地面に垂直、左腕は地面に平行）させ反時計回しに回して右腕を上に出し、「G4〜〜〜！！」と叫んだ。すると光が体を包み、ISの姿を形成していた。

このISはどうやら全身装甲でツインアイが輝くメタリックグレ
ールのISだった。フルスキ

「この形態は第一形態『ファースト』です。ここから単一仕様能力の『M・C・S』によりユニットを変えるのですが、初めてなのでまずは『ガンダム』にしてみました。」

たしか『ガンダム』はつと……。ああこれか。僕はこのISが『ガンダム』になるイメージを思い浮かべるとISが光り輝いて、『ガンダム』を形作つた。

「これが『ガンダム』。やっぱりかっこいい!!」

「私的には『ダブルオーライザー』かと……。!!今対戦相手が来ました。」

上空を見ると、あの時織斑先生と一緒にいたもう1人の先生 だと思う がいた。

「古代君のIS、たしか『G4』でしたっけ？全身装甲なんです
ね。かっこいいな。」

「あ……。」

「あつ、ごめんね古代君。私はIS学園の1年1組の副担任の山田真耶です。山田先生って呼んでね。」

……。何故か、先生に見えない。あの時は色々な意味で忙しかつたからしつかり見てなかったけど、山田先生は多分20代前半だと思つ。何で“多分”かって？だって見た目がまだ少女らしいからだよ。何か“背伸びしている女子”みたいで大人に見えないんだよ。

「それではこれより、古代光対山田真耶による模擬戦を開始する。双方指定の位置で待機。」

この声は織斑先生か。どちらかと言つたら織斑先生と戦つてみたかつたな。山田先生が付いているのは『ラファール・リヴァイブ』という第二世代のISのようだ。見た目通り射撃戦に長けているISのようだ。

「それでは始め。」

アラームが鳴り、模擬戦がスタートした。山田先生はその姿からは想像できないような技量で攻めてくる。ライフルの一撃一撃が精密で、よけるのが精一杯だ。ちいっ、被弾した。

「何か武器はないのか。」

そう言い自身のISの装備欄を出すと、とてつもない量の装備が出てきた。どれにするか迷っていると『G4』がビームライフルを提示してきた。

「これなら！」

すぐさま具現化させようとするが、なかなか出来ない。

「くっ。ビームライフル!!」

武器の名前を呼んで出すのは初心者のやり方だが仕方ない。ビームライフルを右手に持ち、狙いを定めて引き金を引く。銃口からピントの閃光が飛び出し、山田先生に向かう。威力？もちろん最大だよ？

山田先生はかろうじて直撃は避けたが、掠ったことでシールドエネルギーが削られる。ISの戦闘では先に相手のISのシールドエネルギーを0にすることで勝ちとなるきわめてシンプルな勝利条件である。ちなみに装着者は絶対防御により守られるため、命に別状はない。そんなことだからさらに2射ビームライフルを撃つ。どんなに早く回避しても、光と同じ速さのビームはそう簡単に避けられるものではない。山田先生はさらに掠り、3分の1ほど削られた。

「とりあえず3分の1は削ったか。それにしてもこのビームライフル、なんて威力だ。」

「ビーム兵器!!まだトライアル段階なのに。」

どうやらノアさんはとんでもないISを僕にくれたようです。

「どちらにせよ、このまま攻め込む!!」

バックパック（ブースター）についているビームサーベルを左手に持ち、ビームライフルの威力を落としてから連射しながら接近する。連射したことによりその場からあまり動かさなかったおかげで、接近した勢いのまま体当たりし、相手を怯ませる。そこに2回サーベルで真一文字に斬る。シールドエネルギーはさらに削れて残り3分の1となった。・・・かっこよく決めようかな。

『G4』は一度間合いを取って、再び接近する。『ラファール・リヴァイブ』は近づけないために2基のミサイルを『G4』に撃ち込むが、『G4』は速度を緩めない。ミサイルはそのまま『G4』に進み、当たって爆発した。爆発の所為で煙が立ち込める。

やったのでしょうか。彼はミサイルに“自ら”当たっていったように見えたのですが。試合終了のアナウンスが聞こえないということとは終わっていないということですので、気は抜けられません。それにしてもこの煙の量は何でしょう。ミサイルの火薬の量なら少ししか出ないはず。まるで“意図的”に出しているようにしか……まさか!!!

『警告。敵IS急速接近。』

警告表示が出て対応しようとしたときには、すでに白いISが目の前に迫っていました。

待っていました!!!ミサイルが直撃する瞬間、“ライフル”を投げたミサイルを破壊。その後、大量の煙幕を出して姿をくらましてから、荒業だけど3秒の間ISの機能を停止、センサーに掛からない様にしたんだ。相手はベテランだから動かないことを予想しての戦術です。まさかこれほどうまくいくとは思ってもみなかった。とりあえず3秒後にISを再起動、ビームサーベルを両手に持ち最大推力の6割で接近。そして相手のISにクロス斬りを決めてシールドエネルギーを0にしました。一撃に重みをかけ過ぎたのか、山田先生は落ちていった。あのままじゃ危ないから、最大推力で山田先生の近づき膝裏と背中を腕で支え、落下速度を落とした。いくら絶対防御が発動してもいい思いはしませんしね。

『勝者・古代光』

アナウンスが入り、試合終了のブザーが鳴った。そうか、勝てたのか。

「ここ、ここ古代君っ／＼／＼そそそろそろ下してもらえないかな／

／／

しまった。減速させてからアナウンスを聞くまでずっとこの体勢だった！こんな恰好じゃ、山田先生は恥ずかしいに違いない。とりあえず顔を真っ赤にしている山田先生を下してから模擬戦のことについて聞いてみる。

「あの・・・、僕のIS操縦は合格ラインを超えていますか・・・？」

しかし、心このあらずなのか放心状態に陥っていた。

「マスター、今の状態では聞けないと思いますのでとりあえず織斑先生のところへ行きましょう。」

「それもそうだね。あんな恥ずかしいことをさせちゃったからね。」

「・・・はあ、もしかしてマスターは天然なのでしょうが・・・。」

「あれ、『G4』今何が言った？」

「いいえ何も、それより早くいきましよう。」

「???どうしたんだらう。さっきからずっと急かしてるようにしか見えないけれど。まあとりあえずは織斑先生のところへ行こう。」

「マスターは、罪深い人です。」

「G4」の咳きは誰にも聞かれなかったのであった。

第五話 初めてのIS（後書き）

山田先生のファンの皆様、誠に申し訳ありません。どうしても主人公に『フラグ』を立てたかったです。

テ：あとの5人は誰なんだろうねえ。（笑）

ティガ、怖いからやめて。

G：そうですね。怖がっているではないですか。

『G4』、庇ってくれてありがとう。

G：投稿できなくなったらどうするんですか。

・・・ひどいよ・・・。

まあそれはさておき、今回はインフィニット・ストラトスの本来の主人公が出ます。

テ：とうとう本編に突入だね。

G：これからが楽しみです。

今回は、第六話 転入です。アドバイスなどを待ってます。

テ&G：感想もよろしくお願いします。

?：俺はいつになったら出れるんだ？

第六話 転入（前書き）

テ：そういえばこの前の戦闘描写で煙の中から突撃するっていうのがあったけどどんな感じ？

簡単に言えば、ガンダム00ファーストシーズンの2ndOPでエクシアがアインの砲撃を盾でガードした時、盾が壊れて煙が出たでしょ。そのあと煙の中からGNビームサーベルで攻撃するところがかっこいいと思ったからそれを再現してみた。

真耶（以後真）：そうだったんですか。・・・だからかっこよかったんだ。

光（テ）：山田先生、あの時は大丈夫でしたか。

真：あつ、いやっ・・・その・・・。

ほらほらそこで会話に花を咲かせない。もうすぐ始まるんだから。それでは第6話スタートウ！！

第六話 転入

あの後、僕はIS学園に入学した。たしかクラスは1-1だったかな。でもそのクラスに男のIS操縦者の『織斑一夏』がいて良かった。クラスメートが全員女子だったら、胃に穴が開く思いだったろうな。でも何故僕がIS学園に入学した理由は、1つ。僕は別世界から来た人間なので戸籍が無いこと、2つ。そもそも僕は人間ではなかったので、お金が無いこと、3つ。僕が世界で2人目の男性のIS操縦者であること、この3つのせいで、僕は各国から狙われる事となったので、IS学園に入るほかなかったんだ。ちなみに戸籍は日本でお金は政府から直々に支給されるそうだ。・・・まあ使うといつてもPCや携帯（スマートフォンというらしい。PDIよりに性能が低いけど）、普段着（『G4』に選んでもらった）などを買ったただだからそんなにいらないけど。・・・いや、色々なものを造りたいから必要か。『G4』の情報にMSのことが大量に入っていて、僕の技術者魂に火が付いたんだ。・・・ホリイさんに毒されたかな・・・。

まあそれはともかく、僕は織斑先生と山田先生に連れられて部屋の前に着いた。その間山田先生は顔を赤くさせていたけど、風邪を引いたのかな。お体は大切に。

「ここで待っている。」
そういうと先生方は部屋に入っていた。そのあと『ペアアン！』と、どう考えてもその音が出るようなものは持っていないはずなのに、そんな音が響いた。

「では入ってこい。」
織斑先生にそう促されて部屋に入ると、視線が一斉にこっちに向いた。結構怖い。大量のクリッターも怖いものだが、これもまた怖い・・・。

「自己紹介しろ古代。」

「はい。僕の名前は古代光です。趣味は機械の分解に、解析、設計に組み立てです。これから一年間よろしくお願ひします。

すると、クラスの皆はシーンと静まり返った。こんなマニアックな趣味を公開したからかな。失敗したなあ。

「き」

「き？」

「きやああああ！！」

何この声！まるで空気が振動してるよう・・・、ってホントに振動してる！？

「2り目の男子よ。」

「織斑君も美形だけど、古代君もなかなかイケメン！！」

「金色の不死鳥で宇宙の彼方まで連れてって〜！！」

それってシーラ？この世界に怪獣はいないよね。戸惑う僕は山田先生に助けを求めるが、やっぱり顔を赤くして放心状態になってる。やっぱり頼るのは織斑先生に頼るのか。織斑先生、助けてください。

「黙れ馬鹿共！！」

すると叫んでいた女子たちは一斉に黙る。織斑先生凄い。イルマさん並みのカリスマ性だ。

「古代の両親は事故で他界。そのあとは孤児院で暮らしていたがISの適性検査で適性があることが判明。しかし異例なため今まで隠していたが織斑の出現によりこのたび入学することになった。古代、お前の席は窓側の空いているところだ。」

なんですかそのバツクストーリー。こじつけにもほどがありますよ。でもそのカリスマ性のためかみんな信用しちゃってる。さすがというべきか。

「それではこれでSHRを終わる。」

こうして僕の学園生活が幕を落とされたのである。

休み時間になるともう疲れる疲れる。1時限目は数学でまあよかった。だけど授業が終わった途端に女子たちが僕の席まで来て、2

時限目の国語まで延々と自己紹介をされた。名前は覚えてなかった。当たり前でしょ、クラスメートなんだから。

「ちよつといいか。」

また女子たちが来るのかと思ったら、女子としてはやけに低い声で呼ばれた。声のした方を向くと、本来『世界で唯一の男性IS操縦者』の『織斑一夏』がそこにいた。

「古代光だっけ。俺の名前は織斑一夏だ。よろしくな。」

「こちらこそ。それに僕の話は光でいいよ。」

「俺のことも一夏でいいぜ。」

こうして織斑一夏との出会いをした。その際握手をしたがどこかでシャッター音が聞こえたような。だけどこの時、僕は知らなかった。男のIS操縦者の生写真は、裏市場で高値がついていたことに。

4時限目が終わり、昼食の時間になる。お昼御飯を食べるために食堂へ向かおうとしたが、一夏が呼び止めた。

「光、お前今から飯食いに行くか。」

「そのつもりだけど、どうしたの。」

「一緒に食おうぜ。紹介したい奴もいるし。」

「いいよ。じゃあ一緒に。行こう。」

「ああ。」

すると一夏は、窓際の席（僕の3つ前の席の）女子を誘いに行った。女子の中では背が高い方に入り、黒髪のポニーテールが特徴的だった。彼女は躊躇っていたが、一夏が手を引いて強引に連れてきた。一夏って強引だね。彼女嫌がっ……、訂正嫌がってるどころかむしろ嬉しがってる。もしかして……。

まあそんな感じで3人で食堂へ行った。その間僕の居場所がなくで大変だった。だってそうでしょ？好きな人の近くににいるのに、見ず知らずの人がいるんだから焦った焦った。食堂では色々な学年の女子たちがたくさんいた。まあ女子高だからそうだよな。ちなみにこの食堂は食券システムらしく、彼女は焼き鮭定食、一夏は味噌鯖

定食、僕は一度食べた見たかった麻婆豆腐定食を注文した。

「紹介するよ。こいつはおれの幼馴染の筈だ。」

食事して早々彼女のことを紹介した。なるほど幼馴染ねえ。

「一夏、勝手に紹介するな。」

「まあいいじゃねえか。」

「とりあえず僕のことにはSHRで紹介したよね。」

「篠ノ之筈だ。」

あれっ、たしか『篠ノ之』ってISの製作者と苗字が一緒だったような。まあどうでもいいや。

「ここは私も名乗った方がいいのでは。」

そうだね・・・って、『G4』喋っていいの？

「あつ。」

あつて。ほら、2人が戸惑ってるじゃん。

「？誰だ。今声がしたんだけど。」

「・・・はあ。驚くにしても小声でね。それじゃあ『G4』、2人に挨拶して。」

「わかりました。私はマスターである光のIS『G4』です。今後、お見知りおきを。」

『G4』が挨拶をすると2人は驚いた顔になった。

「なっ！ISって喋ることができるのか？どうなんだ筈。」

「私に聞くな。姉さんには言われてなかったからな。」

やっぱり妹さんだったか。でもなんか訳有りのようだから、あえて追求しない。

「このISは、他と少し違って特殊だから話すことができるんだ。けど、物は話すことができないと教えられてきたから今まで話せなかったんだ。だからIS学園に入る時は他の人と話したいって言ってたんだ。」

これはあながち嘘じゃない。本気で『G4』は周りの人と話をしたかったのか、入学すると言った時はとても喜んでいた。

「そういうことだから一夏、篠ノ之さん。僕たちだけのときは」

G4』と話をしてください。お願いします。」

あの時は本気でそう思い、頭がテーブルに付くほど下げてお願いしていた。

「・・・わかった。それじゃあ午後9時にお前の部屋に行くよ。

部屋はどこだ？」

「えつと・・・、1026号室だよ。」

「なんだ俺たちの部屋の隣じゃん。それなら俺たちも行きやすい。」

「ありがとう2人とも。」

「別に礼を言われるほどではないがな。それと私のことは箒でいいぞ。」

「わかった。それなら僕のことも光でいいよ。」

「ありがとうございます、マスター。」

『G4』も喜んでいるし、僕の友達も増えたから嬉しいけどね。

そんなこんなで5時限目が終わりそうになっていた。ちなみに先生は織斑先生で一夏とは姉弟らしい。全然似てないよ。

「少し早いが授業を切り上げる。この余った時間で少し話し合いたいと思う。どうだろう、もう一度クラス代表を決めてみないか。」

この時、クラス全員（光を除いた）は『どうしてするんですか？』という目で織斑先生を見た。

「こいつより、転校生の方がデキる。それは間違いない。」

先生はそういつて一夏を指した。一夏、クラス代表だったの！？それよりも僕の方がデキるってどういうこと？って、この場が盛り上がってきたよ。どうしよう・・・。

「それならば、私セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが相手して差し上げますわ。いくら一夏さんより強くても私に勝てなくては何りませせんわ。」

「いいだろう。では明日第3アリーナにて古代とオルコットの模擬戦をする。各自遅れないように。」

「ちょっと待ってくださいよ。勝手に決めないでください。色々なことを聞きたいのに……。」

いくら光が言ってもこの状況では誰も聞いてはもらえないのである。むろんもう一人も……。

「……はっ、俺の意見は全く無視かよ千冬姉え。」

第六話 転入（後書き）

ここからは、ISの登場人物とティガ扮する光が雑談する光の部屋をお送りします。

光：どんな話をすればいいの。

ぶつちやけ、何でもいいです。関係しないことでも。それでは今日のゲストをお呼びしましょう。今回は織斑一夏です。

一夏（以後一）：よう、光。

光：それじゃあどんな話をする？

一：そうだな。じゃあ光の趣味で機械の設計があったら。どんなのを作ったことがあったんだ？

光：例えばこの PDIとか？

一：なんだこれ？

光：これはいわば携帯みたいな物で、他にもレーザーや熱源探知、さらには放射能探知ができるんだ。

一：すげーなこれ。そういえば放射能のことで思い出したんだが、原発の稼働のことなんだけど本当に大丈夫なのか？

光：まあこれは僕の考えだけど、東北の原発は地震に次いで津波が押し寄せてきたから原子炉が耐えられなくなり、水素爆発したと

思うからそんなに危険じゃないと思うよ。

一：だといいけどな。

光：それはそうと、一夏ってクラス代表だったんだ。

一：まあ成り行きだけだな。

光：代表だからやっぱり強いんだろうな。一度戦ってみたい。

一：よしてくれよ。俺はそんなに強くない。

光：そうなのか。それじゃあ、一緒に特訓しようぜ。

一：ああ、いいぜ。

お話のところ申し訳ないけどそろそろ時間だからこれにて終了
）。次のゲストは誰になるのでしょうか。

次回は第七話 対セシリア戦です。

光&一：感想待ってます（待ってるぜ）。

第七話 対セシリア戦（前書き）

【『G4』の説明が追加されました。】

今度解禁されたのは『ストライクフリーダム』。好きなガンダム
のうちの1つだよ。

テ：結構更新率が高いね。よく頑張るよ。

脳内をトランザムして頑張ってるからね。

G：どうでもいいですから、早く始めてください。

わかったよ。それでは第七話始まり始まり。

第七話 対セシリア戦

今日の授業も終わって僕は自分の部屋である、1026号室に戻った。IS学園の寮部屋は本来2人部屋なのだが、僕が突然やって来たことにより部屋が空いてなかったため、仕方なく1人で使っているんだ。お陰で色々な機材を持ち込めて結果オーライなんだけど。。。

とりあえず、9時から一夏たちが来るので少し整理しないとけないな。

整理し終わった時には8時を過ぎてたので、夕食を簡単に済ませて待ってた。暫くすると、扉を叩く音が聞こえたので開けてみると、一夏たちが来ていた。ちょっと早いけどいいか。

「来たぜ、光。」

「夜遅くにごめんね。待ってたよ。」

2人をベッドに座らせ（もちろん一夏と箒は同じベッドの上だよ）

、4人 正確には3人と1つだけで話始めた。

「改めて、俺の名前は織斑一夏だ。よろしく。」

「篠之乃箒だ。」

「初めまして。マスターである古代光のISの『G4』です。よろしくお願ひします。」

「やつぱりよそよそしいよ。もっとやわらかくなれない？」

「やわらかく？私は金属ですから熱しないとやわらかくなりませんが。」

いや、そういうことじゃないんだけど。。。

「おもしろいな、光のISは。」

「喋るISは聞いたことがなかったが、悪くないかも知れないな。」

よかった、2人にはわかってもらえて。『G4』の装着者にとっ

てはこれほど嬉しいことはない。いい友達を持てた〜。

「そういえば、光は明日セシリアと戦うんだろ。」

「まあ、そうなるね。オルコットさんは代表候補生だから強いと思うな。」

「セシリアのISの『ブルー・ティアーズ』は強いぜ。俺も戦ってみたけど、代表候補生だけあるよ。」

これは苦戦するかな……。少し『G4』に聞きたいことがあるけど、筈と話してるから聞くに聞けないし……。

「まあ明日はがんばれ。光なら勝てるさ。」

「ありがとう一夏。あつ、もうこんな時間。そろそろ部屋に戻らないと先生に怒られるよ。」

「それはまずい！ここの寮長は千冬姉なんだよ。筈、早く戻るぞ。」

それから早かった。一夏が筈の手を引いて脱兎の如く帰って行った。一夏速い……。

「マスター、どうしますか。」

「そうだね。……もう寝るか。」

僕たちは明日に備えて早めに寝ることにした。御休みなさい。

日付が変わって

僕は今第3アリーナのAピットにいる。今日の1時限目は僕とオルコットさんの模擬戦にあてられているから、皆が観客席に見に来てるんだ。

「大丈夫か光。」

「今朝から頭のここがなんか……。こつ……。とにかく変なんだ。」

なんでだか知らないけど、朝から後頭部の方が頭痛とはまた違う痛みに悩まされているんだけど、理由がわからないんだ。『G4』に聞いてみても、「おめでとうございます、マスター。」って言う

てて何がいいのか分からない。言い忘れていたけど、今ピットにいるのは僕と一夏と篤だけだ。2人は僕を応援しに来てくれた。そのことだけでも嬉しい。

『古代さつさと位置に着かんか。』

すいません織斑先生、まだ痛みが晴れていなかったのです。痛いけど行くか。僕は『G4』を取り出して変身ポーズを取った。後談だが、この装着方法について一夏からはかっこいいなど、篤からは面倒だなと、織斑先生からは鍛えてやるから放課後私のところ来いなどさまざまなことを言われたそう。特に織斑先生を説得するのに2時間掛かったことをここに記しておこう。

戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り

背中の形が『ストライクフリーダム』みたいだな……。

「フルスキン全身装甲のISだと!!」

「フルスキンねえ。全身装甲ってそんなに珍しいの?」

「ああ。ISって大腕と脚に装甲を付けるからな。」

そうだったんだ。そんなことはいいから……。

『『G4』、今回は『ストライクフリーダム』で行ってみない?』

『何を言っているのですか。マスターにはまだ早いです。今回も『ガンダム』で。』

『まず4機全て使ってから慣らしていこうよ。『ガンダム』ばかりじゃそれに慣れて、他のユニットを使えなくなってもいいの?』

『わかりました。マスターの考えで行ってみましょう。』

僕はある時と同じように『ストライクフリーダム』と一体化するイメージを思い浮かべた。すると僕は『ストライクフリーダム』を形作った。そしてVPS装甲を起動させて、メタリックグレー色から白や赤に青のトリコロールカラーに変わった。

「かっこいい光の『G4』は。」

「GUNDAM……、ガンダムと言うのか。」

「これは『ストライクフリーダム』。ガンダムはOSの頭文字をとったものだよ。」

そろそろいかないと……。

「光」

「どうしたの2人とも。」

「全力で戦ってこい。」

「そして勝ってこいよ。」

「……ありがとう。」

僕はカタパルトに行き、山田先生がカウントを数える。

「古代光、フリーダム、行きます!!」

カタパルトから発射され、僕はアリーナを飛んだ。

つく。頭が……。あまりの痛さに押さえたいけど、我慢して定位置まで進む。

「あら、あなたのISは全身装甲フルスキンですの。」

「……ISって、そんな風に装着されるらしいから僕のは珍しいらしいよ。」

ほとんどのISってああいう風に装着されるのか……。そんなると目のやり場に困る。だって……。ねえ。僕の口じゃあ言えないよ。

「でも相手がどんなISを使おうとも、全力で戦わせてもらいます。」

『敵IS、射撃体勢に移行。ロックオンされています』

どうやら『ブルー・ティアーズ』は射撃に特化したISのようだ。『それでは始め。』

開始のブザーが鳴り、試合が開始された。オルコットさんは『スターライトMK-?』で撃ってくる。レーザーをぎりぎり回避していくが、『ストライクフリーダム』の機動性が速すぎて無駄な回避をしてしまう。くっ、撃たれた。でも防戦一方では勝てない。ここで反撃しよう。

僕は両手に装備されたビームライフルでオルコットさんを狙う。2つのビーム（『ガンダム』のビームライフルの全力の半分と同じ威力）が向かっていく。ビームが当たりシールドエネルギーが削れる。・・・なんだろう。相手の動きが先まで見える・・・。

「っ、ブルー・ティアーズ!!」

すると羽のところから4基のドラグーンらしきものが飛び出し、僕を狙ってきた。これは変則的な動きをして相手を混乱させ、一気に撃ち込む武装だ。・・・本来なら避けられないはずなのに、なぜか動きが見えて避けられる・・・。どうしたんだ僕？そっいえば頭の痛みが消えてる。

「何故当たりませんか!?!」

こっちだつて困っちゃうよ、軌道がわかっちゃうんだから。・・・ちよつと待てよ。僕がクラス代表になればたくさんの人を守れるかもしれない。なら!!」

「これで終わりにします。」

ドラグーンを4基パージしてビットを狙い、全て破壊する。

「『ブルー・ティアーズ』が!!」

僕はドラグーンを一度戻してから腰にあるビームサーベルを取り出して、急接近する。これでビットはないはずだ。これで・・・。

「かかりましたわ。」

なにっ、どういうこと? 4基だけじゃないのか。

「おあいにく様、『ブルー・ティアーズ』は6基ありましてよ。」

すると腰のところからミサイルが2つ迫ってきた。だめだ!! 間に合わない!!

すると頭の中で種が割れるような感覚に陥り、思考がクリアになつていった。今ならできる!

僕はビームサーベルでミサイルの先端を切つて回避した。観客は皆動揺の声を上げた。どうやらさっきの芸当はできないものだと思つていたようだ。まあ、僕もその一人だけだね。

「あなた、どうしてそこまで戦えるのですか。」

ふと、相手であるオルコットさんが聞いてきた。今戦っている最中なのに。ただどこかで答えないといけない気がした。

「僕には、守りたいものを守ることができなかったことがあったんだ。だからもうそんなことをしないように、守りたいものは全力で守る。そのためにも僕はここで負けるわけにはいかないんだ。」

再度ビームサーベルを握りなおして、突撃する。

「僕には守りたいもの、守りたい世界があるんだああああ!!」

ビームサーベルで『ブルー・ティアーズ』を攻撃、シールドエネルギーを0にしていく。

『試合終了。勝者』

古代光。』

僕はオルコットさんに勝った。今の僕にはそれだけわかれば十分だった。とりあえずオルコットさんの手を引いてピットへ戻っていく。それにしてもあの感覚はなんだったんだろう。

セシリアの顔が光に手を引かれているとき赤くなっていたのを、光は気づかなかった。

第七話 対セシリア戦（後書き）

今回の光の部屋のゲストは一夏にぞっこんの篠之乃箒です。

箒：ど、どどどどどいうことだ。

光：まあまあ、作者はほっというて。とりあえず話をしようよ。

箒：そ、そうだな。じゃあ質問するぞ。

光：何でも聞いて。答えられるだけ答えるよ。

箒：何であのBT兵器を避けられたんだ？一夏でも避けるのに精一杯だったんだぞ。

光：僕もよくわからないんだけど、見えただよね動きが。

箒：そついうものなのか？

光：さあ、どうだろう？そうとしか言えないから……。それじゃあ僕も聞いていい？どうして一夏が好きになったの？

箒：お前もか！！（木刀持ちながら）

光：いや、そついうことじゃないんだけど。

箒：煩い！！（木刀を振り下ろす）

光：うわっ、危ない。（ウルトラ真剣白羽どり炸裂）

何かとすごいよね光は。おや、もう時間。今日はこれまで。次は誰が来るのでしょうか。

光：ちょっと、他人事だと思わないで助けて！！

第八話 光の休日（前書き）

やっと投稿できた。

テ：たしか研修でアメリカに行ってたのって24までだから、25以降に投稿できたんじゃないやあ・・・。

実は多分時差ボケで夜早く寝ちゃって・・・。

G：それで投稿できなかったと。

ごめん。でもネタはいっぱい考えているから。それでは第八話始まりです。

第八話 光の休日

今日は学園に入って初めての日曜日。日曜日は休日だから、授業が無くて暇なんだ。何して一日過ごそうかな。そう考えているとドアがノックされた。誰だろう。まあ、待たせるのも悪いから開けてあげようっと。そう思い、僕がドアを開けるとそこにはイギリス代表のセシリア・オルコットがいた。

「おはようございますわ光さん。」

「おはようオルコットさん。」

「セシリアで構いませんわ。」

いいの？そういう呼び方は友達になってからって聞いたんだけど。まあ本人がそう言うのなら。

「じゃあセシリア、朝からどうしたの。」

「その・・・も、もしよろしければ、今日一緒に買い物に行きませんか？」

買い物か。買いたいものはすべて買ったからな・・・そうだ。あれを作るための部品を買って来よう。買い物するって言っても、買うものが無ければね。

「いいよ。僕も買いたいものがあつたからね。」

そう言うと、セシリアはパアッと顔を輝かせた。それほど買い物に行きたかつたんだ。

「マスター、もつと女心がわかるようなだ努力をしてください。」
そうかな・・・、ってちよつとG4!!今人前で喋らなかつた？セシリアも誰が喋つたのか周りを見てるじゃん。・・・なんでこつちを不機嫌な顔で見るのセシリア。

「マスターの部屋には誰もいません。初めましてセシリア・オルコット。私はマスターのISの『G4』です。以後お見知りおきを。」

「ISにAIが搭載されているなんて!?!」

やっぱりそういう表情になるんだ。でもまだましな方だよ。山田先生にこのことを教えたら、放心状態になったから……。

「まあ、とりあえず買い物に行こうセシリア。」

「えっ?・・・は、はい!行きましよう光さん。」

まあ何とか誤魔化せたかな?それはともかく待ってセシリア。まだ準備できて無いから、そう手を引つ張らないで〜。

余談だけど、そのあと僕の部屋に一夏が「俺と模擬戦をしてくれ」と頼みに来ていたらしい。

今日はとてもいい日ですわ。だって光さんと一緒に買い物をするのですから。私のは少し時間が掛かるため、先に光さんの買い物を済ませてから私の買い物しますの。

「もうすぐ着くから待ってね。」

何を買うつもりなのでしょう。そう私が考えていると目的地に着いたようです。ジャンクショップですか?電気製品なら違うお店でも買えますのに。

「あつ光さん。この前は毎度。」

「やあガロード。今日も買い物できたんだ。いろいろ仕入れた?」

「もつちろん。ここはそれが売りですから。」

光さんは色々な方とお知り合いなのですわ。私も見習わないと。

「ガロード、お客さん?」

「そうだよティファ。この前の光さん。」

「久しぶり。今日も来たよ。」

あら?先ほどからお二人の保護者が見えないようですが。まあ、詮索されたくない過去は誰にもありますから……。

「今更ですけど、そちらの人は光さんの彼女ですか?」

な／＼。たしかに私は光さんのことが、……ってそういうこ

とではなくてですね。

「違うよ。セシリアは僕の友達。紹介が遅れたね。イギリスから来た代表候補生のセシリア・オルコット。こっちはこのお店の店主のガトード・ラン。そしてこっちはティファ・アディール。」

「はじめまして。」

「よろしくお願ひします。」

「こちらこそよろしくお願ひしますわ。」

・・・光さん、少しは考えてくださいまし。

あれ、セシリアどうしたの？そんなに顔を膨らまして。ガロードとティファは苦笑いしてるし。

『・・・やはりもつと努力すべきです。』

頑張ろうかな。女心がわかるための努力。

「それでどうするの光さん。」

「あつ、ごめんごめん。それじゃあこれとこれ、それからこれを各10個ちょうだい。」

「毎度。それじゃあとでES学園に送りますね。」

これで終わりつと。じゃあ次にセシリアの買い物をしよう。

「セシリアは何を買うの。」

「私は休日に着る服を買いたいのですが、どれが似合うのか分かりませんので光さんにアドバイスを貰ってもよろしいですか。」

なるほどね。つまりコーディネートをしてと言っているのか。

「いいよ。それじゃあ行こうか。」

「はいっ！！！」

よっぼどうれしいんだね。僕的にはその速度で僕の腕を引っ張るのをやめてほしいんだけど・・・。

本当に今日はいいい日ですわ。なぜなら光さんに服を選んでいただ

けるのですから。

「じゃあここで待ってて。選んでくるよ。」

そう言って入って行ったのですが、恥ずかしくないのでしょうか。
「ラクスさん。相良さんにプレゼントするものを買いたいんです
けれど何を買ったらいいのかわからなくて。」

あら？何か話し声が聞こえてきましたわ。どうやら私と同じ境遇
の人の話のようです。

「テツサ。人は誰でも贈り物を貰えば嬉しいのですよ。一生懸命
に選べば大丈夫ですわ。」

「ありがとうございますラクスさん。」

「どういたしまして。なら一緒に探してあげましょうか。私もキ
ラにプレゼントを差し上げたくなってきました。」

「はい。」

心を込めた贈り物ですか……。でしたら私も光さんに何か贈り
物をしないと。私は光さんに対する贈り物を買うために探しに行き
ました。

あれから20分の間、僕はセシリアの休日に着る服を探していた
んだ。4着ぐらい見つけたんだ。だって『G4』が『！！マスター、
女性が着る服ですのだから選ばないといけませんからね。』と
か『ここは男性が女性のために買ってあげるものですよ。』ってい
うんだもん。ところで、『G4』が人みたいになっけてきてるのは思
い違いだろうか。

会計を済ませて待たせてた場所に行くとセシリアがいなかった。
トイレかな。

「すみません！待たせてしまいましたか。」

しばらくするとセシリアが全速力で戻ってきた。あれ、手に何か
持ってる。

「それは何。誰かにあげるもの？」

「あの・・・、これは・・・。」
だんだん歯切れが悪くなっていくけどどうしたの。
「まあこんな時間だし、とりあえず戻ろう。」
「えっ？そ、そうですわね。帰りましょう。」
セシリア、ちよつと顔が赤いよ。風邪でも引いた？
『・・・マスター、帰ったら女心がわかるまで寝させませんよ。』
それだけはやめて〜！！

「あ〜〜！せつしーとライライが一緒にいる〜。」
学園に戻ってくると同じクラスののほんさんと出会った。何で寝巻がよりにもってガゾートっぽいの！！着にくくない？？って尻尾が動いてる！！どうなってるのそれ。それに

「セシリアだからせつしーはわかるけど、なんで僕はライライ？
なんか昔中国からきたパンダの名前に似てるんだけど。」

「ライライは名前が光でしょ。光っていう字は英語でライト。だからライライ。」

結構手の込んだあだ名だね。でもあだ名をもらったことがないから嬉しいな。

「じゃあ私は夕ご飯を食べに行くから、じゃ〜ね〜。」
そういうとのほんさんはぼてぼてと走って行った。よくあれで走れるね。飛べば早いと思うのは僕だけかな？

「それじゃあ僕たちも荷物を置いて食べに行こうか。」
「・・・は、はい。」

どうしたんだろう。あのときからずっとこんな調子だ。けど詮索はいけない。僕は自分の部屋に戻るために歩こうとするとセシリアがこう言ってきた。

「あの、今日はありがとうございますわ。お礼としてこれを差し上げます。」

結構早口で言って持っていたものを渡すと、自分の部屋へ早歩き

で帰って行った。なんだろう。部屋に戻って開けてみよう。部屋に戻ってから開けてみると綺麗な置物（名前は忘れたけど振ると中に入っているものがキラキラ舞う置物）だった。僕が選んでいる間セシリアも選んでいたんだ。

「ありがとう。」

僕は無意識にそう呟いていた。

余談だが、食堂に行くと皆からセシリアとどこに行っていたのか聞かれて疲れた。そして『G4』には女心についての講義を聞いた。僕の休日は色々なことがあって疲れたけど、楽しかった。

第八話 光の休日（後書き）

セシリアが光にフラグを立てたように見えますが、断じてそんなことはありません。

セシリア（以後セ）：そんな・・・。

いやあ怖かった。書いているうちにこんな風にn（目の前をレーザーが掠めた）うわあ危ない。

セ（IS装着時）：おほほほ。外しましたわ。次は外しません！

待つて！今からお客さんが来るからISをしまつて！

セ：（ISを待機状態に戻してから）誰が来ますの？

実はセシリアの中の人ネタで僕の知ってる人が3人いたから、4人で話し合ったら面白いかなつて。

フォウ（以後フォ）：すまない。スードリの発進時刻が遅れてしまい遅くなった。

セ：まだ一人しか来ていませんわ。

そうだね。（作者の携帯が鳴る）もしもし、どうしたの。急に任務が入ったから来れない？じゃあ無理だね。次に空いてる日をメールで送っておいてね。（通話を切るとまた掛かってきた）もしもし。えっ、急にデートをすることになった！？じゃあ仕方ないか。（まったく青春満喫するなよ。）ん？なんでもないよ。楽しんできてね。

(通話を切る)今日は4人集まれないからまた今度つてことで。次も楽しみにしてください。

セ&フォ:来た意味がないですわ(じゃないか)!!

第九話 IS学園の授業風景（前書き）

【『G4』の説明が追加されました。】

いやあ。久しぶりの投稿ですな。

テ：今回はユニコーンか。

言つとくけど、NT-Dはまだ発動させないからね。

一：…なんだそれ？

第：ユニコーンだけに搭載されているのか？

簡単に言うと、各ユニットに1つだけシステムを組み込めるようになっているん

だ。因みに『ガンダム』には本来搭載されていないALICEシステム、『スト

ライクフリーダム』にはマルチ・ロックオン・システム、『ダブルオーライザ

ー』にはトランザムバーストシステムが組み込まれているんだ。

G：…なんだかんだでIS超えています！！

だって元MSなんだもん。ってなわけで第九話始まります。

テ：チートキターー！！

第九話 IS学園の授業風景

「ではこれよりISノ基本的な飛行操縦をしてもらう。織斑、古代、オルコット。試しに飛んでみせる。」

僕がクラス代表になってから早1週間。その間自分のIS操縦能力をあげるために、日々一夏や篤と一緒に訓練した。たまにセシリアとも訓練したけど。そのお陰か、わざわざ初期形態にならなくても他のユニットになれるようになった。でもやっぱり変身ポーズをとらないと装着出来ないのは何でだろう？

「古代、集中しろ。」

すっかり忘れてた！！早く装着しないと。僕は変身ポーズ（以後省略）をとってISを装着する。今回はユニコーンだ。セシリアは待つてくれたが、一夏はまだ装着させていなくて僕が装着して少したって装着した。

「遅い。古代はともかく0.5秒で展開出来るようにしろ。」

余談だが、代表決定戦の後自分のISについてさらに説明して、展開方法の特殊さを伝えると、織斑先生はしぶしぶわかってもらった。

ノアさん、僕にISをくれるのは嬉しいですが、展開方法が普通なのをくださいよ。

「あら？私と戦った時のフォームではありませんわ。」

「仕様です。気にしないで下さい。」

「でもライライ、そのポーズ格好良かったよ〜。」

前言撤回。このままがいいです。

「よし、飛べ。」

ISはPICで空中を自在に飛べるけど、起動させるのに時間が掛かるから、僕はいつも地を蹴ってジャンプしながら起動させるんだ。だから他の2人よりスタートが早いんだ。スペックでも2人より上だしね。しばらくすると、前からセシリア、一夏の順でやって

来た。・・・一夏つたら、まだ飛び方をマスターしてないの？

「一夏、飛び方のイメージを掴めてる？」

「ああ。『前方に角錐を展開させるイメージ』ってやつだろ。わかっちゃいるんだけどな。」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分のわかりやすい方法を模索する方が建設的ですよ。」

そうだよ。僕も初めて飛んだときなんかあっちいたりこっちいたりして……。それで皆に教えてもらって……。あの頃は楽しかったなあ……。

「お前たち、いつまでそうしているつもりだ。はやく急降下と完全停止をやってみせろ。」

思い出にふけていると、織斑先生からそう言われた。あの人の出席簿アタック（一夏命名）は恐いから、はやく行こう。

「それじゃ一夏、セシリア。僕は先にいくね。」

僕は皆の所まで急降下していく。完全停止にはA M B A Cシステムを使えばいいから、結構簡単だね。

はじめまして、1 - A 副担任の山田真耶です。今 I S の操縦訓練の監督をしています。新しく転入してきた古代君の専用機は特殊のようで、4つのユニットから1つを選んで展開するようです。私と戦った時の『ガンダム』（あの時は格好y・いえノノそうでは・でも・・なノノ何でもありません）、オルコットさんと戦った時の『ストライクフリーダム』、そして今回の『ユニコーン^{フルスキン}』ですが後1つはなんでしょう？それにしても古代君の専用機は全身装甲なので古代君の体全体を隠してしまいますね。古代君は格好良いのに勿体ないです。あっ、ほノノ本当に何でもありませんノノ。あっほら、織斑君、古代君、オルコットさんが急上昇しましたよ。織斑君はまだ飛び方をマスターしてませんが、素質があるからまだまだ伸びそうです。オルコットさんは基本がなっています。流石は代表候補

生です。古代は・・・はうう。やっぱり格好良いです。

「お前たち、いつまでそうしているつもりだ。はやく急降下と完全停止をやってみせろ。」

織斑先生の声で正気を取り戻した私は、高速で降下してくる古代君が見えました。本来なら地面と激突するのに、途中で姿勢制御して、地面から3cmすれすれの所で止まっていました。良かったあ、地面と激突しなくて。

これがAMBACシステムか。流石は宇宙世紀だね。次にセシリアが降下してきて5cmの所で止まった。最後に一夏だけど、考えた通りに地面と衝突して笑いを取ってた。あれで素なんだけどね。

「馬鹿者。誰が地面に衝突しろと言った。地面に穴を開けてどうする。」

「ごもつともです。誰が整備するのってくらいの大ささだし。僕も手伝わされるのかな？」

「織斑、武装を展開しろ。それくらいはできるようになったらう。」

「は、はあ。」

「返事は『はい』だ。早く始める。」

「は、はい。」

・・・一応ここは学校だよ。先生にタメ口はだめ。学習してよね。話は変わるけど、一夏の専用機は『白式』（ユニコーンほど白くない）で、近接ブレード『雪片式型』しかない。それを0.7秒で出した。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ。」

先生、これでもまだましですよ。僕と練習しているときは殆ど展開できなかつたんですから。

「次に古代、ライフルを展開しろ。」

・・・それならビームマグナムはだめだな。だったら『ガンダム』

のライフルを応用しよう。ライフルをイメージして、展開する。もちろんセーフティは外してますよ。

「よし、合格だ。次にセシリア、武装を展開しろ。」

「はい。」

セシリアはそう言うのと腕を横に突き出して爆発的に光らせると、その手には狙撃銃『スターライトMK?』が握られていた。それはいつでも撃てるようになっていてってセシリア、銃口がこつち向いてる。危険!!危険!!

「流石だな代表候補生。・・・ただし、そのポーズはやめろ。横に展開して誰を撃つつもりだ。正面に展開できるようにしろ。」

「で、ですがこれは私のイメージをまとめるために必要な「直せいいな。」・・・はい。」

怖いです先生。たぶんゾイガーでも逃げ出します。

バシイン!!

「古代、今失礼なことを考えていなかったか？」

「・・・すみませんでした。」

すっかり忘れてた。僕って考えていることが顔に出るんだった。

「全く。今日はここまでだ。織斑、グラウンドの整備をしておけよ。」

そう言うと先生は足早と去っていった。皆も帰っていく。・・・わかったよ。手伝うから雨の日に段ボール箱の中にいる子犬のような目で見ないで。

第九話 IS学園の授業風景（後書き）

本来ならここで織斑千冬さんに来てもらおう予定でしたが、敵陣営と話せる機会も

ありませんのでここはアルケーこと、アリー・アル・サーシェスさんに来てもらい

ました。

サ：おめーが光って奴か。

光：初めまして。ここでは思ったことを話していただけると嬉しいです。

サ：そうなってるんだな。じゃあいうぞ。クルジスのガキはできるのか？

光：残念ながら出ません。そのかわりガンダムはいっぱい出るそうですよ。

サ：そうかい。それは楽しみだな。

光：そういえばサーシェスさん。フロントルさんとは何時知り合ったのですか？

サ：そこの作者にでも聞いてみな。

ちよっと！僕に振らないで。たしかに知ってるけど、今じゃない。

光：ちゃんと教えてよ。

ちゃんと教えるから。・・・っと今日はここまでか。サーシエス
さん有難うござい

いました。明日はこの調子じゃあの人に来るかも・・・。

光&サ：感想待ってます(るぜ)。

第十話 クラス代表パーティー（前書き）

連続投稿キターー！！

セ：作者つたらさつきからこんな調子ですの。

光：大丈夫。いざとなったら・・・ね。

真：古代君、怖いですう。

千：・・・古代、お前黒いな。

それでは第十話 発進しまーす。・・・あっ、そういえば僕って
そんなにフオー

ぜ好きじゃないかも。

光&セ&真&千：だったら（でしたら）言っな（言わないで）下さ
い（まし）（ー

ー！！！！

第十話 クラス代表パーティー

「というわけで！古代君、クラス代表決定おめでとう！」
「おめでとう！」

今の時間は夕食後の自由時間。本来は一夏のために用意していたらしいが、僕が代表になってしまったせいで急遽僕の「クラス代表就任パーティー」になったのだ。本当にごめん。実際に用意してきた人たちに謝ってきたけど、写真撮ることでおあいこになった。いいのかなこれで……。話は変わるけど、どう見ても1組じゃない人も混ざってるよね。クラスってだいたい30人だけど、ここにいる人やっぱり30人以上だよ。

「はいはい。写真部です。話題の新生、織斑一夏君と古代光君に特別インタビューをしに来ました。」

なんか待ってましたとばかりにやって来たけどこの人は誰？

「あつ、私は2年の黛薫子。よろしくね。新聞部部长をやっています。はいこれ名刺。」

「なんか騒がしい人が来ましたね。マスター、どうします？」

「インタビューしたいって言うてるからしてみたいな。いいよね。」

「マスターがしたいと言うのでしたらいいですが、くれぐれも私のことを聞かれたら抽象的に説明して下さい。」

まあ、それはわかってるけど。・・・やっぱり人間味が増えてき

たね、「G4」

「ではでは次に古代君。クラス代表になった感想をどうぞ！」

いきなりですか。・・・そうですね。・・・それなら。

「皆の期待に答えられるように頑張ります。」

「うわあ、見事に完璧なコメント。こりゃ捏造する必要ないな。」
捏造する気だったんですか。なんて恐ろしい。・・・一夏、その様子だと捏造されること確定してるんだね。」

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい。」

このままだとセシリアも捏造されるかも……。

「私、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですね。」

『とか言いながらオルコットさん、やる気満々ですね。』
たしかにそうだね。身だしなみも気にしちゃって。

「コホン。ではまず、どうして私がクラス代表を辞退したかという、それはつまり「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい。」さ、最後まで聞きなさい！」

あゝあ、捏造されちゃった。それにしても先輩、その返し方は流石にひどいです。……後でセシリアが言いたかったことを全部聞いてあげよう。

『私も連れていって下さいね、マスター。』

よし、今日セシリアの部屋に行くか。

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、初めは織斑君に惚れてだけど、前回の試合で古代君に惚れたからってことにしよう。」

なんて壮大な捏造の仕方なんだろう。まかり間違ってもあり得ないでしょ。ほら、セシリアだって顔を真っ赤にして驚いてるじゃん。

『マスター、本当に罪深い人です。』

なんで？どこが罪深い？犯罪なんてしてないよ。

「はいはい、とりあえず3人共並んで。写真撮るから。」

「な、何ですか？」

3人で並んだところで、何があるって言うの？

「注目の専用機持ちだからねー。それじゃあ、古代君を中心にして2人が古代君をサポートするように左右に並んで。あ、3人で握手したらもっといいかもね。」

なるほど、つまりは広告塔みたいな感じかな。つまりそれって目立ってことだよな。……只でさえクラスの皆から言われているのに。

あれ、セシリアと先輩何の話をしてるんだろう。あっ、セシリア

が先輩に強引に連れて来られてきた。そのまま3人で手を繋ぐと、中から僕、セシリア、一夏の順になる。

「 $35 \times 51 \div 24$ は。」

フフフ。先輩、僕を嘗めないで下さい。

「 $74 \cdot 375$ 。」

そう言つと、シャッターがきられた。思ったけどなんでこんなややこしい計算をさせるの？

「スゲーな光。俺全然わからなかったぞ。」

「一夏。だいたいの人にはわからないよ普通は。」

わかるんだつたら、その人は頭の中が電卓の優等生か、超人ぐらいでしょ。・・・僕の場合は後者だけだね。

「マスターが特別なんです。他の人たちと一緒にしないで下さい。」

▮

「えつ、そうなの。僕てつきり超人は凄いつて思つてたけど。」

「・・・マスター、もしかして天然ですか？」

「それはないと思うけど。」

・・・とまあ、こんな感じでパーティーは10時まで続いた。セシリアが僕とツーショットを撮ろうとしてクラスの皆に詰め寄られていたけど、どうしたの？

余談だが、その後光はセシリアの部屋に行つて2時間ほど話を聞いてあげた。

第十話 クラス代表パーティー（後書き）

今回のゲストはサーシエスの良き理解者、フル・フロントルさんです。

光：初めまして。 古代光です。

フ：こちらこそよろしく。

光：何か聞きたいことがあったら話してください。

フ：なら聞こう。 君はこの世界でハーレムになる予定なのだな。

光：不本意ながら、その通りです。

フ：君がそうなるのなら、私たちにも好きな人が出来るのか。

光：こればかりは作者に聞かないと。 どうなの？

・・・実は迷ってるんだよね。 その件。

光：そうなの！？

フ：興味深いな。 聞かせてもらおう。

残念ながらまだこれは案だからまだ公開できないんだ。

フ：残念だ・・・。

何とか確定案にしてみるよ。っと今日はここまで。次回は中国から来るあの転校

生が登場。お楽しみに。

光&フ：感想待っています(いる)。

第十一話 転校生はセカンド幼馴染 新任先生は転生者！？（前書き）

第十一話投稿しまーす！！

テ：・・・自分の小説を自分で読んでて、恥ずかしくないの？

G：それはそれでどうかと・・・。

いいじゃん別に、読んだって。

ー：・・・ところで新任先生って誰だ？

じきにわかるよ。それではスタートウ！！

第十一話 転校生はセカンド幼馴染 新任先生は転生者！？

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。入学からの数週間で、それなりに女子とも話せるようになったのは大きな前進と言えるだろう。光がいるとはいえ、クラスでひとりぼっちとか、普通に寂しいからな。

「転校生？今の時期に？」

今はまだ4月だ。なんで入学じゃなくて、転入なのだろう。しかもこのIS学園、転入はかなり条件が厳しかったはずだ。試験はもちろん、国の推薦がないとできないようになってる。光は日本の政府が推薦しているようで、試験も受かってるらしい。話を戻すが、つまりは

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ。」

「ふーん。」

そういえば、光のやつ何やってんだ？さっきからずっとパソコンを使って何かをしてるんだが、俺たちが見ても何かの設計図っていうことしかわからない。しかも光は集中してるから聞くこにも聞けない。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい。」

あれ、さっき光の席に行ったはずの篤が、気がつけば側にいた。さすがに篤も女子、噂に敏感と言っことなのだろうか。

「どんなやつなんだろうな。」

代表候補生っていうからには強いんだろう。光は結構強いけど、同じくらいなのか？そうだったら俺ももっと鍛えないとな。

「む……気になるのか？」

「ん？ ああ、気になるな。」

「ふん……。」

聞かれたことを素直の答えたら、なぜか幕の機嫌が悪くなった。なんだろう、最近やたらと機嫌が悪かったり良かったり、忙しいやつだ。情緒不安定なのか？

「代表候補生で思い出したけど、光大丈夫か？来月にはクラス対抗戦があるだろ。」

「そう！そうですわ、光さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。相手ならこの私、セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ。」

「うーん、そうだなあ。でも、一夏とも実践的な訓練をしたいな。」

「たしかにそうだな。他のクラスメイトじゃ、訓練機の申請と許可、整備に丸一日かかるから、手っ取り早く模擬対戦するなら専用機を持つてるやつに頼むのが早い。」

「ちなみにクラス対抗戦とはクラス代表同士によるリーグマッチだ。本格的なES学習が始まる前の、スタート時点でも実力指標を作るためにやるらしい。」

「また、クラス単位での交流及びクラスの団結のためのイベントだそうだ。」

「やる気を出させるために、一位クラスには優勝賞品として学食デザート、の半年フリーパスが配られる。なるほど、女子が燃えるわけだ。ちなみに光の場合はご飯大盛り半年フリーパスになってるらしい。」

「皆のためにも、頑張ってくるからね。」

「是非とも優勝してくださいまし。」

「同じクラスの仲間として応援してるぞ。」

「古代くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ。」

「光なら絶対優勝しそうだな。もしかしたら千冬姉と同じくらい強いかもな。」

「古代君、がんばってね。」

「フリーパスのためにもね。」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ。」

「4組だけ？なんか物足りないな。」

「……光って凄いのかよくわからないな。」

「その情報、古いよ。」

ん？教室の入り口からふと声が聞こえた。なんか、すごい聞いたことのある声だが……。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから。」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは……。

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・インリン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ。」

ふつと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。

「何格好付けてるんだ？すごい似合わないぞ。」

「んなつ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

おおやつと普通に喋った。なんださっきの気取ったしゃべり方は軽く引いたぞ。

「鈴音、いつまで1組にいるつもりだ。今日のSHRは長くなるのだから、早く戻ってこい。」

ん？また教室の入り口から声が聞こえた。また懐かしい声だな。気になったから見てみるとそこにいたのは……。

「グ、グラハムさん！！どうしてここにいますか。」

そこにいたのは、3年前アメリカの空軍に入隊したはずの千冬姉の幼馴染みのグラハム・エーカーさんだった。

「ここではエーカー先生だ。以後間違えるなよ。」

第十一話 転校生はセカンド幼馴染 新任先生は転生者！？（後書き）

一：まさかグラハムさんだなんて。

グラハム（以後グ）：久しぶりだな、一夏。

光：こんな風になるのなら、もしかしたら色々な人が飛ばされてくるかも。

・・・ニヤリ

篝：何か変なことでも考えていないか？

な、何のことですしやる。

光：バレバレだ！！

とりあえず次回はグラハムさんの説明に入りまーす。

光：話をそらすな！！

第十二話 第2の転生者（前書き）

今回は2人目のIS世界にやってきたグラハム・エーカーさんの
生い立ちだ！！

グ：上手に説明してくれると助かる。

それではどうぞ。

第十二話 第2の転生者

初めましてだな。私の名前はグラハム・エーカー、未来への水先案内人だ。ELSとの戦いで死んだ私はあの世に行くものだと思うっていた。

想像していたのと違うな。カタギリ司令の掛け軸には『三途の川』があつたのだが……。

私的には天国か地獄に行くか、もしかしたらハワードやダリル、エイフマン教授が迎えに来るものだと思つていた。そうならなかったことに少しだけがつかりする私とは一体……。

「君が来ることを待つていた、グラハム・エーカー。」
誰だ。

「すまない。私の名前はノア。ある世界の『神』と呼ばれる存在だ。」

なんと!!私は嬉しいぞ、少年。ガンダムには振り向いてもらえなかったが、神に会うことが出来たぞ。

「考え事の最中にすまないが、頼みたいことがあるのだ。」
何?頼み事だと。神ともあるう存在が私に何を頼むのだ。

「実はある世界に本来あつてはならない存在が出現した。私が違う世界に介入すると世界が壊れる可能性がでてきてしまったため、私では出来ないのだ。だから頼む、私の代わりにその世界に跳んだある少年の手助けをしてもらいたい。」

なるほどな。ふつ、私も人の子だ。その頼み、このグラハム・エーカーが引き受けた。

「助かる。そうと決まればすぐ跳んでもらうぞ。」

そう言つと神は手刀で空間を歪ませ、そこに私を押し込んだ。なんと強引な!

「頼んだぞ。」

……何はともあれこのグラハム・エーカー、全力を尽くすのみ

だ。

この調子だと、この回の全てを使っても表せないのでダイジェストで伝えようと思う。

- ・私グラハム・エーカーはこの世界に赤ん坊として生を授かった。
- ・4歳の頃に織斑千冬と出会い、仲良くなった。その時篠ノ之東とも仲良くなった。

- ・小学校、中学校も千冬や東と共に登校した（私はこの2人のペースについていけなかった）。

- ・東がISを開発して、東は姿をくらし、箒たち篠ノ之家族とは連絡がとれなくなった。

- ・日本海沖で『白騎士事件』が発生。ISの力を世界に示した。その後、世界各国でIS開発に乗り出した。

- ・千冬がIS学園に入ったとき千冬の両親が千冬と一夏の2人を捨てた。その2人の行動に激怒した私は両親に頼み、2人をサポートするようになった。

- ・第一回モンド・グロツソ大会で優勝、幼馴染みとして私はとても嬉しかった。

- ・第二回モンド・グロツソ大会で決勝戦間近に一夏が誘拐される事件が発生。千冬は一夏を助けるために試合を棄権し、大会二覇は不意になってしまった。その時、私にも力があればと思った私がい

- た。
- ・その力を見つげるために今から3年前にアメリカに飛び、空軍に入隊した。

そして現在、私は神のおかげでIS学園の教師として入ったのである。その際、神から少年の名前を教えてもらった。古代光というそう

「それではSHRを始める。全員起立。」
こうして私の教師人生が始まったのである。

第十二話 第2の転生者（後書き）

今回は敵と話をしよう第3弾！！ゲストは今はまだ謎に包まれて
いる????さんだ。

光：初めまして。

????：今回はゲストとしてきたぞ。

光：それでは質問します。自分を何かに例えるならなんですか？

????：簡単に言えば悪魔だな。難しく言うと、目的のためなら
手段を選ばない

極悪非道の機械だな。

光：なるほど。ありがとうございます。

今回はこれで終了。次回は昼休みからスタートウ！！

光&????：感想を待ってます（待っている）。

第十三話 昼休みの出来事（前書き）

更新だああ ！！

光：とうとう原作1巻の後半に来たね。

G：やっとうですか・・・。

失礼な。これでも頑張ってるんだよ。

G：とにかく続きを頼む。

それじゃあ第十三話始まり。

第十三話 昼休みの出来事

しかし、さっきの先生（たしかグラハム先生だったかな）とても格好良かったな。世の中には色々な人がいるんだな。

「大丈夫です。マスターも格好良いですよ。」

「たしかにそうだな。俺から見てもなかなかの美形だぜ。」

今は昼休みで一夏や箒、セシリアと一緒に食堂に向かっている。でも、『G4』が一夏がそう言ってくれると嬉しいな。・・・その言葉を箒に言っただけだとどれだけいいか。

「待つてたわよ、一夏！」

食堂に着くと入り口にラーメンの入った丼が置いてあるトレイ（元ウルトラマンの僕は視力はいいんだ）を持った鳳さんがいた。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通りの邪魔だぞ。」

「う、うるさいわね。わかってるわよ。」

やっぱりこの2人は仲がいいね。まるでシンジヨウ隊員とホリイ隊員みたい。・・・僕はあの世界を救えたんだよね。

「光さん、どうされました？」

「あ、セシリア。なんでもないよ。」

「ごめんね。昔のことを思い出してたから。」

そうこうしていると、一夏は日替わり定食、箒は焼き魚定食、セシリアはシーフードパスタを選んでいった。僕は納豆定食ご飯大盛りだよ。一度納豆を食べたいなと思ったんだよね。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸1年ぶりになるのか。」

「元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ。」

「どういう希望だよ、そりゃ・・・。」

なんだろう。いつまで見てても飽きないな。

「ところで、アンタのクラスの代表変わったんだって？」

「ああ、俺のとなりにいる光が今の代表だ。」

僕にふるの？まあ、友達になりたいからね。

「はじめまして。古代光です。今後よろしくね。」

「よろしく。」

鳳さん、篝と同じで一夏にゾッコンなんだね。

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが。」

そうだよな、篝。自分の片思いの相手が他の女子と仲良くしてるのが、面白くないんだよね。

「もしかして、2人は付き合っているのですか？」

いやそれはつてこら『G4』。また人前で喋って。

「い、今誰が喋ったの？ねえ、誰よ。」

はあああ。また説明しないといけないのか。

「鳳さん。今喋ったのは僕のIS。ほら、自己紹介して。」

「はい、マスター。はじめまして。マスターのIS、『G4』です。」

「鈴。言うておくが光のISは特別だから喋れるんだ。分かってくれよ。」

「そ、そうだったんだ。ふう。」

・・・もしかして、お化けが怖いのかな。シンジヨウ隊員みたいだな。・・・シンジヨウ隊員。

「さつきからどうした？なんか変だぞ。」

「ごめんね。今はもう会えない人のことを思い出したから・・・。」

イルマ隊長、ムナカタ副隊長、シンジヨウ隊員、ホリイ隊員、ヤズミ隊員、ヤナセ隊員、ダイゴ隊員。皆今何をしてるのかな。

「すまん光。そうとは知らず。」

「いや、ただ今は遠いところにいるから会えないってことだから。」

勝手にGUTSの皆を殺さないでよ。

「へくしゅ。」

「ダイゴ、風邪か？」

「ダイゴ、体調管理をしっかりしろよ。もう怪獣がでないって訳じゃないからな。」

「分かってるよ。」

「ダイゴ、無茶はしないでね。」

「ありがとう、レナ。」

「チクシヨー。いいなコノヤロー！」

「話は逸れたけど、一夏と鳳さんの関係は何？」

「ああ、ただの幼馴染みだ。」

なんでそうあっさり言っちゃうの？ 箒は怪訝な顔してるし、鳳さんなんか睨んでるし……。全く罪深いやつめ。

「あー、えつとだな。箒が引越していったのが小4の終わりだっただろ？ 鈴が転校してきたのが小5の頭だよ。で、中2の終わりに国に帰ったから、会うのは1年ちよつとぶりだな。」

なるほど、だから箒と鳳さんは面識がないのか。

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？ 小学校からの幼馴染みで、俺の通ってた剣術道場の娘。」

「ふうん、そうなんだ。」

ちなみに僕は納豆を混ぜながらこの話を聞いている。やっぱり納豆ってこのネバネバが美味しいんだよね。

「初めまして。これからよろしくね。」

「ああ、こちらこそ。」

もし超人としての力があつたなら、2人の間には火花が散ってるだろうね。

「あれ？」

「どうしたの一夏？」

「あそこにいるのって、千冬姉とグラハムさんじゃねえか？ほらあそこ。」

どれどれ。あ、本当だ。織斑先生とエーカー先生が仲良く食事してる。はたから見ると、恋人同士に見えなくもないね。

「やっぱりあの2人は仲が良いわね。」

「そうだな。いつ見てもお似合いだよな。」

そうなんだ。そうすると、もしかしたらっていう展開があったりして……。

「ンンツ！私の存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

……すっかり忘れてた。エーカー先生に夢中になってセシリアを紹介してなかった（滝汗）。

「……誰？」

「ま、まだ紹介してなかったよね。イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんだよ。」

「ふうん、よろしく。」

「な、なんて態度ですよ！い、い、言っておきますけど、私あなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん。」

まあ見た目で判断するところくな目にあわないからね。例えばガゾートとか？あれは精神的に危なかった。だって食べられそうになっただんだもん。

「……。」

「い、言ってくれますわね……。」

どうやら鳳さんの強い発言が2人とも聞き捨てならなかったようだね。

『何食わぬ顔でメシを食う……なんつって。』

「一夏。そのギャグは寒いよ。親父くさいよ。」

「なんで光分かったんだ!？」

なんでって言われてもねえ……。

「古代少年、少し良いかね。」

あれ？エーカー先生、どうしたんだろう。僕に用事かな？

「エーカー先生、どうしました？」

「2人だけで話したい。屋上に来てもらえるか？」

「はい、わかりました。」

「では待っている。」

そう言くとエーカー先生は行ってしまった。本当にどうしたんだ
ろう？

「光、どうして呼ばれたんだ？」

「僕にもわからないよ。」

とりあえずわかったのは、この定食を完食することだった。

余談だが、光は納豆定食を昼休み10分前に食べ終わったらしい。

第十三話 昼休みの出来事（後書き）

突然ですが、光のIS『G4』をどれだけ知ってるかクイズを出します。

一：ホントに突然だな。

光：今に始まったことじゃないけどね。

篤：私も参加するのか。

セ：頑張りますわ。

それじゃあ問題。『G4』の単一仕様能力は何だ？

一：たしか『モビル・チェンジ・システム』だろ？

正解。次行くよ。ユニットの数及びその名前を完答せよ。

篤：ユニットは4種類で、『ガンダム』、『ストライクフリーダム』、『ユニコーン』、そして……。

セ：『ダブルオー』ですわ。

惜しい。正解は『ダブルオー』じゃなくて『ダブルオーライザー』。まあ、これくらい出来るんだったら問題ないね。

光：もしかしてまたいつかクイズをするの？

そのつもりです。その時はほかの挑戦者を連れてきます。

クイズはここまです。皆さん出来ましたか？次回もお楽しみに。

光：あれ？僕の必要性って・・・？

第十四話 ファーストコンタクト(前書き)

ティガカツコイイ!!(ウルトラマンティガ第28話視聴中)

一：作者は何を見てるんだ？

箒：特撮みたいだな。

光：(あれって僕だよ。別次元の僕かな?)

G：(だといいですね。)

視聴し終わったから、始まりまーす。

一&箒&光&G：自由奔放すぎる!!!

第十四話 ファーストコンタクト

「待っていたぞ、古代少年。」

急いで屋上にいくと、エーカー先生だけが屋上にいた。

「すまない。どうしても君に伝えたいことがあったのだ。」

「先生、それはなんですか？」

どうしても伝えたいことか。気になるな。

「私グラハム・エーカーはこの世界の人間ではない。」

・・・はい？

「君と同じ、神によってこの世界にやって来たのだ。神から君のことは聞いている。」

「もしかして、ノアさんにあつたのですか？」

「ああ。君のサポートを任せてもらっている。」

「そうだったんですか。」

ノアさん、どれだけの人をこの世界に連れて来れば気が済むのですか。

「それでは本題に入ろう。」

えっ？今までののは他愛のない話だったの？

「私専用の機体を作つて欲しい。」

な、何ですとー！

「神から君の技術力を聞かされたが、その技術力があれば私にも力が持てるかもしれないと思つたのだ。だから、私専用の機体を作つて欲しい。頼む。」

そう言うときエーカー先生は土下座をして頼んできた。

「先生、顔を上げてください。」

「しかし「心配しなくてもちゃんと作りますよ。」かたじけない！」

先生は男だから、ISに適性はない。だから僕に頼んできたんだ。その気持ちはよく分かります。僕だって皆を救える力が欲しいんで

すから。

「待っていてください。クラス対抗戦が終わったらお渡ししますね。」

「わかった。楽しみにしてるぞ。」

僕は挨拶すると、自分のクラスに戻った。さあて、1から設計するか。

私は古代少年の背中を見ながら、彼のことを思い出していた。初めはガンダムに依存していたが、仲間のことを大切に思うようになり、最後は宇宙からの生命体と対話をして人類を救ったソレスタル・ビーイングの少年。

「古代少年、今の君の目はあの少年に似ている。仲間を大切にしていたあのときの目に。」

グラハムの呟きは風に乗って誰にも聞こえなかった。

第十四話 ファーストコンタクト（後書き）

グ：本当に頼んだぞ、古代少年。

光：わかりました。エーカー先生。

G：ノアさんは何故エーカー先生の専用機を用意してくれなかったのでしょうか？

ノア（以後の）：私とて万能ではない。

そうだよ。神様だって絶対じゃないんだからね。

ノ：そろそろ時間だな。

そうですね。それでは次回もお楽しみに。

第十五話 始動『ダブルオーライザー』（前書き）

デイケイド最高ー！ー！！

サ：あいつどうした？

フ：何でも他の作者の小説を見て、そう感じたらしい。

？：…とりあえず十五話、見てくれたまえ。

第十五話 始動『ダブルオーライザー』

「え？」

エーカー先生との話の後、一夏から第3アリーナでIS操縦を教
えてもらいたいと言われたから、今第3アリーナにいるんだけど・
。

「な、なんだその顔は・・・おかしいか？」

「そ、そうですね。おかしくはないと思いますの。」

一夏、呼んだのは僕だけだよ。なんで箒とセシリアがここに
いるの？しかも箒はIS『打鉄』（僕は初め『だてつ』って読んでた）
を装備、展開していた。ちなみに『打鉄』は、純国産ISとして定
評のある第2世代の量産機なんだ。それにしてもなんだか『ガンダ
ム00』の『マスラオ』に似てるな・・・。あつ。

「あれなら先生も喜んでくれるかな。」

「どうした、光？」

「えっ？あ、いや、なんでもないよ。ハハハ・・・。」

いやあ、危ない危ない。声に出してたよ。

「それにしても、どうしてここにいるの？」

「どうしてもなにも、一夏に頼まれたからだ。」

「そして私は箒さんが一夏さんと訓練している間、光さんと一緒
に訓練しようと思いましたが。」

なんだそうだったんだ。たしかに効率がいいからね。

「そうだね。だったら一夏と箒はあつちで訓練してて。僕たちは
こつちでやるから。」

「わかった。じゃあ箒、いくぜ。」

「ああ。」

うん、やっぱりこの2人には付き合っ
て欲しいな。なんかダイゴ
隊員とヤナセ隊員みたいなんだもん。結婚式には呼んでね。

「それじゃあセシリア。僕たちもやるうか。」

「わかりましたわ。光さんも全力でやってくださいまし。」
まあ、慣れるためにもダブルオーで頑張ろうかな。

「来い、ダブルオー！」

変身ポーズをとって『G4』を展開、ダブルオーライザーを装着した。・・・同調率100%、いける。

「それが光さんのISの4つ目の姿ですね。」

「そう。これが僕の4つ目のユニット、ダブルオーライザー。」

両肩のGNドライブからGN粒子を出しながら飛翔する。

「ダブルオーライザー。これより訓練を開始する！」

結果は辛勝だった。原因は機動力。『ストライクフリーダム』同等の速さで移動するため、まだ体が慣れないからよく被弾しちゃった。だけど想像以上の攻撃力で圧倒できたからまずまずかな。

それにしても、さっきの感覚はなんだったんだろう？あときは動きが読めたただけだったが、今回はなぜか皆の声が聞こえてきたんだよね。まあ、気にすることでもないか。

「今日はここまでだね。」

「そうですね。」

今は夜の8時。そろそろいかないと。

「光さん。夕食を御一緒にしてもよろしいですか？」

「いいよ。でもでもそんな一緒に食べれないよ。」

「かまいませんわ。」

「じゃあ、行こうか。」

「ご飯を食べたらやらなきゃいけない事もあるしね。」

あの後夕食を食べた僕は、部屋に戻ってISモドキの製作にはいった。

「『G4』、『スサノオ』の設計図ってある？」

「なぜですか？」

「ほら、エーカー先生の専用機を造るためだよ。」

「なるほど。それなら提示しますね。」

よし造るぞ。まずは動力機関を作ろう。本来は疑似GNドライブだけでオリジナルでいこう。えっ？あるの？ならいいか。それじゃあボデイはこうして……。

あれからどれくらい経っただろうか。まだ完成してないけど、コンピュータや必要な回路は出来てるから、今日はここまでかな。でもこれを見られると困るしな。よし、段ボールの中にしまっておこう。

—————

完了つと。ふう、汗をかいたな。シャワーでも浴びよう。

そうして光はシャワールームに入っていった。

「な、なんて格好してんのよアンタ！」

「なんでって、シャワー浴びてたんだから仕方ないでしょ。」

どうなってるの。たしかに今日からルームメイトが来るって数日前に山田先生から教えられていたけど、まさか鳳さんだなんて。

「ま、まあいいわ。それよりも一夏の部屋ってどこ？」

「たしか隣だったけど、なんで？」

「一夏のルームメイトと部屋を変えてもらうためよ。」

そっぴいながら、鳳さんは出ていった。一度会ったけど、嵐のよくな人だな。ん？たしか一夏のルームメイトって……。部屋替えはたぶん無理だね。

「ハ口、ヒカル。ゲンキカ、ヒカル。」

「ハ口、僕はいつも元気だよ。」

ああ、この子は『ハ口』。僕の作ったロボットなんだ。さっきまで隅にいたけど鳳さんは気付かなかったみたいだね。

なんだか騒がしくなってきた。たぶん、箒と鳳さんが言い争って

るのかも。

「あの2人は織斑一夏のためなら、死闘を繰り広げそうですね。」

「『G4』！本当にしそうだからしそういふこと言っちゃダメ。」

しかし、『G4』の言っていることはあながち嘘ではないことを、1人と2つは知らなかった。

第十五話 始動『ダブルオーライザー』（後書き）

久しぶりに光の部屋を再開します。今回のゲストは織斑先生だ。

光：お久しぶりです織斑先生。

千：ここでは織斑さんでいい。

光：では織斑さん。ズバリ好きな人はいますか。

千：な／＼。なぜそのような質問を。

光：僕的に気になります。教えてください。

千：うっ。．．．ここだけだぞ。

（織斑さん、光に暴露中．．．）

光：そうだったんですか。わかりました。

千：くれぐれも内密にな。

そんなわけで織斑さんが暴露したところでお時間が来たようです。
次回もお楽し

みに。

光&千：感想待ってます（いる）。

第十六話 光のルームメイト（前書き）

今回亡国企業の幹部の3人が最後に登場。

光：誰です？

G：どうやらこの物語のカギを握っているみたいですね。

それでは十六話スタート

第十六話 光のルームメイト

結果を言うと、ダメだったみたい。しかも鳳さんは泣きながら帰ってきたんだ。

話によると、どうやら一夏が昔約束していた内容をはき違えて覚えていたらしく、それが気に入くないみたい。とりあえずいい子いい子したら、鳳さんの顔を赤くなった。大丈夫だよ。

「ダイジョウブカ。ダイジョウブカ。」

八口は鳳さんのことが心配なんだね。

「少しは楽になった？」

「あ／＼ありがとう。もう大丈夫だから。」

なら問題ないか。でも一夏つてわざとやってるようにしか見えな
い時があるよね。それはともかく

「鳳さん。鳳さんはこれからどうしたい？」

「わ、私は一夏に謝ってもらいたいけど。」

なるほどね。鳳さんは一夏が昔した約束の本当の意味を思い出し
てそのことについて自分に謝ってもらいたいと考えているわけなん
だね。

「それなら、自分からその約束の本当の意味を伝えて、謝っても
らえばいいと思うよ。」

「たしかにその方がどちらもすっきりして仲直り出来ますしね。」

これで一件落着かな。

「そ、そんなのできるわけじゃない。」

「どうして？その方が早く解決するのに……。」

「……ああ、なるほど。そういうことですか。それなら、無理
もないですね。」

「い、今ので何がわかったの？教えて『G4』。」

「これだけは無理です。自分で考えて下さい。」

自分で考える？うん、全然わからないや。

「でも一夏と仲直りしたいんだよね。」

そついうと鳳さんは首を縦に振った。どうしたらいいんだろう。。。

「それならこうはどうか。今度のクラス対抗戦リーグマッチで僕が勝ったら一夏に説明して謝ってもらって、鳳さんが勝ったら一夏に説明しないで謝ってもらうっていうのはどう？」

なんとまあ、一夏だけ徳をしない賭けだね。まあ、鳳さんの機嫌を直すためだからね。

「悪くはないけど、絶対アタシが勝つからね。」

「言いましたね。マスターの実力を甘く見ないで下さいね。」

あつちはあつちで話が盛り上がってるね。それにしても、鳳さんの機嫌が直ってよかった。さて、疲れた体を寝て癒そうつと。

「鳳さん、おやすみなさい。」

「おやすみ、光」

「おやすみなさい、マスター。」

僕は2人の声を聞きながら眠りについた。

同時刻、とある場所に人影が3つ（男性が1人、女性が2人）あった。

「本当にここであっているのか、スコール。」

「間違いないわM。ここに何かがいた形跡があったのよ。」

「その者を仲間に引き入れたいというのか？」

「全くをもつて、その通りなの。」

どうやらここにいたと思われる何かを仲間にしたらしい。

「この様子だと、この方角に進んでいったらいいわね。」

その中でもリーダー格らしい人物　スコールはそう呟いた。その姿を遠くから見られていたことを3人は気付いていなかった。

第十六話 光のルームメイト（後書き）

今回のゲストは山田先生だ。

真：ここでは真耶さんでいいですよ。

光：なんか織斑先生と同じノリだね・・・。

真：古代くん、どうしたの？

光：いえ、何でもありません。ところで真耶さんはGMというM
Sを知っていますか？

真：？

真：たしか『ファースト・ガンダム』の量産機ですよ。

光：真耶さんはGMが可愛いと思っただことありますか？

真：そんな風にGMを見てはいないと思うけど、どうして？

光：実はうちの作者が『GM可愛い〜！』って言ってたのを見
たんですよ。

少し訂正させてくれ。可愛いのはGMじゃなくて、アツガイだ。

光：とまあこんな感じですよ。

真：は、はあ。そうですね。

GMも可愛いけど、やっぱりアツガイサイコーでしょ。とりあえず
次回もお楽しみ

に。

光：最後までくだになったね。

真：え〜っと。か、感想よろしくお願いします。

第十七話 クラス対抗戦までと・・・（前書き）

ネクサスのOPって格好良いよね。

光：たしかに。

G：私は『英雄』が好きです。

？：我は『青い果実』だな。

サ：そんなことどーでもいいだろ。

フ：早く進めてくれ。

わかったよ。それではスタート！

第十七話 クラス対抗戦までと・・・

5月になった。

あの時の賭けのせいか、一夏と鳳さんの仲はなかなか良くならない。むしろ悪くなってるような気がする。これが僕のせいだったら謝りたいな。

僕は今、放課後の第3アリーナで特訓をいつものメンバーでしている。かすかに空が橙色に染まりはじめているのがとてもきれいだ。これが最後の訓練だと思うと寂しくなってくる。

「それにしても、光の実力は日に日に上がっていくな。」

「まあ、4人で特訓しているからな。」

「だけどこれほど僕の実力が上がったのは皆のお陰だよ。」

「当然ですわ。なにせこの私が訓練に付き合っているんですもの。」

3人とも自分がしたいこととかあるはずだけど、僕の特訓に付き合ってくれてとても嬉しく感じてるよ。一夏や箒に教えてもらった剣術や、セシリアに教えてもらった中距離射撃型戦闘法は絶対役に立つと僕は信じてるからね。

皆で談笑していると、ピットのドアが開く音が聞こえた。開く音がダイブハンガーのドアの音と似ているからちよっと懐かしいなあ。「あれ？もう来てたの？」

ドアの向こうにいたのは、なんと鳳さんだった。さっきも言ったけど、一夏との仲はまだ悪いんだ。どういう心境の変化だろう・・・やっぱり箒は顔をしかめてるね。

「鳳さん、どうやってここに」「ここは関係者以外立ち入り禁止のはずだぞ！」「・・・最後まで言わせてよ。」

でも本当にどうやってここに来たんだろう。

「あたしは関係者よ。一夏と光の関係者。だから問題なしね。」
一夏のことならわかるけど、なんで僕も？ただ一緒に部屋なだけ。

・・・なんでセシリアも顔をしかめてるの？

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな・・・。」

「盗つ人猛々しいとはまさにこのことですね！」

やだ、怖い。この空間内にいるとダメージが蓄積されていくみたいだ。まるでギジエラの花粉で充満した部屋にいるみたいだ。

どうやら一夏もそんなことを考えていたらしく、箒に怒られていた。あつ、鳳さんが間に入って止めた。一夏と話をしようとしているところを見ると、どうやら一夏に謝ってもらいたいみたい。でもそうしたら賭けの意味がないよ。止めなきや。

「鳳s「謝りなさいよ！」！！鳳さん？」

なんか口喧嘩に発展してるし。今は違う意味で止めないと！

「ちよつと2r「だから、なんでだよ！約束覚えてただろうが！」
「あつきれた。まだそんな寝言言ってるの？約束の意味が違うのよ、意味が！」・・・。」

・・・なんで2人と、相手のことをわかってあげられないの？

「あつたまきた。どうあつても謝らないっていう訳ね！」

「だから、説明して「ドカアアン！」って・・・光？」

なんだというのだこの殺気は！？一夏と鳳鈴音があまりの禍々しさに一瞬固まってしまっほじやないか。私も脚の震えがさつきから止まらないぞ。

「一夏・・・鳳さん・・・。たしかにどつちの言い分もわかるけど・・・、もつと相手の考えをわかってあげてよ・・・。」

言っていることは正しいのだが、今の光を見ているとそんなことを考えられない。

「箒さん。私この空気に耐えられせんわ。」

セシリアが小声でそう言ってきたが、私だって耐えられない。光は部分展開して『ガンダム』の右腕を装着しその腕でアリーナの壁を叩いたのだが、叩いたところを中心に小さなクレーターができて

いた。ISを装着しても、腕力はそれほど強くない。とすると、光自身の腕力はどれ程のものなのか。・・・謎だ。

「わ、わかつたから、ISを解除してくれ。」

「そ、そうよ。話し合うにしても、ISを装着してるんじゃない話もできないじゃない。」

「・・・じゃあ2人も。・・・ちゃんと話し合うことを約束して。」

2人は光が言い終わると、すぐ首を縦に振った。私もあのオーラには逆らえないな。

「・・・じゃあちゃんとお互いのことをわかってあげてね。」

・・・私が最も怖いと思う人がもう1人増えた気がする。

この出来事のと、一夏、篝、セシリア、鈴の4人は光を怒らせてはいけないと心に誓ったのであった。

第十七話 クラス対抗戦まであと・・・（後書き）

今回のゲストは、セシリア・オルコットです。

光：やっとセシリアまできたね。

セ：今回はたくさんお話ししましょう。

光：じゃあセシリア。セシリアのIS『ブルー・ティアーズ』ってBT兵器だよ

ね。なんか『ストライクフリーダム』のスーパードラゴンと同じみたいだった

けど・・・。

セ：そうですね。これほど似るとは・・・。

情報によると、BT兵器よりドラゴンの方が出力が上で、さらにドラゴンの

方が扱いやすいみたいだよ。

セ：BT兵器は4基扱っただけでも苦労しますのに。

光：なんかごめんね。

今日はここまで。次はいよいよクラス対抗戦だね。

光&セ・感想待ってます(わ)。

第十八話 クラス対抗戦当日（前書き）

光：とうとうこの時が来たね。

頑張ってね。

G：応援しています。

N：次元の狭間で応援してるぞ。

それでは十八話スタートウ！！

第十八話 クラス対抗戦当日

試合当日、第2アリーナ第1試合。組み合わせは僕と鳳さん。

あのときの賭けはまだ継続されていて、鳳さんはやる気満々だ。

さらに噂の新人生同士の戦いとあって、客席は満席。通路まで立ち見の生徒で埋め尽くされていた。会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するみたい。まるでクルス・マヤのライブ級だ。

「マスター、鳳さんが待ってますよ。」

鳳さんのISは『シエンロン甲龍』で、ブルー・ティアーズ同様のアンロック非固定浮遊部位が特徴だね。肩の横の棘付き装甲が格好良い。良いな。

「スパイク・アーマーは格好良いですが、似合うのはザクシリーズかガシリーズだけですよ。」

ガシリーズ？ザクシリーズならわかるけど……。ガデッサのことか。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください。』

アナウンスに促されて、僕と鳳さんは空中で向かい合う。

「光、絶対私が勝つからね。」

「僕だつて負けるわけにはいかないよ。」

僕はオープンチャンネルで鳳さんと話してるんだ。オープンチャンネルはプライベートチャンネルより使いやすいけどね。

『それでは両者、試合を開始してください。』

ビーツと鳴り響くブザーで、どちらも同じ瞬間に動く。

僕のユニットは『ダブルオーライザー』だけど、機動力には慣れた。脅威の機動性で鳳さんを攪乱する。

「ちょこまかちょこまかと！」

鳳さんがイライラし始めた。計画通りだね。今回の作戦は、相手の集中力を削いで隙を作らせる戦法をとろうと思ったんだ。

「このっ、当たれっ！」

すると鳳さんは肩アーマーをスライドさせて、何かを打ち出してきた。既の所で避けたけど何だったんだ？

「今のはジャブなんだからね。」

本来なら余裕なときにいう台詞だけど、さっきの衝撃を軽く避けられて驚いてるから様になってない。

ズバアアン！

さっきより強い衝撃がきたから、GNソード？で切ってみただけど、GNソード？がダメになっちゃった。

なんと！ここで少年のガンダムに出会えるとは！乙女座の私には、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない！

「グラハム、それでは文法的に間違っているぞ。」

何？そうなのか千冬。どうやら間違った使い方をしていたらしい。なんたる不覚！

「しかし、なんなんだあれは？見たこともないぞ。」

古代少年には見えているらしいが、私たちには砲弾どころか砲身も見えないとは。さすが少年と同じ目を持つ漢だな。

「あれは『衝撃砲』と言って、空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾化して打ち出す第三世代型兵器だ。」

さらに説明してもらったが、この『衝撃砲』は死角がないらしい。古代少年、この『衝撃砲』にどう立ち向かう？

「なんで当たらないのよ！衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに。」

うーん？直感で避けてるつもりなんだけどね。だけどこのままじゃ勝てない。一気に突っ込んで、短期でけりをつけようと僕が鳳さんに接近しようとした瞬間、何者かがアリーナの壁を突き破って乱

入してきた。

「はっ。待ちに待った戦争だぜ。」

『『『我等は復讐する！我等を悪魔といった貴様たちに！』』』
片方は細身で真紅のボディに、大きなバインダーが2つ腰に装填されていて、武器は自分の腕以上の大きさの剣を持っていた。もう片方はゴツゴツしていて、まるでゴーレムみたいなフォルムだ。よく見ると、両肩にミサイルを積んでいる。どちらも認識がなかったが、片方には面識がある。僕の世界で神になるうとした炎魔人……。

(ここからはプライベートチャンネルでの会話です。)

『キ、キリエル！』

『なぜ私たちの名を！』

『そうか。貴様、テイガだな！』

『ハハハハハッ。ここであんたに会えるとはね。』

なんでここにキリエルが！異世界に帰った訳じゃなかったのか！

『あるとき、私たちは帰る途中何者かに襲撃された。』

『そのせいで、我等キリエルは全滅。残ったのは私たち3人だけだ。』

『そのとき、声がしたのよ。』お前たちをそうさせたのは、人間たちだ。』ってね。』

『そんな……。』

まさかそんなことがあったなんて……。

「お前ら！いつまで話してんだよ。俺は戦いたくてたまんねえんだよ。」

『わかった。なら……。』

『私たちと……。』

『正々堂々……。』

『『『勝負しろ！』』』

このことにより、アリーナは緊急事態に陥った。

第十八話 クラス対抗戦当日（後書き）

光のIS『G4』についてどれだけ知ってるかクイズを出すよ第2弾！！

サ：今度は俺たちが。

フ：できるだけ頑張ってみよう。

？：我も良いか？

光：どうぞどうぞ。

それでは問題。光が初めてISを起動したとき、初めてなったユニットは？

サ：あつ？ガンダムだろ？

正解。次行くよ。その時使った武装の種類と数は？

フ：ビームライフル×1、ビームサーベル×2だな。

正解。最後。『G4』の本来の姿は？

？：たしか・・・、ファーストだろうか。

お見事。全問正解です！おめでとつございます。

サ：なんかもらえるのか？

商品はPDIです。

フ：これはなかなか良いな。

今日はここまで。次回もお楽しみに。

?：感想、待っている。

第十九話 システム起動！その名はTRANS・AM！！（前書き）

光：ねえ作者。 いったい何してるの？

（ケンプファアのコスプレをしながら）一回こーいう格好をした
かったんだ。

G：悪趣味ですね。

なんとも言うって下さい。それよりも十九話スタート。

一：なんか格好良いなそれ。（ケンプファアを見ながら）

篝&千&グ：大丈夫か・・・。

第十九話 システム起動！その名はTRANS-AM！！

『光、試合は中止よ。すぐにピットに戻るわよ。』

たしかに正論かもしれないけど、相手がそれを許さないだろう。

『はつ。させるかよ。』

真紅のISはあの大剣をなんとライフルに変えて撃ってきた。あれじゃあ鳳さんに直撃する！

「鳳さん、危ない！」

僕はビームの雨の中を掻い潜り、鳳さんに近づくと抱きかかえて一気に離脱する。

「鳳さん、大丈夫？」

「あ／＼／＼ありがとう。．．．出来ればおろしてくれると嬉しいんだけど／＼／＼。」

「あつ、ごめん。」

いつまでもこんな格好していると恥ずかしいよね。

『古代くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧にいきます！』

ダメだ。キリエルはそんなことじゃ倒せないし、あの紅いISの強さがわからない。

『マスター、ノアさんから情報です！あの2機は私たちが倒さねばならない相手のようです！』

そうだったんだ。それなら他の人たちを巻き込む訳にはいかない。

「織斑先生、ここは僕に任せてください！ここは僕が食い止めます！」

『でも古代くん！』任せたぞ。『でも織斑先生！．．．わかりました。古代くん。必ず帰って来てくださいね。』

「ありがとうございます。必ず戻りますから待っていてください。」

絶対負けるわけにはいかない！

「鳳さんも逃げて。ここは僕が食い止めるから。」

「何みずくさいこと言ってるのよ。私も頑張るわ。」

「鳳さん……。わかった。なら僕はあの黄色いISを、鳳さんは紅いISをお願い。」

「……。わかったわ。絶対一緒に戻ろうね。」

そうだね。ここで死んだら元も子もないからね。そう思いながら僕は首を縦に振った。

「僕はここに居る皆を、君を絶対守るから。」

「えっ／＼／あつ、うん／＼／」

キリエル！お前たちの野望、僕が食い止めて見せる！

奴等が古代の言っていた『世界の歪み』か。古代はこれからそのような敵と戦っていくのか。私にも力があれば古代の手伝ってやりたいものだ。……。古代、死ぬなよ。

あつちの紅いISはかなりの手慣れで、鳳さんでもってしても不利だった。あの大剣を普通に振るっているけど、どこにそんな力が……。

『戦いの最中に他人の心配をするとは、どこまで愚かなのだ！』

そう言うと、その大きな腕でパンチを繰り返して来る。このISはパワータイプのISらしい。ならスピードは遅いはずだ。ならスピードで翻弄しながら攻撃していこう。

『ちい。ちよこまかちよこまかと！』

『ダブルオーライザー』の機動性をなめるな！

『ここはロイダーで攻めるぞ！』

『その方が無難だな。』

ん？ロイダー？どういうことだ？

『『『オーブンゲット！』』』

そう言うと、キリエルたちのISは3機の戦闘機になった。だからキリエル人が3人いたんだ。

『『ゲッターチェンジ！チェンジゲッターロイダー！』』
すると3機の戦闘機が1つのISになった。どうやらキリエルのISはタイプチェンジができるらしい。

『特と見よ！このゲッターロイダーのスピードを！』

なんだって！ダブルオーライザーのスピードと同じじゃないか！
さらに右腕のドリルが厄介だからどうしたら良いか……。

「キヤアア！」

なっ、鳳さん！しまった、キリエルに夢中で鳳さんを守ることを忘れてた！

『これで……。』

や、止めるー！

TRANS AM

突如画面にこのような文字が現れ、機体が赤く輝き始めた。

『マスター、これはトランザムシステムで一時的に機体性能が3倍に上がります。』

これなら、鳳さんを守れる。待ってて！

一応名乗つとくが、俺様はアリー・アル・サーシエスだ。今IS学園を襲撃してるんだが、俺様の機体のアルケーガンダムはインフイニットなんたらになっちまったらしい。まあ、戦えるなら良いんだけどな。おっと話が逸れたな。俺が戦っている相手は、なんかガラッソによく似たインフイニットなんたらなんだけだよ。そいつが弱いなのにつて。剣の振り方や衝撃砲の打ち方がなってねえ。これならまだクルジスのガキのほうがよかったぜ。面倒くせえからフアングで一気に沈めてやるよ。

「これで……。」

『や、止めるー！』

な、なんだこの感覚。まさかあのゲッターなんたらと戦ってたあいつなのか！

そいつはクルジスのガキが乗ってたガンダムに似たインフィニットなんたらに乗ってて、まさかと思ったら、トランザムしやがった。ガンダムもどきはガラッソもどきを庇うようにして俺の前に出てきやがった。上等だ！やってy『pipipi! pipipi!』ツたくなんだよ。

『サーシエス、戻ってこい。今回はここまでで良い。』

「おいフロントル！せっかく良い所なのによお。」

『・・・オータムが待つてるぞ。』

「!・・・わかった。戻りや良いんだろ。戻りや。」

仕方ねえな。退却してやるよ。

「あばよ。ガンダムもどき！」

あっ？ゲッターなんたらはどうしたって？知るかそんなの。

良かった。鳳さんは守れた。後はゲッターロイダーだけだ！

『今度はドラゴンでいくぞー!』

『一気に決めてやる!』

『『『オープンゲット!』』』

『『『ゲッターチェンジ!チェンジゲッタードラゴン!』』』

今度は僕でいうマルチタイプかな。ただここで逃がす訳にはいかない!

『『『ゲッター!ビーム!』』』

皆をやらせるかー!

「トランザム!ライザー!」

ピンク色のビームとGNソード?がぶつかり、スパークが全体を照らし煙が広がる。その煙が晴れたとき、そこにあつたのは・・・。ゲッター炉心を破壊され、沈黙している『ゲッタードラゴン』と、気絶している鈴を抱える『ダブルオーライザー』だった。

第十九話 システム起動！その名はTRANS-AM！！（後書き）

トランザムキター！！

グ：懐かしいな。

光：今回のゲストはエーカー先生か。

その通り。なかなか察しが良いね。

光：それはどうも。それよりエーカー先生。

グ：グラハムさんで良い。

光：ではグラハムさん。アメリカ空軍に所属していた時はどう思いましたか？

グ：そうだな。一番真つ先に『フラッグが無い！』と、考えてしまった事だな。

光：やはりグラハムさんにはフラッグが似合ってますからね。

グ：慣れとは怖いものだ。

僕もフラッグが好きだよ。あの立ち姿、プラズマブレード・・・
かーっ！！

光：また暴走したよ、作者。まあそれは置いて、次回もお楽しみ。

グ：感想を待っているぞ、フラッグファイター諸君！！

あっ、そうだ。次回から光の部屋をお休みします。また再開する
ので、待っていて

てください。

第二十話 その後（前書き）

光：なんとか撃退したね。

G：強かったですね。特にあの紅いISが。

サ：伊達に傭兵してるわけじゃねえんだよ。

まあそれは置いて、第二十話どうぞ。

第二十話 その後

あれからあたしは気絶していたみたい。あの紅いISに蹴りを入れられるところまでは覚えてたけど、気がついたら保健室のベッドで寝ていた。隣にはあのISたちと一緒に戦ってくれた光がいる。たぶんあたしを看病していて、疲れて寝ちゃったんだと思う。今なら光と……、ってなに考えてるのよあたしは！あたしが好きなのは一夏で光は違うって思いたいけど、本当は光のことが好きなんだと思う。あのときはあたしを守るって言ってくれたり、あ／＼／頭を撫でてもらったり。って違う違う。

どちらにせよ、あたしは光に恋してる。今隣にいる光と……、き、ききキスを。

「ん？あれ、鳳さん？気がついた？」

な！なんでこのタイミングで起きるのよ！もう少し寝てたら、ききキスが……。

「大丈夫？まだ寝てても良いんだよ。」

「へ、へいきよ。これくらいどうってことないわ。」

光ったら、人の心配より自分の心配をしなさいよ。

「マスターには私がいいます。ですからご心配なく。」

そういえば、光のIS『G4』って喋れるのよね。初めは驚いたけど今はへいき。

「……マスターは誰にも渡しません。」

「な、なんですって！どういうことよ。」

「マスターを影で支えていくのは、私です。あなたではありませんせん。」

キーツ！悔しい。たしかに正論だけど納得できない。

「2人ともどうしたの？何かあった？」

どうやら鳳さんは全身打撲で済んだみたい。良かったあ、全員守れて。

「鳳さん。「鈴でいいわ。何か他所他所しいから鳳さんはやめて。じゃあ鈴。さつき鈴の顔がとも近かったけど、なんで？」

そう聞くと、何故か鈴の顔が赤くなつた。なんか恥ずかしいことでもあつたのかな？

それにしてもあの紅いISに変幻自在のキリエルのIS……。僕の敵はあんなにも強いのか？だとしたら僕だけじゃ勝てなくなるかも……。

「ねえ、光。」

「ん？どうしたの？」

鈴が話してきたけど、何か重要な話かな。

「あたし、料理を作れるんだ。も、もしあたしの作る料理が今より上手になつたら、毎日食べてくれる？」

へえ、鈴って料理が作れるんだ。もし食べれるんだつたら、食べてみたいな。

「いいよ。毎日は無理かもしれないけどね。」

「本当に！絶対に約束だからね！」

なんか鈴のテンションが高くなつてる。でも元気になつて良かった。

学園の地下50m。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

「しかしなんだつたんだ、あのISは。3つに分離して戦闘形態を変えるなど、無人機でなければ扱えない。それをまるで3人で操っているかのようだ。」

沈黙したISが解析されている間、グラハムと千冬はアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ていた。グラハムはそう呟き、千冬は何か考え事をしているようだった。

「織斑先生、エーカー先生。あの機体の解析結果が出ました。」
ドアが開き、ブック型端末を持った真耶がいつもよりきびきびとした動作で入室してきた。

「どうだった？やはり、無人機のISだったか？」

グラハムはそう聞いたが、帰ってきた言葉は信じられないものだった。

「いいえ。これはISではありませんでした。」

「なんだと！」

「この機体名は『ゲッターG』といい、どのような方法で動いていたかは不明です。古代くんととの戦闘により損傷が激しく、おそらく修復は無理かと。」

この世界でISは絶対の強者。それと同じ、それ以上の力を持った機体はこの世界でどこにも存在しない。それが現れたということは何の意味を表すのか……。

……まさか『ゲッターG』を倒すとは。もしかしたらこれからも強くなるかもな。……いつかは俺と戦うことになるのかもな……。

「それだけは先ずないなダーク。彼はあの企業と敵対するのだから。」

そうだったな。すまない『ex-』。まあこれからも楽しみにしているぞ。

……『俺』……。

シールドバリアーの壊れたアリーナの上に、喋る何かの部品を持った紫のISが立っていて、不気味に学園寮を見下ろしていた。

ここはとある荒野。何も無いはずの場所でまるで穴が開くように空間が歪み、1機の機体が飛び出した。

「ここは何処だ？ なっ！ ザ・ワンが俺と同じくらいの大きさに！」
声からして16才ぐらいだろう。どうやら彼の機体は『ザ・ワン』
というらしい。

「もしかして、この世界を救うようなことをしたら帰れんのか？」
しかし彼は気付いていなかった。この世界にはすでにその役割を
もった存在がいたことを。

第二十話 その後（後書き）

ここでは敵ISの能力値を測る場となります。

サ：今回は俺のIS『アルケー』を測定するぜ。

サーシエス専用IS『アルケー』

『機動戦士ガンダムOO』のアルケーガンダムがISの世界に跳んだ際、ISになった機体。見た目はアルケーそっくりだが、コアファイター機能が除去されている。射撃能力、格闘能力、機動力が全能力において長けている。動力源はオリジナルGNドライブ（なぜこうなったのかは不明）。武装はGNバスターソード・GNビームサーベル・GNフアング・GNシールドと、全く変わっていない。本話では鳳鈴音のIS『甲龍』と初めての戦闘をし、相手を圧倒するほどの活躍を見せた。

サ：さすがはガンダムだな。

ですねえ。次の紹介は『ゲッターG』です。

サ：作者に変わって、感想待ってるぜ。

第二十一話 ボーイ・ミーツ・ボーイ（前書き）

今日ISの小説第七巻を買ってきました！！

サ：やっとかよ。

光：まあ、作者にも予定があっただんですから。

G：頑張ってください。

フ：私も出たいものだな。

それでは二十一話スタート。

第二十一話 ボーイ・ミーツ・ボーイ

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた。」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君と古代君の話よ。」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話。」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ。女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トナメントで」

早朝、思春期女子で埋め尽くされた食堂はかしましい。その食堂のなかに大きな箱を抱えた光がいた。

「これが女の子のテンションか……。」

「たしかに……、この雰囲気の中で朝食は食べられませんね。」

この少年 古代光 は、元はウルトラマンティガであり、視力・聴力共に常人より良いため、普通よりかしましく聞こえる。・・・無論、女子の内緒話も聞こえるわけで……。

「何だろうね。僕と一夏の話で最上級にいい話って。」

「気になります。私にとっても最上級にいい話だったら尚更です。」

もう一度言うが、光は元ウルトラマンティガで、人に興味を持っている。友達が1人増えていくことに喜びを感じるほどで、人が興味を持つものにも興味を持ってしまっただ。

「聞いてみたいな。でもずけずけと聞けないし……。」

「そうですね。私が喋ることが出来れば良いのですが。」

実に物好きである。まあ、それが光の良い所なのだが……。

「……そろそろ行くか。」

『そうですね。』

こうして1人と1つは食堂をあとにした。ちなみに光の朝食は納豆定食ご飯大盛りだ。どうやら光は納豆が気に入ったようである。

「やっぱりハズキ社製のがいいなあ。」

「え？そう？ハズキのつてデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「へえ。会社によってデザインが違うんだ。」

月曜日のSHR前。クラス中の女子と賑やかに談笑をしていた。

みんな手にカタログを持って、あれやこれやと意見を交換しているうん。やっぱり多くの種類があるね。

「そういえば織斑君と古代君のISスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど。」

「それは言えるな。俺のはイングリッド社のストレートアームモデルが元の特注品って聞いているが、光のはどこ製だ？」

「え？いや……。どこ製って言われても……。」

まさか神様が作ってくれました〜なんて誰も信じてくれないだろうね。でも、自分が作りました〜って言ってもなあ。

「古代くんのISスーツは試作品で、宇宙での活動を目的とした次世代型なんです。オプションでメットと小型酸素ポンベを付けると、最長24時間宇宙空間で活動できるようですよ。」

すらすらと説明しながら現れたのは、山田先生だった。山田先生、この状況を打破してくれてありがとうございます。

「へえ、古代くんのスーツって凄いなだね。」

「マジかよ。宇宙服は、色んな機器が付いたスーツだと思ってたぜ。」

まあ、それがGUTSスーツクオリティだからね。

「諸君、おはよう。」

「お、おはようございますー！」

やっぱり織斑先生からイルマ隊長と同じオーラが出てるように感じる。逆らっちゃいけないっていう感覚だよ。

「今日から本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう。」

いや構うでしょ、そこは！やつと女子のISスーツを来た姿を見てもあまり恥ずかしくならなかったけど、学校指定の水着や下着は……。」

「ヒカル、ノウハフアンテイ。ヒカル、ノウハフアンテイ。」

『マスター、八口が脳波指数の歪みを検知しました。どうしました？』

え？ちよつと待つて。なんで八口がここにいるの？たしかあのと置き置いていったはずなのに。

「古代、何だそれは。」

「あつ、これ可愛いですね。名前は何て言うんですか？」

「これも光が作ったのか？」

「それとその箱の中身何〜？」

八口の出現により、クラスがかしましくなる。こうなることを予測したから八口を置いていったのに。

「そういえば古代。」

「織斑先生、何かようですか？」

「エーカー先生から伝言だ。『例の物は、出来ているか。』だそうだ。」

ああ、あれですね。出来ていますよ。待つていてください。

「はあ、まったくこれだから。古代を見習え。山田先生、ホームルームを。」

「え？は、はいっ！」

八口騒動で忘れてたけど、今はSHRの時間だった。最近、物忘

れが激しいかも。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名です！」

え？

「えええええつ！？」

この時期に転校生？4月の入学に間に合わなかったのかな？いきなりの転校生紹介にクラス中がざわつく。

（でも、なんで僕たちのクラスに？普通は分散させるはずなのに。もしかして誰かが情報操作したのかな。・・・まさかね。）

そんなことを考えていると、教室のドアが開いた。

「失礼します。」

「……………」

クラスに入ってきた2人の転校生を見て、ざわめきが止まる。

たしかにそうだね。だって……………。

そのうちの1人が、男子だったんだから。

第二十一話 ボーイ・ミーツ・ボーイ（後書き）

今回は『ゲッターG』の機体を説明したいと思います。

疑似IS 『ゲッターG』

????が作り上げた『本来この世界に存在しない』機体。ドラゴン号・ロイダー号・ポセイドン号の三機のゲットマシンからなり、ゲッタードラゴン・ゲッターロイダー・ゲッターポセイドンの3タイプにチェンジする。

陸戦特化型 ゲッタードラゴン

武装が豊富な手数で相手を圧倒する戦い方をする。本小説では最強技である『ゲッタービーム』を放つが、『ダブルオーライザー』の『トランザムライザー』に敗ける。

空戦特化型 ゲッターロイダー

全タイプ内で最も速く、その機動性で相手を攪乱戦法を得意とする。その機動性は『ダブルオーライザー』と同等。本小説ではそんなに活躍していない。

海戦特化型 ゲッターポセイドン

両肩のミサイルが特徴のパワータイプのゲッター。本作品では描写がないが、ミサイルでアリーナの壁を破壊した。本来の力を最も発揮できる所は海中である。

次回もお楽しみに。感想待ってます。

・・・やっぱりチートだわ、この機体。やんなきゃよかった。

キリエル三人衆：それはな~~~~い!!

第二十二話 2人の転校生（前書き）

だんだん寒くなってきたね。

光：こつちだとまだ夏になるかならないかの時期だけどね。

G：機械なので感覚はわかりませんが、冬はきつそうですね。

それでも寒さに負けないで更新するよ。それでは二十二話スタート。

第二十二話 2人の転校生

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします。」

転校生の1人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

へえ、ISを使える男性って3人もいたんだ。

「お、男……。」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方々いると聞いて本国より転入を。」

でも、男の子にしては綺麗な顔立ちだな。女の子だったら間違ひなく美人の部類に入るね。

「きや……。」

「はい？」

き、来た……。

「きやああああああ つ！」

一夏命名、ソニックウエーブが発動。その衝撃は僕たちにも直撃し、体力を徐々に奪っていく。エボリュウの電撃みたいだ。

「男子！3人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！古代ちゃんと違って守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった……！」

女子のテンションって、何なんだろう。しかも最後の……。たしかに僕は地球生まれじゃないけど。

「あー、騒ぐな。静かにしろ。」

先生。めんどくさがらないで止めてくださいよ。もう耐えられませんが……。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから。なんだろう。今日は山田先生が天使に見える。」

？何だろっこの異様なプレッシャーは。その源はもう1人の転校生だった。こんな子が・・・。

輝く銀髪。その髪を腰近くまで長く下ろしている。そして左目に眼帯。軍隊が使うものと似ている、もしくは同じかもしれない。それにしてもこのプレッシャー！。これほどのプレッシャーを出せるなんて。何があつたのかはわからないからどうしようもない。

「・・・・・・・・・・。」
当の本人は織斑先生を見ていて、まだ自己紹介をしていない。山田先生はおろおろしている。

「・・・・挨拶をしろ、ラウラ。」
「はい、教官。」

いきなり姿勢をただして素直に返事をしたけど、織斑先生に忠実なのかな。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ。」

「了解しました。」
体の真横にピツと伸ばした手、かかとで合わせた足、地面に垂直の背筋。やっぱり軍人だね。なんで軍人がここに転入してくるのか不思議だけど、何か事情があるのかもしれない。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」
「・・・・・・・・・・。」

クラスメイト全員が沈黙。みんな続く言葉を待っているけど、多分これで終わりだろうね。

「あ、あの、以上・・・ですか？」
「以上だ。」

やっぱり、必要最低限の挨拶しかしなっかよ。

「！貴様が。」
一夏が危険だ！直感でそう感じた僕は、八口を掴んでボーデヴィツヒさんのところに投げた。

「八口、ごめん。」

「アーレー！」

ハロは、ちょうどボーデヴィツヒさんが一夏を叩こうとした手に当たった。ハロって結構固いから痛いだろうな。

「ヒドイ。ヒドイ。」

ハロ、本当にごめん。あとで調節してあげるから。

「つく！私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか。」

それにしても、なんで叩こうと思ったんだろう。

「あー・・・ゴホンゴホン！ではHRを終える。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

早くここから出ないと・・・これから女子が着替えるから教室から出ないと。

『マスター、彼女は一体・・・』

『それはあとで。早く出ないと。』

「おい織斑、古代。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう。」

「

そうだった。さっきのやり取りですっかり忘れてた。

「君が織斑君で、君が古代君だね。初めまして。僕は。」

「それはまたあとで。早く更衣室にいかなきゃ。」

「そうだな。そうだ光、さっきはありがとな。おかげで叩かれずにすんだぜ。」

「どういたしまして。さあ、更衣室に行こう。」

そう言っつて、僕は一夏とデュノアさんの手を引いてそのまま教室を出た。

「僕たちは男子だからアーリーナの更衣室で着替えだよ。これから実習のたびに移動するから、慣れてね。」

「う、うん・・・。」

いやあ、アーリーナの更衣室が、ダイブハンガーの更衣室とはまた違って広いんだ。あれ？デュノアさんの様子がおかしいな。もしか

して……。

「デュノアさん、トイレとか我慢してる?」

「トイレ……って違うよ!」

「ならいいけど。行きたくなくなったら言ってね。」

そうなのだ。このままだと織斑先生の制裁が下るんだ。だって……。

「ああっ! 転校生発見!」

「しかも織斑君や古代君と一緒に!」

しまった。少し歩く速度が遅かった。HRが終わったから、早速各学年各クラスから情報先取のために駆けだしてきたんだ。ここで捕まるわけには!

「いたっ! こっちよ!」

「者ども出会え出会えい!」

そんな! こつも展開が早いなんて! 一体誰が……。はっ、まさかムナカタ副隊長!?

「織斑君の黒髪、古代君の茶髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね。」

「しかも瞳はエメラルド!」

「日本に生まれて良かった! ありがとうお母さん! 今年の母の日は河原の花以外のをあげるね!」

いや今年以外もちゃんとしたプレゼントをしてあげて! 僕みたい二度とできなくなる前に。

「な、なに? 何でみんな騒いでるの?」

「それは僕たちが男子だからだよ。」

「……?」

ん? 反応がおかしい。どうしたんだろう?

「いや、普通に珍しいだろ。だってISを操縦できる男って、今のところ俺たちしかいないんだぜ?」

「あっ! ああ、うん。そうだね。」

……。なんだろう。この違和感は……。うん。わからないや。

「しかしまあ助かったよ。」

「何が？」

「いや、やっぱり学園に男2人はつらいからな。なあ光。」

「そうだね。何かと気をつかったりと大変だからね。1人でも男子が増えるとか心強いからね。」

「そうなの？」

「うん。やっぱり何か引つ掛かってる。何かはわからないけど。」

「ま、何にしてもこれからよろしくな。俺は織斑一夏。こっちは古代光だ。」

「よろしくね。僕の話は光でいいよ。」

「俺も一夏でいいぜ。」

「うん。よろしく一夏、光。僕の話もシャルルでいいよ。」

「わかった。」

おお、一夏とハモったよ。なんていうタイミング。って言ってる場合じゃない！困まれた！

「仕方がない。シャルル、これ持ってて。」

「え？いいけど。」

シャルルに箱を渡してと。それじゃ、行きますか！

「2人共、しっかり捕まってて。」

僕は2人を抱えて、窓の縁に足をかけて……。

「つて光！ここ3階だよ！」

跳んだ。2人を抱えながら。

「ひゃあああつ！」

大丈夫だよ。ちゃんと木を伝っていくから。

第二十二話 2人の転校生（後書き）

突然ですが、出してもらいたいキャラ・機体を募集したいと思います。

光：急だね。

G：何ですか？

僕の知識じゃどんなキャラクター、どんなロボットがいるのかわからないからだ

よ。それに僕のモットーは『なるべく読者の意見を取り入れること』だからね。

サ：しっかし、ちゃんと送ってきてくれるのか？

フ：そこは読者の皆様に委ねよう。

期限は今のところ指定しませんので、どしどし送ってきてください。

第二十三話 登場！！『須左之男』！！（前書き）

【『須左之男』の詳細が明らかになりました。】

グ：やっとこの時が来た！！

今回は『須左之男』が出てくる話です。

一：どんな機体なんだ？

篝：気になるな。

光：それは話の中で出てくるから。

それでは二十三話スタート。

第二十三話 登場！！『須左之男』！！

さてとアリーナの更衣室に着いたよ。あれ？2人共ぐったりしてる。なんでだろう？

「マスター、自分の身体能力を忘れたのですか？」

そう言えば、ってまた人前で喋ってるし！

「あれ？今の声は誰？」

「マスターのISの『G4』です。以後よろしくお願いします。」

「初めまして。シャルル・デュノアです。」

何か意気投合してるし！なんでだろう？

「初めは驚いたけどな。ってうわ！時間ヤバイな！すぐに着替えようぜ。」

「そうだね。織斑先生は時間厳守だからね。」

エーカー先生に渡す物もあるし。さてと、着替えますか。

「わあっ！？」

ん？本当にどうしたんだろう。上着を脱いだだけなのに。

「ってまだ着替えてないの？早くしないと。」

「う、うん。着替えるよ。でも、その、あっち向いてて・・・ね？」

「????まあ、別に見たくはないけどね。それじゃ、あっち向いてるよ。」

そんなことより早く着替えないと！あとはズボンを脱いでGUT Sスーツを着るだけ。ここまでの所要時間、1分。

「2人とも支度できた？ってシャルル着替えるの早いね。」

「い、いや、別に・・・って一夏まだ着替えてないの？」

「ちよつと待ってくれ！もう少しだから。」

どうやらISスーツを着るために裸にならないといけないようで、摩擦によって着ずらいらしい。僕のは試作品らしいので、下着を着ても問題なくダイレクトに動かせるらしい。

「よっ、と。 よし、行こつぜ。」

「う、うん。」

「早く行こうよ。時間がない。」

あと5分しかない。僕たちの執行猶予時間にならないといいけど。

「遅い！」

「すみませんでした！」

やっぱり遅刻でした。もう少しだったのに……。

「いつも間に合うくせに……。」

ごめんセシリア。完全に僕が悪いです。

「どうしたのアンタ。また何かしでかしたでしょ。」

それは違うよ！と言いたいけど僕が言える立場じゃないね。

「それで古代少年。例の物は出来ているかな？」

「あ、はい。これです。」

3日3晩かけて作りました。どうぞ。

「こ……これは……。」

「『須佐之男』です。エーカー先生の愛機をモチーフにしてみました。」

僕が作った機体は、まるで侍の兜のような形の待機形態になる物で、簡単に言うといSじゃない。

「古代少年、感謝する。」

「良かった。喜んでもらえて。」

技術者として嬉しいです。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する。」

「はい！」

1組と2組の合同実習なので人数が倍以上。出てくる返事も妙に気合いが入っていた。

「織斑先生、少し良いですか？」

「どうしました？エーカー先生。」

エーカー先生、まさか……。

2人は少し話し合っていたけど、戻ってきた第一声が。

「急遽、エーカー先生が戦闘を実践することとなった。山田先生、出てきてください。」

キイイーン……。

この音。山田先生か……。

「あああーっ！ど、どいてくださいー！」

仕方ない。いくよ、『G4』。

「ガンダアム！」

ガンダムを展開させて、高速で接近。速度をあわせてから山田先生を抱えて、速度を落としながら地面に着いた。

「あああノノノ古代君？そそノノそろそろ下ろしてくれると嬉しいけど……。」

またやつちゃった。そろそろわかったと思っただけだな。

パキューン！

山田先生を下ろした途端、僕の顔があった所をレーザーが掠めた。これは……。

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……。
……セシリア、絶対怒ってる。顔は笑ってるけど、青筋が見える……。」

「……。」

ガシーンと何かが組み合わさる音 たぶん《双天牙月》を連結させた音が聞こえた。確かあれって投擲できるんじゃない……。
って本当に投げってきた！

「うわっ！」

条件反射でビームサーベルを取りだし《双天牙月》を叩き落とすんだけど、なんで！？

「ちっ。」

舌打ち！？僕って何か気に触ることもした？

「自分の胸に聞いてみなさい！」

「だからアンタは鈍感なのよ！」

確かに、この前鈴に鈍感って言われたけど、この事とどんな関係なの！？

「オルコット、鳳、ちょうど良い。エーカー先生と戦ってみる。」

「なっ……。まだ話が終わっていませんわ。」

「あいつに言いたいことがたくさんあるんです。」

「……僕ってどうしてこうも問題を持ってきちゃうんだろう？」

『マスターは女心をわかる努力をしているのですが……。』

なんでだろうね。あれっ？織斑先生が2人に何か話してる。何だろう？

「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの
出番ですわね。」

「まあ、やれるだけやってみせるわ。」

すごい。たった1声で2人のやる気を出したよ。僕もこんな風になりたい。

「話が変わるが、この機体はどのように使えば。」

あつ、エーカー先生に使い方を教え忘れてた。

「先ずこの兜を頭に被ります。」

「こっつか？」

「頭に被ると自動で固定されますので、あとは展開するだけです。」

これは時間をかけて考えたんだ。

「どうしたらよいのだ？」

「解除コードを入力すれば良いです。エーカー先生といたら・

・わかりますよね。」

「！そういうことか。わかった。」

エーカー先生は武士が今から決闘をするかのように立った。そして……

「解除コード、入力！コードネーム、『そんな道理、私の無理で
こじ開ける……』」

そう言うと、兜から緑色の粒子がでてエーカー先生を包む。そして爆発的に広がったあと、エーカー先生の体に装甲が展開された。それは全身装甲で、まるで鎧武者だ。・・・ちゃんと機能してるね。

「それが光さんの作ったIS『須佐之男』ですか。」

「違うよ。これは『バイオロイド』といって、単一仕様能力は発現しないけど基本能力は高いよ。」

「アンタ、何てものを作ったのよ!」

「私が頼んだのだ。古代少年は機械いじりが趣味だと聞いたのである。」

作ってるときは楽しかったな。全く飽きなかったし・・・、あつ。

「また作りたくなってきた!」

「・・・これ以上はダメ!」「」「」

一夏に筈、セシリア、鈴からこう言われた。良いじゃん、作ったつて。

「そろそろ始めようか。」

「え?あの、2対1で・・・。」

「いや、さすがにそれは・・・。」

「安心しろ。お前たちはエーカー先生にすぐ負ける。」

確かにそうだね。ノアさんから教えてもらったけど、エーカー先生は歴戦の戦士で当時最強のガンダムに幾度となく戦いを挑んで、戻ってきたらしい。

「手加減はしませんわ!」

「代表候補生の力、見せてあげる!」

「とくと見るが良い。古代少年が造りし我が『須佐之男』の力を!」

こうして、セシリア・オルコット & amp; 鳳鈴音対グラハム・エーカーの実戦演習が開始された。

第二十三話 登場！！『須左之男』！！（後書き）

久しぶりに『光の部屋』が再開しま〜す。

鈴：今回はアタシがゲストよ。

光：なんか懐かしいな。

たった2回やってないだけだよ。

光：そうだったけ？

鈴：そんなことどうでもいいから早く話し合いましょうよ。

光：そうだね。じゃあ質問するけど、あの時襲撃してきた『アルケー』と戦った

感想は？

鈴：あのIS、結構強かったわ。あの特殊兵器・・・、なんだっけ？

光：『GNフアング』。本体を突撃させて攻撃するほか、砲門を露出させてビ-

ムを発射することもできるんだ。

鈴：そうそれ！あれに結構手こずったわ。

光：なんでかサーシエスは8基同時に展開できるんだよね。なん
でだろ？

まあ、サーシエスクオリティだね。

・・・おっと、もうこんな時間。それでは次回もお楽しみに。

光&鈴：感想待ってます（るわ）。

第二十四話 流石！ Graham先生！！（前書き）

グ：なんだこのタイトルは。

良い案が浮かばなかったから直感で書いてみた。

光：さすがにそれは・・・。

サ：なんか羨ましいぜ。

それでは二十四話スタート。

第二十四話 流石！グラハム先生！！

「くっ！当たり前さ！」

「何よあの速さ！ダブルオーライザーと変わらないじゃない！」

私グラハム・エーカーはセシリア・オルコットと鳳鈴音を相手に
実戦演習を行っている。2人とも私の『須佐之男』を前に手こずつ
ているようだ。それもそのはず、本来『須佐之男』は私の世界のス
サノオを元に古代少年が造ったのだ。性能ではISと同等、いやそ
れ以上か。どちらにせよ、相手として申し分ないはずだ。

『エーカー先生。この実戦演習は『須佐之男』のテストでもある
ので、例の『あれ』をお願いします。』

『！・・・『あれ』か。わかった。』

そろそろ私も本気で相手させてもらおうか！

「すげえグラハムさん。セシリアと鈴の動きについていってる。」

「むしろセシリアと鈴がグラハムさんのペースに乗らされている
な。」

「それにしても、古代君が造った・・・バイオロイドでしたっけ
？あの性能、ISにも引けをとりません！」

「全く。古代の奴、いったい何をしてくれてたんだ。」

みんな思い思いのことをいつてるね・・・織斑先生、それは禁
句です！とにかく、エーカー先生が例の『あれ』を使ってくれるよ
うなので、本気を出すかな？『須佐之男』の性能がついていくとい
いけど・・・。

『・・・いくぞ！トランザム！』

よし、トランザムの発動実験は成功。あとは稼働時の記録を録れ
ば良いから演習をみてみようっと。おお。セシリアと鈴ったら、さ
つきより格段と速くなった『須佐之男』に戸惑ってるね。まだまだ

いろんな機能が搭載されてるんだけどね。

『今の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ!』

エーカー先生、やっぱり燃えてる。良かった。先生は気に入ってくれたみたい。

『切り捨て・・・御免!』

あ、演習が終わった。勝ったのはやっぱりエーカー先生だ。最後は長剣の『舞零武』で、止めだった。エーカー先生には、剣が似合うね。

「エーカー先生、お強いですわ。」

「手も足もでなかつたわね。」

「2人ともお疲れ様。怪我とかしてない?」

エーカー先生と『須佐之男』のコンビネーションは最高だから、2人が怪我してないか心配だったんだ。

「大丈夫ですわ。お心使い感謝しますの。」

「私も大丈夫。伊達に代表候補生してないわよ。」
良かった。安心したよ。

「古代少年、この『須佐之男』は私が受領した。心から感謝する。」

「いやあ、嬉しいですな。ハハハ・・・。」

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力が理解できただろう。以後は敬意を持って接するように。」

わかりました。イル・・・織斑先生。

「古代、2度と同じ間違いをするなよ。」

「・・・すみませんでした。織斑先生。」

はあ〜。やっぱり癖はそう簡単に直せないね。

「専用機持ちは織斑、オルコット、古代、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳だな。では8人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな。ああ、古代はエーカー先生に付いてくれ。新しい機体についてはお前しかわからないからな。では分かれる。」

わかりました。僕も『須佐之男』の調整をしたいと思っ
ていまし
たし。

「よろしく頼むぞ、古代少年。」

「はい。先ずエーカー先生専用機のバイオロイド『須佐之男』は
・
・
・
・
」

あのあと、機体性能や武装の説明や本家スサノオとの相違点を伝
えたり、他に追加したいものなどを聞きました。エーカー先生は「
この性能で十分だ。」って言うていたけどね。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備
古代の場合はバイオロイドの整備を行うので、各人格納庫で班別に
集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。で
は解散！」

一夏は、訓練機を1人で片付けたらしい。よく頑張ったね。僕は
今、一夏やシャルルとともにいた。

「まあ、いいや。シャルル、着替えに行こうぜ。俺たちはまたア
リーナの更衣室まで行かないといけないしよ。」

「え、ええつと・・・僕はちよつと機体の微調整をしていくから、
先にいつて着替えててよ。」

確かに大切だねそれは。ちよつとずつ微調整をすることによって、
最高のコンディションに近付けるんだ。なるほどね。

「ん？いや、別々一夏、行こう。」な、どうした光？

「微調整には時間がかかるから僕たちは先に行こう。」

「いや、でも「行こう一夏。」・・・わかった。」

本当だったら脱ぎたくないけど、GUTSスーツは制服じゃない
から着替えなきゃ。それと遅くなったけど、人の嫌がることを強要
しちゃダメだよ。

第二十四話 流石！ Graham 先生！！（後書き）

安定してます。流石はGrahamさんですね。

グ：そうか？

光：僕もそう思います。ミスター・ブシドーの名は伊達じゃないです。

一& 篤& 千& 真：ミスター・ブシドー？

G：こちらの話です。気にしないでください。

慶：やっぱり格が違うのか？

光：それは僕にもわかりません。

次回も楽しみにしてください。

サ& フ& ?& ? : 俺（私）たちを忘れるなよ（ないでもらいたいな）。

ダーク（以後ダ）：俺の出番はいつなんだ？

e x - （以後e）：気長に待とうじゃないか。

第二十五話 楽しい楽しい昼休み（前書き）

光：今回は一夏目線だね。

一：頑張るぜ。

G：上がらないようお願いします。

G：第二十五話、スタートだフラッグファイター諸君！！

第二十五話 楽しい楽しい昼休み

「・・・どういうことだ。」

「ん？」

昼休み、俺たちは屋上にいた。

普通、高校の屋上といえばアレがコレして生徒立ち入り禁止なのだが、ここIS学園ではそんなことは一切無い。

「アレがコレして？」

「要するに、生徒が禁止項目を破り使用禁止になったということです。」

ナイス『G4』。簡単に言えば、そんなことをする生徒がいないってことだ。うつくしく配置された花壇には季節の花々が咲き誇り、欧州を思わせる石畳が落ち着いている。それぞれ円テーブルにはイスが用意されていて、晴れた日の昼休みともなると女子たちで賑わう。

今日はみんなシャルル目当てで学食に向かったのだろう、屋上には俺たち以外誰もいなかった。イエイ、貸し切り。貸し切り、イエイ。

「そんなに貸し切りが良いの？」

「いや、女子たちがいるとゆっくり食べられないだろ？」

「そうですねよマスター。今朝のことを忘れたのですか？」

「・・・確かに落ち着いて食べられないね。」

どうやら光もわかってくれたようだ。

「それはともかく、どうなってるんだこれは。」

「どうって、天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな・・・。」

ちらっと箸が横に視線をやる。そこにいるのは、順にセシリア、鈴、光、そしてシャルルだ。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ。それに

シャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし。」

「そ、それはそうだが……。」

「まあまあ、落ち着いて箸。それよりも早く食べようよ。時間がなくなるよ。」

光の言う通りだな。みんなそれぞれが用意した弁当を持っている。IS学園は全寮制なので、弁当持参にしたい生徒のために早朝のキッチンが使えるようになっていて。1度どんなものかと思って光と一緒に覗いてみたが、プロが使っているような器具ばかりで2人で啞然としたのを覚えている。さすがは国家直轄の特別指定校、使われているお金のケタが違う。

で、箸は今日弁当を作ってきたらしい。しかも俺の分まで幼なじみって素晴らしい。

「ねえ光。それは誰に作ってもらったの……。」

「そうですね。私も知りたいですわ。」

光のやつ、セシリアと鈴に言い寄られてる。たしかあれは……

「誰って、僕が作ったんだけど。ダメだったかな？」

「そ、そうでしたか。」

「な、なんだ。良かった。」

まあ、あの2人が見間違うのも無理はない。端から見れば、プロが作ったように見えるもんな。しかも弁当箱も手作りらしい。

「光って、一体……。」

「気にしたら負けだ。」

俺だって初めはそう思った。光って人間なのかって思ったときもあったが、今はそう思わない。

「どうしたの鈴。もしかして食べたい？」

「え、いいの！」

「また作れるしね。1番食べたいものを食べて良いよ。」

「じゃ、じゃあれちようだい。」

鈴が選んだのは、程よい色に焼き上がった卵焼きだった。俺もそれが1番食べてみたかった。

「はい、あーん。」

「え？」

「どうしたの？いらない？」

「ち、違つわよ！もちろんもらうわ！」

鈴のやつ、何顔を赤くしてるんだ？セシリアも何か羨ましそうに見てるし。

「ところで箒、そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがたいんだが……。」

無言で弁当を差し出され、どうにも返事に困ってしまう。

「じゃあ、早速……おお！」

もらった弁当を開けると、鯖の塩焼きに鶏肉の唐揚げ、こんにゃくとゴボウの唐辛子炒め、ほうれん草のゴマ和えというなんとフランスの取れた献立の数々がそこにはあった。

「これはすごいな！どれも手が込んでそうだ。」

「つ、ついでだついで。あくまで私が自分で食べるために時間をかけただけだ。」

「とか言っちゃつて。箒ったら今朝頑b「わーわーわー！」。」

箒、光の言いたいことが聞こえな「聞こえてなくてもいいよ別に……ならいいか。」

「ん？箒、なんでそつちに唐揚げがないんだ？」

「ああ、それはね「光！」はいはい。」

？どうしたというのか。聞いたらずいことだったのか？

「じゃあまあ、いただきます。」

とりあえず唐揚げをほおぼる。

「おお、うまい！」

弁当なので当然時間がたっているし冷めているのだが、それでも箒の唐揚げはうまかった。

「……ぐふっ！」

光、セシリアの料理を食べてしまったか。セシリアの料理は見た

目は良いのだが、良いのは見た目だけであり味がすさまじくまずい。いくら光でも完食は「・・・でも、案外いいかも！」な、なんだと！セシリアの料理に好評価を付けるなんて。やっぱり光ってよくわからない！・・・今は唐揚げのことに集中しよう。

「これって結構仕込みに時間かかってないか？ええと、混ぜてるのはシヨウガと醤油と・・・んぐんぐ。なんだろうな。絶対食べたことのある味なんだけど。」

「おろしニンニクだ。それとあらかじめコシヨウを少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな。」

「へえ！それはいいな。今度俺もやってみよう。」

あまりにおいしいので思わず驚いてしまった。・・・マジかよ。

光のやつ、セシリアの料理を完食してやがる。本当に謎だ。

しかし、なんだ。アレだな。女子っていうのは炊事に家事に、覚えはじめると一瞬だな。男はものすごい時間の積み重ねがあつてそこそこできる程度だというのに、女子のこの基本スペックの違いが羨ましい反面悔しくもあつたりする。光もそうだったらしい。

「いやでも、本当にうまいな。箸、食べなくていいのか？」

「・・・失敗した方は全部自分で食べたからな・・・。」

「ん？」

「あ、ああ、いや、大丈夫だ。まあ、その、なんだ・・・。おいしかったのなら、いい。」

さつきから時々聞き取れないことがあるんだが、箸はなぜ小声で話すのだろうか。聞かれるとまずいことだったりするのかね。

「本当にうまいから箸も食べてみるよ。ほら。」

「な、なに？」

「ほら。食べてみるって。」

「い、いや、その、だな・・・。」

なぜかしどろもどろになる箸。その類は心なしか赤いように見える。

「箸。人の好意には甘えてみるのもいいんじゃない。」

「そ、そういうものなのか？」

「そういうもの。」

「な、なら……。」

光にそう言われて、決心したらしい。

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん。』っていうやつなのかな？仲睦まじいね。」

「そうそう。この2人は本当にお似合いだね。」

シャルルや光はそう言ってるが、俺たちはそんなに仲良くないぜ。この前なんか、木刀で叩かれそうになったし。まあ、今はそんなことも無いけどな。

「じゃ、はいあーん。」

このはいあーんってなんでか普通に言えるよな。日本人の特権だろうか？

「あ、あーん……。」

多少ぎこちないながらもそう言って口を開け、唐揚げをほおばる筈。その頬がわずかに赤いところを見ると、照れているのかもしれない。うーん、やっぱり高校生になってはいあーんはなかったか？

「い、いいものだ……。」

「だろ？うまいよな、この唐揚げ。」

「唐揚げではないが……うむ。いいものだ。」

「これは好感触かな？」

なにが好感触なんだ？よくわからないぞ光。

「まあ、とりあえず食べようぜ。食べてすぐダツシユは避けたい俺と光、シャルルはまたアリーナの更衣室までいかないといけないうんだからな。」

「僕はともかく、シャルルは服の下に着てるんじゃない？」

え？どういうことだ？

「ん？一夏と光つてもしかして実習で毎回スーツ脱いでんの？」

「だって僕のスーツは生地が厚いから上に着てると変なんだ。」

「え？脱がないとダメだろ？」

鈴の言葉につい聞き返してしまう。もしかして。

「女子は半分くらいの子が着たままよ。だつて面倒じゃん。」
ぐあつ、そうだったのか……。たしかにまあ、汗は吸収してくれるし動きの邪魔にはならないし、着たままでもいいのか。

「ていうことは「いくら一夏でも女子の体をじろじろ見ない。」
つて光！なんでわかつたんだ？」

「この頃最近、人の考えを読めるようになってきたんだ。」
・・・光って人をやめてるよな。普通人の思考は読めないって。

「・・・・・・・・。」

「どうかしたの、一夏。」

「男同士つていいなと思つてな。」

いや、本当に。今日から同じ性別の強い味方が2人に増えたわけだ。・・・今日から俺は1人部屋だけだな。

「あとで八口を貸してあげるから。」

「そういう問題じゃない！なんで俺が1人部屋なんだ！光が1人部屋でいいじゃないか！」

「仕方ないじゃん。ジャンケンで負けちゃつたんだから。」

つく。たしかに負けたが……。でも理不尽だ！

「イチカ、ゲンキダセ。」

八口、気持ちは嬉しいけど……。

「一夏のところにもいくから。ね。」

シャルル、ありがとう。こんなに嬉しいことはない。

「・・・灯台もと暗しに気づかぬ愚か者め……。」

その後、なぜか俺は1日中ずっと篝から白い目で見られた。なんでなんだろうか。女子の考えていることは本当にわからない。

最後に光はこう思った。

「はああ。いつになったら一夏と篝が付き合うのかな。」

第二十五話 楽しい楽しい昼休み（後書き）

今回はみんな疲れているので後書きはこれだけです。

楽しみにしててくれた読者の皆様の期待を裏切るようにで

悲しくなります。

第二十六話 イレギュラー対イレギュラー（前書き）

今回は光たちが出てきません。

ダ：俺たちのショータイムだ。

e：全く。誰に似たのか。

慶：そんじゃ、二十六話スタート！

ああっ！それ僕の台詞！！

第二十六話 イレギュラー対イレギュラー

光たちが昼食をとっているそのとき。

とある太平洋の沖合いで2機のISが戦っていた。

「結構やるじゃねえか！」

「伊達に戦闘訓練を積んでねえ！」

片方は先日ISアリーナの上に立っていた紫のISで、両腕に搭載された実体剣で剣撃を繰り出していく。もう片方は先日別世界から来た『ザ・ワン』と呼ばれたISで、紫のISの剣撃を避けながら背中に搭載されたドラグーンで紫のISを狙い撃つ。

「当たれえ！」

「そう簡単に墜ちてたまるかよ！」

『ザ・ワン』のパイロットの射撃の正確さには目を見張るものがあるが、紫のISのパイロットの回避能力も侮れない。

「だが、お前の機体には格闘武器しか搭載されていない！遠距離から攻撃すれば、やられはしない！」

確かにそうだ。剣より銃のほうがリーチが長い。その分、銃を使う方は十分な距離を保って攻撃できる。しかし……。

「俺の『タイラント』を嘗めるな……！！！」

紫のIS『タイラント』は圧倒的なスピードで『ザ・ワン』に接近して膝蹴りを繰り出してきた。射撃に集中していた『ザ・ワン』のパイロットは回避出来ずに直撃し、吹き飛ばされる。

「これでおw」待て、ダーク。彼は『亡国企業』の一員ではない。『何！』

とどめをさそうとする『タイラント』のパイロット、ダークを『ex-』が止める。どうやら『ザ・ワン』のパイロットを『亡国企業』のIS操縦者と間違えたようだった。

『調べてみたんだが、『亡国企業』の男性IS操縦者はこのような機体を使っていない。よって彼は『亡国企業』の一員ではないの

だ。」

「ちつ。無駄骨か！くそっ！おい、その男のIS適合者。命拾いしたな！」

そう言っつて、ダークは何処かへ飛翔していった。

「なんだったんだ？IS？まさか、ここっつて、アニメの世界？でも原作じゃあんなIS出てないし……。どうなってるんだ？」

彼 彼ノ方慶一は、そんなことを考えていた。

彼と光が出会うまで

あと数日。

第二十六話 イレギュラー対イレギュラー（後書き）

今回は『タイラント』の機体説明をしていきます。

ダ：俺の機体に惚れるなよ。

ダーク専用IS『タイラント』

姿はガンダムアストレイミラージュフレームサイドイシュー。攻撃力・防御力・機動力など全ての性能が東製全てのISを超える。射撃武器は無く、『タイラントモード』と『ブルートモード』を使い分けて戦う。しかし、この機体を使うと、パイロットに負荷が掛かり体を蝕み最悪の場合死に至るため、人はこのISを『呪われたIS』ともいう。

大丈夫なのダーク？

ダ：ああ。今はな……。それはともかく次回もよろしくな。

感想待ってます。

第二十七話 IS特訓!! (前書き)

今回は結構頑張りました!!

光：いつもは頑張ってたの!?

G：いつものネタなのでしょう。

つれないな『G4』は。では二十七話スタート!!

第二十七話 IS特訓！！

「じゃあ、改めまして。よろしくね、シャルル。」

「うん。よろしく、光。」

夕飯を食べ終わったから、2人で部屋に戻ってきた。前に鈴と一緒にだったからベットは2つある。そのせいで僕の機材が隅に追いやられてるけどね。

「へえ。光って何でも作れるんだね。」

「何でも作れる訳じゃないけど、機械全般は作れるつもりだよ。」
シャルルは部屋の中の機材に興味津々、僕は食後にお茶を飲んでいる。

「マスター。これからどうしますか？」

『G4』は普通に話してくる。シャルルはその事を知ってるから驚かない。ましてや普通に会話をしてるから、女子ってよくわからない。普通はもっと驚くでしょ。

「それでシャワーのことだけど、順番ってどうしよう。」

「あ、僕が後でいいよ。光が先に使って。」

「じゃあ、僕が先に使って後からシャルルが使うってことで。」
因みに僕はどっちかっていうと、湯船に浸かりたいんだけどね。

「そういえば光はいつも放課後にISの特訓しているって聞いたけど、そうなの？」

「うん。一夏が特訓してるから、それだったら僕も特訓しようかなって思ったんだ。」

これは本当の話。理由は、一夏が特訓してるからっていうことと、いつ何時に先日の紅いISが来ても戦えるようにしたいからなんだ。更に今月は学年別トーナメントがあるしね。

「僕も加わっていいかな？何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ。」

「それはいいですね。1年の専用機持ちがほとんど集まっているの

でいい特訓ができると思います。」

「じゃあ、お願いするよ。それじゃ明日は一夏の特訓に付き合おう。僕も特訓できるしね。」

「うん。任せて。」

とりあえず腕立て伏せに腹筋、背筋を各100回ずつするつもりだったけどもう寝ようかな。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ。」

「そ、そうなのか？一応わかつているつもりだったんだが……。」

「つもりじゃ駄目だよ。きちんとわからないと。」

今日はシャルルとボーデヴィツヒさんが転校してきてから5日後の、つまり土曜日だ。土曜日はアリーナ全解放なのでほとんどの生徒が実習で使用する。僕たちも同じで、今日もこうして皆で一夏の特訓に付き合っている。もちろん、僕のもね。

「一夏の場合、知識として認識してる程度かな。さっきの手合わせの時だって、ほとんど間合いを詰められなかったじゃん。」

「うっ……、確かに。『瞬間加速』も読まれてたしな……。」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。」

「特に一夏の瞬間加速は直線的だから軌道予測で攻撃されるね。」

「しかし、瞬間加速中の無理の軌道変更は控えてください。マスタワーでなければ最悪の場合、骨折します。」

「……なるほど。」

一夏はちゃんと僕たちの話を聞いてくれる。でも僕たちだけである。なぜなら……。

『「うっ、ずばーっとならってから、がきんっ！どかんっ！という感じだ。」』

『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。光だってそうでしょ。』
『はあ？なんでわかんないのよバカ。』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ5度傾けて、回避の時は後方へ20度反転ですの。これくらい光さんは簡単にできますわ。』
はつきり言つて、全くだめ。

篝の教え方は擬音語が多すぎて相手に伝わりにくい。鈴の教え方は言いたいことはわかるけど感覚は人それぞれだから不確定。セシリアの教え方は専門的すぎて一夏には理解できない。

だからシャルルに任せてあるんだけど、3人は腑に落ちないみたい。

「一夏の『白式』って後付武装がないんだよね。」
イコノミイザ

「そうみたい。僕も調べてみたんだけど、拡張領域バズロッドが空いてないらしいんだ。だから量子変換は無理みたい。」
インストール

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティの方に容量を使っているからだと思うよ。」

後でこの事を聞いてみたんだけど、『白式』って欠陥機らしい。まったくなんでこんな機体を送ってきたんだろう。

「ワンオフ・アビリティっていうと・・・えーと、なんだっけ？」

「言葉通り、唯一仕様の特殊才能。各ISが操縦者との相性が最高状態になったときに自然発生する能力のこと。僕でいったら、『M・C・S』モビル・チェンジ・システムがその1つ。」

僕の『G4』も一夏の『白式』と同じで第一形態で発現しているけど、僕の場合はノアさんがわざと発現させたらしい。でも一夏のは珍しいし、何より他にも同じ単一仕様が発現しているISがいるみたい。その機体と『白式』って何か因縁があるのかも。

「じゃあ、射撃の練習をしてみようか。はい、これ。」

そう言つて渡したのは、五五口径アサルトライフル《ヴェント》。

「え？他のやつアンロックの装備って使えないんじゃないのか？」

「本来はそうだけど、所有者が使用許諾すれば使えるようになる。」

んだ。」

「その通り。今一夏と白式に発行したから、試しに撃つてみて。」

「お、おう。」

やっぱり一夏は銃器のことをわかっていないからか、構えがなっていない。これはシャルルに任せてみるかな。

「か、構えはこうでいいのか？」

「えっと・・・脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

うん。シャルルに任せて良かった。分かりやすく、丁寧に教えているから構えがなってきた。

バンッ！！

「うおっ！？」

「どうっ？」

「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』って言う感想だ。」

速いか・・・。一夏らしいな。

「ねえ、ちよつとあれ・・・。」

「ウソっ、ドイツの第3世代型だ。」

「まだ本国でのトライアル段階って聞いてたけど・・・。」

ああ、そういうこと。だからボーデヴィツヒさんが来たのか。

つまりはこういうこと。ドイツ本国で第3世代型の試作機ができたから、IS学園で性能テストをしに来た、ってところかな？

「・・・。」

いつ見てもボーデヴィツヒさんは一夏にプレッシャーをかけてる

ね。一夏はそのことに気づいていないけど・・・。

「おい。」

おっ。ボーデヴィツヒさんが初めて喋ったぞ。自己紹介以来だね。

「・・・なんだよ。」

一夏、反応が小さい。しっかり受け答えしないと。

『未遂でしたが、一夏はボーデヴィツヒに叩かれそうになったのですよ。無理です。』

そっか。そうだったね。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え。」

「こんな密集空間で戦うなんて、周りを巻き込む気!？」

「イヤだ。理由がねえよ。」

「貴様にはなくとも私にはある。」

自分の都合を他人に押し付けるなんて……。

「また今度な。」

「ふん。ならば戦わざるをいないようにしてやる!」

「まずい!止めないと!」

ラウラ・ボーデヴィツヒはその漆黒のISを戦闘形態にしようとしたが、突如『G4』（ユニットはガンダム）を展開した光に阻止された。

「こんなところでいきなり戦闘を仕掛けるなんて……他の人を巻き込みたいんですか!」

「邪魔だ、どけ!」

どうやら阻止されたことに苛立っているようだ。ラウラはものすごい剣幕で光を睨む。しかしウルトラマンとして幾多の戦いをしてきた光にとって、どうということはない。

「イヤだ!そんなに戦いたいんじゃ、僕が相手するよ!」

「ふっ、面白い。どれ程の実力が確かめてやる。」

一触即発の場に他の生徒はただ見ていることしかできなかった。

『その生徒!何をやっている!学年とクラス、出席番号を言え!』

突然アリーナのスピーカーからの声が響く。どうやら担当の教師が騒ぎを聞きつけてやってきたのだろう。

「……ふん。今日は引こう。」

2度横やり入れられて輿が注がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていく。その後ろ姿が見

えなくなるまでの間、光はずっとラウラを見ていた。

「すまねえ光。2度も助けてもらって。」

「いいよ。これくらいのは当然だよ。」

つい数秒前まで感情が露になつていた表情はもうない。

「今日はもうあがるつか。四時も過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね。」

「おう。そうだな。あ、銃サンキユ。色々と参考になった。」

「それなら良かった。」

そういつて一夏は戻っていった。

「えつと・・・じゃあ「分かつてる。先に着替えてるね。」うん。」

こうしていつも通り、光はシャルルより先に戻った。

なんでこうなつたんだろう。

一夏がなぜか山田先生の手を握っている。しかもやや興奮気味である。どういう経緯でそうなつたのかはわからない。更にまずいことにその場をシャルルにも見られたということだつた。

「喜べ光、シャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「「そう。」」

あ、シャルルと言葉が重なつた。すごい偶然。まあ、大浴場が使えることは嬉しいんだけどね。

「ああ、そういえば織斑君にはもう1つ用事があつて、古代君には伝言です。」

内容は一夏は白式の正式な登録に関する書類を書くこと、僕はエーカー先生が須左之男の性能について詳しく聞きたいそうだ。

「そういうことだからシャルル。先にシャワーを使って。」

「え？あ、うん。」

さて、エーカー先生のところに行きますか。

第二十七話 IS特訓!! (後書き)

まだアンケートを受け付けているのに、いつこつにこない・・・。

光：気長に待ちましようよ。

一：1人来ただけでも儲け物だぜ。

篤：まだ来るかもしれないぞ。

そうだね。もう少し待ってみるよ。

グ：それでこそ君だ。作者よ。

そんなわけでまだまだ募集してますので、どしどし送ってください。
い。

サ：できればこつち側のキャラを頼むぜ。

フ：勧誘するな、サーシエス。

?????：我も期待してるぞ。

ダ：感想も待ってるぜ!!

e：ダークが壊れていく。私はどうしたら・・・。

?：気にしていると、身が持たないぞ。

第二十八話 シャルルの正体（前書き）

とうとうこの話か・・・。

光：いったい何なの？

G：説明を要求します。

この話を見たらわかるよ。それでは二十八話スタート！！

第二十八話 シャルルの正体

やっと戻ってきた。今午後8時。

エーカー先生に1から教えていたらこんな時間になっちゃった。

「ただいま。ってシャルルはまだシャワーかな。」

部屋に帰ってくるとシャワーの音が聞こえてくるから、シャルルが使ってるんだろう。

「さて、GUTSハイパーガンとPDIの整備でも・・・そうだがしかボディーソープが切れたって言うてたっけ。持っていこうつと。」

シャワールームは洗面所兼脱衣所とドアで区切られているから、とりあえず脱衣所まで持つて行ってそこで声をかけようかな。

そう思つて僕は洗面所に入った。

ガチャ。

ん？あれ？さっきドアを開けて入ったよね。またその音が聞こえるのって変だな。・・・分かった。シャルルがシャワールームのドアを開けたんだ。ちょうどいい。シャルルに渡そうつと。

「シャルル。これ、替えの。」

「ひ、ひ、ひか・・・る・・・？」

「へ・・・？」

シャワールームから出てきたのは、紛れもない『女子』だった。・・・ここは僕とシャルルの部屋だよな。ドアにはカギがかかってたから他の人が入れるわけがない。何がどうなってるんだ？

「とりあえず・・・はいこれ。替えのシャンプー。」

「あ・・・うん。ありがとう。」

「じゃあ、出てるね。」

替えのシャンプーを渡して、脱衣所から出る。これは夢なのかな？

「現実逃避しないでくださいマスター。」

やっぱり現実かあ〜。

「あ、上がったよ……。」

「う、うん。」

背中越しに聞く声は、やっぱりシャルルのものだった。さっきまで『G4』と話し合った結果、シャルルしかないという結論になったからそんなに驚かなかった。でも振り向くと、そこには女子がいた。

「……飲み物でも飲む？」

「あ、えーと……。じゃあ、貰おうかな。」

僕は冷蔵庫から缶ジュースを2つ出して片方をシャルル？に渡す。「不本意ですが、何故シャルルは性別を偽っていたのですか？」不意に『G4』がそう聞いた。僕も気になってたんだ。

「僕も聞きたいな。あ、でも言いたくなかったら、言わなくてもいいよ。」

「う、うん。」

僕だって人が嫌がることを強要したくないからね。

「それは、その……実家の方からそうしろって言われて……。」

「実家ってというとデュノアだから……、フランスのデュノア社か。」

「そう。僕の父がその社長。その人からの直接の命令なんだよ。」

「……なんで親なのに『その人』っていうんだろ。しかも実家の話を始めてから、シャルルの顔が曇り出していた。」

「……親なのに、なんで命令されるの？」

「僕はね、光。愛人の子なんだよ。」

「……え？」

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが無くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でI

S適正が高いことがわかって、非公式ではあつたけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね。」

「・・・何それ。世間に公にならないように連れ去って、実験してたら適正が高いからパイロットにさせた？」

「ふざけないで！いい加減にしてよ！」

「ひ、光・・・？」

見ると、右手にあつたスチール製の缶が意図も簡単に潰れてた。でもそんなことは関係ない。

「それが親のすることなの！自分の子供を道具のように使つて。人は道具なんかじゃない！」

そのせいでシャルルは性別を偽つてIS学園に転入しなければならなくなつたんだよ！これが大人のすることですか！

「ど、どうしたの？光、変だよ？」

「ご、ごめん。つい熱くなつちやつた。」

「いいけど・・・本当にどうしたの？」

「僕は・・・自分の親の顔がわからないんだ。」

「え・・・？」

「マスター、それはどういうことですか？」

ああ、そういえば『G4』にも言つていなかったね。

「僕は物心がついたときから1人だつたんだよ。両親はどうしたのか、兄弟はどこにいるのか、つていつも思いながらね。そんな僕が生きていけたのは、周りの人たちのお陰なんだよ。」

みんなは身寄りのない僕のことを思つて、全員で僕を育ててくれたんだ。・・・3000万年前にみんな死んじゃつたんだけど。

「気にしなくてもいいよ。もう過ぎたことだし、今の生活に満足してるから。話を続けて。」

「うん。それから少し経つて、デュノア社は経営危機に陥つたの。」

「・・・欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』のせいなんだね。」

「その通り。量産機ISのシェアが世界第3位でも、結局リヴァイブは第2世代型なんだよ。計画から除名されているから第3世代型の開発は急務なの。」

前にセシリアから聞いたことがある。現在、欧州連合では第3次イグニッション・プランの次期主力機の選択中で、イギリスのティーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型がトリアルに参加していて、実稼働データの採取のためにIS学園に送られたみたい。

「それで、デユノア社が注目を浴びるための広告塔。そして特異ケースの一夏と僕、そしてそのISのデータを取るために男装をしたんだね。」

「そんなところかな。でも光にばれちゃったし、きっと僕は本国内に呼び戻されるだろうね。」

「フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな。」

「それでいいの？」

「言いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ。」

「やっぱりこんなこと間違ってる……。」

「……だったら、ここにいて。」

「え？」

「特記事項第21です。」

「『G4』の通り。特記事項第21、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。つまり、この学園にいれば、少なくとも3年間は大丈夫。なんとかなるよ。」

「光、よく覚えられたね。特記事項つて55個あるのに。」

「『G4』のお陰だよ。」

「伊達に高性能AIではありません。」

「そうだね。ありがとう2人とも。」

良かった良かった。シャルルの顔に笑顔が出た。シャルルには笑顔が似合うね。

「それに、たとえ卒業しても僕がシャルルを守るよ。」

「え／＼その・・・う、うれしいよ／＼」

ん？シャルルったら、シャワーだったのにのぼせてる。大丈夫？

「それよりこれからどうします？」

「シャルルのために、『ジエガン』の設計図をIS用に変更してデユノア社に送ろう。」

「そ、そんなことができるの？」

「僕を誰だと思ってるの？」

まあ、変更っていつてもちよつと手直しするぐらいだから・・・
つと。完成。

「これを匿名で転送。その代わりにシャルルの戸籍の所得、『ラファール・リヴァイブカスタム？』の改造を認めさせようつと。」

「やつぱり光って凄い。」

友達のためならなんだつてするよ。友達を傷つけるやつは許さないしね。

「つてもうこんな時間。シャルル、ご飯食べた？」

「うん。もう食べたよ。」

「じゃ、寝ようか。」

「うん。」

さてと、明日から忙しくなるぞ〜。シャルルのISを改造するけど、元を『ストライクガンダム』にしようかな。

僕はそんなことを思いながら、眠りについた。

第二十八話 シャルルの正体（後書き）

光：まさかシャルルが女の子だったなんて。

G：それにしてもさほど戸惑いませんでしたね。

G：古代少年はこのような状況に慣れているようだな。

サ：何でGN Xじゃないんだよ。

フ：それを言うならギラ・ズールであろう。

僕はジェガンが好きなの！！文句を言わない！！

サ&フ：……………。

大丈夫。GN Xもギラ・ズールも出すから。

サ&フ：流石は作者だな。

ダ&慶：次回もお楽しみに。

e：感想を待っている。

第二十九話 登場『ストライク・リヴァイブ』！！（前書き）

光が作りし機械第3弾！！

G：作ったというより、改造ですね。

G：たしかに。

光：だって『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』を元にしてるんだもん。

まあそれは置いておいて、二十九話スタート。

第二十九話 登場『ストライク・リヴァイブ』！！

「それでどうするの？」

日曜の朝、僕はシャルルと共にIS整備室にいた。シャルルのISを改造するためのだ。

「『ラファール・リヴァイブカスタム？』に新しいシステムを搭載しようかなって考えてるんだ。」

「どんなシステム？」

「『ストライカーパックシステム』だよ。」

「『ストライカーパックシステム』？」

ここで読者のみんなにもわかるように説明させていただきます。

『ストライカーパックシステム』とは、『機動戦士ガンダムSEED』に出てくるMS『ストライク』が搭載するシステムで、戦況に応じて適切な武装に変更することで、一機で各々の戦闘機と同様もしくはそれ以上に性能を引き伸ばすシステムのことです。更にストライカーパックには大容量バッテリーが内蔵されていて、瞬時にエネルギーを回復させる効果もあります。

以上、僕の説明でした。

「す、凄いよ、そのシステム。」

「シャルルのISには、このシステムと、エール・ソード・ランチャー・ライトニングの4つのパックを拡張領域に量子変換するよ。そうすると、武装は標準で『ヴェント』と『ガラム』を残しておく。」

僕は3つの画面を見ながら、手を動かして書き換えしていく。シャルルが初めてこれを見たときはすごく驚いていたよ。

「許可は取ってあるんだよね？」

「大丈夫。『ジエガン』の設計図を転送したら、快く了承してくれたよ。」

それほど第3世代型の開発にこだわってるんだね。

「武装は既に完成してるから、あとは機体だけだ。よし、改造するぞ！」

ここをこうして、ああしてと……。

「完成したよ。名前は『ストライク・リヴァイブ』。」

「これが新しい僕のIS……。」

「やっぱり4つが限界だったよ。拡張領域が倍といっても、ストライカーパックで9割埋まっちゃった。」

「だけど、それほど強力な武装なんだ……ん？」

「誰かそこにいるの？」

そう言うと、機材の後ろから誰かが出てきた。

「……いつから気づいてたんですか？」

「さつきだよ。何か視線を感じるなっと思ってたんだ？」

出てきたのは、髪がセミロングの、長方形レンズの眼鏡をかけている女子だった。

「あの子って、たしか4組の更識さんだよ。」

更識っていうと……たしか生徒会にも同じ名字の人がいたね。

「何か用？」

「いえ、なにも。」

そう言うと、更識さんは戻っていった。変だな。じゃあなんで、後ろに隠れてたんだらう？でももう聞けない。

「光。このあとどうするの？」

「そうだね。『ストライク・リヴァイブ』の稼働実験をしたら、少し手直しするよ。」

「そのあとは何もない？」

「ごめんね。そのあと何かと忙しいんだ。でもシャルルは戻っててもいいよ。」

色々と造りたいものがあるんだ。『換装装備』《パッケージ》とかね。

「・・・そうなんだ。」

「それじゃあデータを取るために、アリーナに行こう。」

「う、うん。」

「一度言ってみたかったんだ。」

「見せてもらおうか。新しくなったシャルルのISの性能とやらを。」

「光、その台詞は似合わないよ。」

「いったい何をしたいんですか？マスター。」

「・・・酷い言われようだよ。」

「さてと、パッケージでも・・・ん？」

「また整備室に戻ってきた僕の目に、1体のISが入ってきた。こんなISあつたっけ？」

「えつと名前は・・・『打鉄式』って言うんだ。」

「名前からして、純国産量産機IS『打鉄』の発展機なんだろうね。よくみると、ディスプレイが表示されている。」

「どれどれ・・・うわあ無茶苦茶だよこの構成。本来媒体を繋げるところに媒体を繋げないでダイレクトに繋いでるし、スラスターなんて本来の性能の30%も出せてないよ。ああ、書き換えたい！」

「誰なの！この機体を作ったのは！」

「・・・なんでここにいますか？」

「ふと声をかけられたから振り向いてみると、先程の更識さんがい

「た。」「いやあ自分のパッケージを作ろうとしたら、このIS『打鉄式』を見つけてちゃって見てたんだ。」

「！・・・開発ができるんですか！？」

「何かいきなり声を大きくしたけど、どうしたの？」

「あ・・・、一緒にみてもらっても、いいですか？」

「もちろんいいけど、弄ってもいい？」

「私が造ったISですけど……、いいです。」
「やった！よし、改造するぞ！……ん？」

「もしかして、自分1人で造ったの？」

「はい。でもまだ基本しか……。」

「そうだったんだ。難しいよね、開発って。」

「じゃあ始めようか。」

僕は『打鉄式式』のディスプレイを全部表示させる。……へえ、
『マルチ・ロックオン・システム』か。

「このシステムは『フリーダム』のやつを流用して……、荷電
粒子砲はZガンダムの『ハイパー・ビーム・ランチャー』を使って……。」

「『フリーダム』？『ハイパー・ビーム・ランチャー』？」

「ああ、こつちの話だから気にしないで。」

「これって結構、簡単にできるかも……。」

それから3時間かけて、機体を仕上げた。といってもまだまだ手
直しは必要だけどね。

「……色々ありがとうございます。」

「気にしないで。僕も知識を役立てれて良かったしね。」
見ると、時計は午後3時になるうとしていた。

「そろそろご飯を食べにいこうつと。じゃあね、更識さん。」

「……簪です。」

「え？」

「私の名前は、更識簪です。……名字で呼ばれるより、名前で
呼んでもらいたいです。」

簪さん……か。いい名前だね。

「……わかったよ、簪さん。またね。」

「……本当にありがとうございました。」

僕は簪さんと別れて、食堂に向かう。今日も納豆定食ご飯大盛りだ。

第二十九話 登場『ストライク・リヴァイブ』！！（後書き）

一：完全にISとして超えてるぞ『ストライク・リヴァイブ』！！

箒：流石は光と言ったところか。

セ：全距離対応型ですか。厄介ですわ。

鈴：最強じゃんこのIS！！

シャルル（以後シャ）：ありがとう光。

光：これくらい当然だよ。

次回もお楽しみに。・・・あつ、ガンプラ作りたいな。

一同：自由すぎる！！

第三十話 光の本気4文の1（前書き）

光：何このタイトル！？

グ：何かデジャブを感じるぞ・・・。

G：早く始めてください。

それでは三十話スタート！！

第三十話 光の本気4文の1

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜の朝、眠い目を擦りながら教室に向かっていった僕は廊下にまで聞こえる声で目を覚ました。

なんで眠いかっていうと、お昼ご飯を食べたあと整備室でパツケージを4時間かけて造って、時間があるから『アレ』も造ってたら終わったのが午前2時。アリーナのシャワーを使い、部屋まで戻って来たときは既に3時を過ぎてたから急いで寝たんだ。でもまだ眠かったよ。

「なんだ？」

「さあ？」

一緒にいるのは、一夏とシャルル(男装バージオン)。朝食を終えてここに来る途中偶然一夏と会ったから、一緒に来たんだ。

「また例の『女子同士で秘密の話し合い』でしょうか？」

「かもね。でも、声大きすぎだよ。」

「これじゃ秘密でもなんでもないよ。」

「本当だつてば!この噂、学園で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か古代君と交際でき。」

「俺(僕)がどうしたつて?」「」

「「「きゃああつ!?!」「」」

あらら、驚かれちゃった。普通に一夏に揃えて話しかけたつもりだったのに。

「で、何の話だったんだ?俺たちの名前が出ていたみたいだけど。」

「う、うん?そうだったっけ?」「」

「さ、さあ、どうだったかしら?」「」

話を逸らされてる。・・・裏があるな。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！私も自分の席につきませんと。」

どこかしらよそよそしい様子で2人はその場を離れていく。他のみんなも自分のクラスか席に戻っていく。

「・・・あ、GUTSハイパーガンを部屋に忘れてきちゃった。」

「何げに物騒なこと言うなよ光！」

「光、なんで銃を所持してるの？」

し、しまった~~~~！

「はあ、GUTSハイパーガンを没収されちゃうかな・・・。」

あのあと織斑先生がやって来て、一夏が先生にそのことをいつちやっただよね。そのとき織斑先生は僕を見てたけど、絶対怒ってるよ。まあ、そのときはそのときだから、仕方ないよね。

「よし、次の授業のじゅん「なぜこんなところで教師など！」」「やれやれ・・・。」「・・・？」

この声は、織斑先生と・・・あのラウラ・ボーデヴィツヒか。何か重要そうな話のようだから、気配を消して聞いてみるか。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ。」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

失礼な！ダイブハンガーだって極東の海にあるんだ！ラウラ・ボーデヴィツヒにそんなこと言われたくない！

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません。」

「ほう。」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません。」

・・・ラウラ・ボーデヴィツヒ。どこまでみんなを格下扱いすれば気が済むんだ！絶対許さない！

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど「そこまでにしておけよ、小娘。」っ……!」

織斑先生……?

「少し見ない間に偉くなったな。15歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る。」

「わ、私は……。」

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ。」

ぱつと声色を戻した織斑先生がせかして、ラウラ・ボーデヴィツヒは黙したまま早足で去っていった。……うん。織斑先生が僕の代わりに代弁してくれた。

「その男子。盗み聞きか?……最も。そうしていると無意味だがな。」

「……いつから気づいていたんですか?」

「ついさっきだ。感情を剥き出しにするまで気づかなかったぞ。」
良かった。ラウラ・ボーデヴィツヒには気づかれていないようだ。

「じゃあ、教室に戻ります。」

「待て。」

「なんだろう?話でもあるのかな?」

「はい。」

「お前が持つているという銃は、護身用で人を傷つける物ではないんだな。」

「はい。できれば、みんなを守りたいです。」

「そうか。それならいい。」

織斑先生はそう言うのと去っていった。ということは、GUTSハイパーガンは没収されないんだね。

「あ、教室に戻らなきゃ。」

僕は、ばれないように廊下を走り出した。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。なぜか知らないが、光もやる気みたいだし。」

「今日は高機動特訓だ。アリーナを高速で駆け抜けるんだ。たしか場所は「第3アリーナ」だ。」
「ありがとう、箒。」

僕はシャルル・デュノア。IS学園の1年生です。これから光たちと一緒に、特訓をするために廊下を歩いています。でも、アリーナに近づくとつれてだんだんと慌ただしくなってきたけど、何があつたのかな？

「観客席で様子を見てみよう。」

光がそう言ったから、続いて観客席に入ってアリーナのほうを見してみた。

「誰かが模擬戦をしてるみたいだね。でもそれにしては様子が。」

ドゴオン！

「……！？」

突然の爆発に驚いたけど、煙の中から飛び出して来た影にさらに驚いた。

「鈴！セシリア！」

光が叫ぶけど、特殊なエネルギーシールドでこっちの声は向こうに聞こえない。2人のことが心配なのはわかるけど……。

「！？やっぱり！」

そう言うとき光は観客席から飛び出していった。やっぱりって？

不思議に感じた僕は、アリーナで起こった爆発の中心部へと視線を向けると、漆黒のIS『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラの姿があつた。

よく見ると鳳さんとオルコットさんのISはかなりのダメージを受けていて、機体はところどころが損傷し、ISアーマーの一部は完全に失われている。あれじゃあ、ダメージレベルCまでいっちゃうよ！光はどこにいってるの？

「これで終わりだ。」

ラウラが2人に攻撃しようとしたとき、ピンク色の閃光がラウラのISを掠め、シールドエネルギーが削られる。その攻撃を行った人は……。

「光！」

ユニット『ガンダム』を展開した光が立っていた。

「鈴とセシリアをよくも！」

ビームライフルを最大出力でラウラ・ボーデヴィツヒに撃ち込む。避けたけど、シールドエネルギーはもらった！

「何っ！？ 掠めただけでエネルギーが！」

「よそ見るな！」

続けて3回ビームを撃ち込む。するとラウラ・ボーデヴィツヒは右手をかざし、何かを形成する。すると、ビームが掻き消えラウラ・ボーデヴィツヒに当たらなかつた。

「このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前では無駄だ。どこかで聞いたことがある。」

A I C、パツシブ・イナーシャル・キャンセラー。またの名を『慣性停止能力』ともいう。任意で物理的に動く物を止めることができる、1対1で反則的な強さを見せるシステム。だけど認識できなければ止めることはできない。だったら……。

「システム起動、『A L I C E』！」

僕はユニット『ガンダム』に搭載されている『A L I C E』を起動させる。

「今から高機動戦闘を行うから、サポートして！」

『了解シマシタ。無茶ハヤメテクダサイネ。』

『A L I C E』を起動させた『ガンダム』は速いぞ！

第三十話 光の本気4文の1（後書き）

光：『ALICE』か……。

ALICE（以後A）：私モ出番ガ欲シイデス。

ごめん。ALICEはここでお役目御免なんだ。

A：……。 （後ろにEX-Sガンダムがいる）

EX-S……！？本当にごめん。後書きでも出すからガンダムだけは……、イタイイタイイタイイタイ！！

G：……。じ、次回もお楽しみに。

A：感想ヲ待ツテマス。

第三十一話 古代・光対ラウラ・ボーデウィツヒ（前書き）

A：後書キデ出シテモラエルヨウニナリマシタ。

光：よかったね。

そ、それでは三十一話スタート・・・。

G：・・・災難でしたね。

第三十一話 古代・光対ラウラ・ボーテウィツヒ

ここはとある建物の1部屋。

この部屋にいるのは、サーシエス、フロントル、そしてこの2人を仲間にした???（名前は秘匿）がいた。

「どうだ？あのシステムの様子は？」

「ああ。まだ起動しないのでなんとも言えないが、あれは代表候補生でも抑えることはできんな。」

「どうやら何かのシステムの話をしているようだ。だが代表候補生でも抑えることができないシステムとはなんであろうか。」

「しつかしまあ、条件が揃わないと起動しないなんてな。欠陥品じゃねえのか？フロントル。」

「私がそうしたのだ。そうでもしないと、感づかれるからな。」

「成る程、流石はフロントルだぜ。」

サーシエスはフロントルを素直に褒める。

「そこで、フロントルに頼み事をしたい。」

「なんだ？」

「IS学園で学年別トーナメントをやるらしいのだが、ドイツ技術者としてIS学園に潜入してくれ。」

「???は何をさせようとしているのだろうか？」

「目的は世界で唯一の男性IS適合者2名、もしくはそのISの強奪だ。その解析結果を見たいものでな。」

「わかった。引き受けよう。」

「助かる。それから、あと1人を連れて行って欲しい。」

「そう言っって呼んだのは、腰に刀をさした屈強そうな男だった。」

『マスター、鈴さんとセシリアさんの救助も考えてください。』

『わかったよ。『ALICE』。2人までのルートを割り出して。』

『了解シマシタ。ルートヲ検索シマス。』

割り出されたルートを通って2人のところまでいき、両脇に抱えて再び飛翔する。でも2人はISが解除されていて速く飛べない。

「ふん。戦いで相手に背を向けるとは、まだまだだな。」

そんな僕にレールガンが向けられる。避けきれない！

レールガンが発射されそうになったとき、赤色のビームがレールガンに直撃、爆散する。ビームが発射されたところには、『ストライク・リヴァイブ』を展開したシャルルと『白式』を展開した一夏がいた。

「光、大丈夫か？」

「うん。2人をお願い。」

2人を一夏たちに頼んで、ビームサーベルを抜いてラウラ・ボーデヴィツヒに突貫する。相手もレーザー手刀を出し接近する。斬りかかるうとしたとき、2つの影が割り入ってきた。

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れますな、エーカ―先生。」

「全くです。模擬戦で死傷者が出るのだけは避けたい。」

織斑先生にエーカ―先生、なんで生身でIS用の近接ブレードを軽々と扱ってるんですか？

「古代少年、この決着は、学年別トーナメントでつけてもらえるか？」

「・・・わかりました。」

ラウラ・ボーデヴィツヒは許せないけど、エーカ―先生が言うなら仕方ないよ。僕はISの装備状態を解除する。

「織斑、デュノア、ボーデヴィツヒ、お前たちもそれでいいな？」

「教官がそう仰るなら。」

「は、はい。」

「僕もそれで構いません。」

一夏、シャルルも追従する。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。全員解散！」

エーカー先生は改めてアリーナ内の全ての生徒に向けてそう言った。

「……………」

あれから光の機嫌が悪い。まるで光が怒ったときみたいだ。

「光さん。私たちは大丈夫ですわ。」

「そうよ。怪我だって大したことないし。」

「……………」

駄目だ。完全に怒ってる。

「光、どうしたの？」

「シャルル、覚えておけ。光を怒らせないほうがいい。」

「……………」

シャルルはわかってないな。

「光は怒ると、ずっとあのままだぞ。」

「…………それは、やだね。」

あのときの光は怖かった。

ドドドドドドツ……………!

「な、なんだ？何の音だ？」

次の瞬間、ドカーン！と保健室のドアが吹き飛ばす…………いや、

本気で吹き飛んだんだ。

「織斑君！」

「デユノア君！」

「古代…………君？」

入ってきた、いや雪崩れ込んできた女子は、光の負のオーラに気負けしてる。どんだけ怖いんだよ。

「……………何？」

おお、やっと口を聞いてくれたぞ。

「あ、その・・・これ・・・。」
光は女子から紙を貰う。

「・・・」今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、2人組での参加を必須とする。『・・・？』

「だからね・・・その・・・古代君と組みたいなって思っただけ・・・。」

それにしても、光に話しかけてる女子は本当に勇気があるな。

「・・・ごめんね。シャルルと組もうと思ったんだ。多分、一夏にも組みたい人がいると思うよ。」

あれ？光の機嫌が直ってる？

「まあ、そういうことなら・・・。」

「はあ、もう少し早く誘いに来ればよかった。」

納得してくれたのか、女子たちは各々が仕方ないかと口にしながら、1人また1人と保健室を去っていく。それよりも、なんで光の機嫌が直ったんだ？

「ボーデヴィツヒさんを憎んでも何も変わらないし、何も進展しない。だったらボーデヴィツヒさんのことを詳しく知ったほうが、今よりずっと仲良くなると思ったんだ。」

「・・・なるほど・・・。」

光も色々なことを考えてるんだな。

「・・・それに、一夏と篤がペアになれば安泰だからね。」

「ん？光なんか言ったか？」

「いや何も。」

「・・・それは、光には似合わない！」「・・・」

「そんなあ〜〜。」

でもいつも通りの光が1番だ。このときの俺はそう思った。

「流石は『俺』だな。あんな奴ごときに勝てない訳がない。」

「だがどうする？また『亡国企業』が攻めてきたら彼は・・・。」

「大丈夫だろ。アイツには仲間がいる。」

月明かりが学園を照らす夜。ダークとex+は話し合っていた。

「それに何かあつたら俺が・・・、ゴバア！」

ダークは急に咳き込み、大量の血を吐き出す。

「大丈夫か！？いくら君でもこの『タイラント』の負荷に耐えられない。無茶をするな！」

「大丈夫だ、問題ない！こうなることは既に受け入れている！でなければこの機体に乗らない！」

物凄い剣幕で、ダークはそう主張する。

「こんなところで俺は死ねない！アイツを守るためにも、ここで！」

そう心に誓うダークであった。

第三十一話 古代・光対ラウラ・ボーテウィット(後書き)

今日も後書きがありません。

本当にすみません。

次回も楽しみにしててください。

第三十二話 学年別トーナメント当日（前書き）

ついに学年別トーナメントの日が来たよ。

光：何か波乱の予感が・・・。

サ：おいおい。お前の周りはいつだって波乱の連続だろ。

光：・・・？

G：マスターにはまだ早いです。

それでは三十二話スタート。

フ：見せてもらおうか。今後の作者の小説とやらを。

第三十二話 学年別トーナメント当日

学年別トーナメント当日。

僕は今、シャルルと共にアリーナの更衣室にいる。僕は既にGU T Sスーツを着ていて、シャルルもI Sスーツを着ている。

「すごい。通常の3倍の観客がいる……。」

各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、そのた諸々の顔ぶれが一堂に会していた。・・・TPCの人はいるはずないよね。

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。1年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位者にはさっそくチェックが入ると思うよ。」

「へえ。そうなんだ。」

どつちかって言うと、チェックには入りたくないな。僕は機械を弄りたい派だからね。

「あまり興味ないみたいだね。」

「まあね。それよりも、一夏たちはどのブロックで戦うんだろう？」

あのあと、僕は一夏と篝を（無理矢理）ペアにさせて先生に登録、ついで自分のも済ませちゃった。一夏から色々言われたけど、篝は『よくやった！』って目で合図してきたから結果オーライってことで。

「そろそろ対戦表が決まるはずだね。」

おっと。試合に集中しないと。

「1年の部Aブロック1回戦1組目って、いきなりなの？」

どうせなら、7組目がよかったな。験担ぎってことで。

「勢いが肝心なときもあるからね。」

まあ、シャルルがそう言うなら仕方ないよ。

「あ、対戦相手が決まったみたい。」

やっとか。誰と戦うんだろう？一夏かな？

「え？」

「・・・運が良いのか悪いのか。1回戦目の対戦相手は、ボーデヴィツヒさんのペアだったんだ・・・。」

「しかし楽しみである。どのように戦うのかじっくりと見てみたいものだ。なあ、フロンタル。」

「そうですね。1年にもなかなかの手慣れがいるようですし、ギンガナム様が退屈することはないでしょう。」

「そうか。ハツハツハツ！」

彼は本当に優秀なパイロットなのか？『心配するな。すぐにやられるような奴ではない。』と彼は言っていたが、信用できない。

「ん？どうしたフロンタル。考え事か？」

「・・・いえ、なんでもありません。ギンガナム様。」

「・・・もう少し様子を見てみるか。」

「どうやら、あいつを倒す前に貴様を倒さなければならんとはな。」

「ボーデヴィツヒさん。なんでみんなと分かり合おうとしないの？それじゃいつまでたっても自分を理解してもらえないよ。」

「ふん。この前はフルネームで呼んでいたが、今度はさん付けか。どういふ心境の変化だ？」

駄目だ。一切こつちの話聞いてもらえない。

試合開始まで5秒前。4、3、2、1 開始。

「叩きのめす。」

「だったら・・・。ここで勝ってボーデヴィツヒさんのことを知ってみせる！」

今回はユニットをユニコーンにして戦っている。まずは個々撃破だ。

「シャルル。僕はボーデヴィツヒさんと戦うから、相手のパートナーと戦って。」

「わかったよ。気をつけてね。」

シャルルはエールストライカーを展開、一気にラファール・リヴアイブを装備した1年生に接近する。あつちは任せられるね。

「余所見していただけるのか？」

『『シユヴァルツエア・レーゲン』の大型レールカノンの安全装置解除を確認しました。敵機、こちらをロックオン中です。』

『『G4』、例のアレを展開して。』

『了解。』

右手に光が集まり、あるものを形成する。出てきたのは、身長ほどの長さの鎌だった。

「食らえ！『ビームシザーズ』！」

僕も一夏の真似して、『瞬間加速』で一気に接近、『ビームシザーズ』を降り下ろす。対応の遅れたボーデヴィツヒさんはぎりぎりで避けたけど、ワイヤーブレード発射口を斬られる。

「なんだその武器は！？リストに載っていなかったぞ！」

「『ビームシザーズ』。昨日徹夜で造ったんだ。載ってるわけないよ。」

造り終わったのはこれまた午前2時。今朝はシャルルに起こしてもらったんだ。

「ちっ、厄介だ……。」「

「まだまだ。はあっ！」

それから立て続けに斬っていく。紙一重で避けてるけど、着実にボーデヴィツヒさんのシールドエネルギーを奪っていく。ここでの台詞を言ってみようかな。

「神聖なるユニコーンのお通りだよ！」

『マスター。ここでネタに走らないでください。』

良いじゃん、別に。言ってみたかったんだから。

「光、お待たせ。」

そこにちょうどシャルルが帰ってくる。今はソードストライカーを展開してる。ボーデヴィツヒさんのパートナーを見ると、ISの装甲に大きな切り傷がある。・・・出力を調節しないと。

「ここからが本番だね。」

「そうだね。さあ、見せてあげるよ。僕たちのコンビネーションを！」

「すげえな光。ラウラと対等に戦ってるぜ。」

「シャルルのほうもすごいぞ。なんだあの装備は？」

「『ストライク・リヴァイブ』。それがデュノアさんの新しいISの名前ですか。」

「光つたら、本当に出鱈目な技術力を持つてるわね。」

「ここはモニタールーム。」

学年別トーナメントの中継をリアルタイムで放送している数少ない場所で、他にも大勢の生徒がいる。

「『ストライカーパックによる、状況変化に対応できる換装型IS』がコンセプトみたいですね。」

「さらにストライカーパックにはバッテリーみたいなのが入ってて、シールドエネルギーを回復することもできる、ってなんなのよこれ。」

「長期戦にもってこいだな。」

「しかもシャルルの高速切替でさらに厄介になってる。絶対光とシャルルのペアと当たりたくないな。」

まあ切実な願いであろう。誰でもこんな化け物じみたペアと戦いたいと思わないだろう。それほど、この2人のコンビネーションがよいのであろう。

「ふあー、すごいですねえ。二週間ちよつとの訓練であそこまで

の連携が取れるなんて。」

教師だけが入ることを許されている観察室で、モニターに映し出される戦闘映像を眺めながら真耶は感心したように呟く。

「はうう、格好良いですう……。」

「また始まってしまったか。」

「グラハム、気にしていたらきりがない。今は試合に集中しよう。」

「そうだな。古代少年の戦いかたを見させてもらおうか。」

完全に教師としてではなく親友同士として話し合うのは、織斑先生とエーカー先生である。

「それにしても、急に学年別トーナメントの形式変更とは。やはり先日の事件のせいか。」

「詳しくは聞いていないが、おそらくそうだろうな。より実践的な戦闘経験を積ませる目的で、ツーマンセルになったのだろうな。」

「ずいぶんと大層な目的だな。自衛のためのツーマンセルとは。」
「操縦者はもちろん第3世代型兵器を積んだISも守らなくてはいけないが、教師の数が有限である以上それらは原則自分で守るしかないからな。」

まあ、織斑先生とエーカー先生がいれば、並大抵のテロリストは歯が立たないだろうが……。

「しかし、デュノアのISを改造してしまうとは。古代少年には好意を抱く。」

「!……どういうことだ?」

「興味以上の対象ということだ。私の知人にも、そのような対象の人物がいた。それと同じだ。」

「そうか……良かった。」

「ん?どうした千冬?」

「な、なんでもない。」

エーカー先生は恋愛には疎い。織斑先生の想いに気付くのはいつになるのだろうか。

「シャルル！」

「光！」

僕は『ビームシザーズ』を収納して、代わりに両腕に『ビームガトリングガン』を展開。シャルルもランチャー・ストライカーを展開してボーデヴィツヒさんに狙いをつける。

「一斉射！」

『ビームガトリングガン』からビーム弾が、『ランチャー・ストライカー』から何十ものミサイル、赤色ビームが飛び出してボーデヴィツヒさんに迫る。

旋回運動をしたりAICを展開したりして回避するが、幾つか被弾する。シールドエネルギーや装甲を削り取る。

「一気に決めるよ。」

『ビームガトリングガン』を投げて、バックパックからビームサーベルを取り出し斬りかかる。

「ふつ。撃ち続けていれば勝てたものを。」

ボーデヴィツヒさんはいつものようにAICを発動させようとする。待つてました！

「シャルル、今！」

「了解！」

そこには、僕の『ビームガトリングガン』を構えているシャルル。さつきシャルルと『ストライク・リヴァイブ』に使用許可を発行したからシャルルでも使える。

「当たれえ！」

引き金を引いて、銃口からビーム弾が放たれる。回避もできず、ボーデヴィツヒさんは全弾被弾して落下していく。やったかな・・・？

(こんな・・・こんなところで負けるのか、私は・・・！)
確かに相手の力量を見誤った。それは間違えようのないミスだ。
しかし、それでも。

(私は負けられない！負けるわけにはいかない・・・！)

(自らの欲望に忠実になりし者よ。よくぞ成し遂げた。)

突然私の頭の中に声が響く。なんだ、こいつは！

(これより、この機体の主導権は我が掌握する。)

な、からだか・・・動かない・・・！

(汝は、我が剣となれ。)

「あああああつ！！！」

突然、ボーデヴィツヒさんが身を裂かんばかりの絶叫を発する。

同時にシュヴァルツエア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、僕
たちを吹き飛ばす。シャルルは近かったから、僕より強い衝撃がき
たはずだ！『瞬間加速』でシャルルに接近して、後ろから抱き抱え
る。

「シャルル、大丈夫？」

「ひ、光ノノ。ありがとう。大丈夫だからノノ離して。」

良かった。シャルルは無事か。

「一体何が・・・。！？」

「え？」

2人で目を疑った。その視線の先では、ボーデヴィツヒさんのI
Sがスライム状になって、ボーデヴィツヒさんを飲み込んでいった。
その黒い、深く濁った闇の中に、見知った物があった。

「なっ！アレは、ゴブニユ!？」

ボーデヴィツヒさんの全身を包み込むと急速に変化、成形してい
く。そしてそこに立っていたのは、ゴブニユであってゴブニユでな
い『何か』。頭部と右腕はゴブニユのだが、胴や左腕は見たこと
ないロボットの腕で、さらに左腕にはガトリングガンがついている。

脚部と背中 của バーニアも見たことないロボットのものだったが、胴や左腕とも違うロボットのものだった。・・・これも僕が倒すべき敵なのか？

「ふうう。ん？本来の体ではないな。気に入っていたのだがな、日輪丸、散光丸、電光丸。ほう、腕に種子島のようなものがついている。『ガトリングガン』というのか。面白い。」

喋った！『G4』以外にも喋るISがいるのか？

「ん？・・・そうか。わかった。」

会話してる？誰としてるんだ？

「そのユニコーン。貴様には恨みはないのだが、ここで死んでもらおうか！」

突如、未確認ISが戦いを仕掛けてきた。ここにはみんながいる。守らないと！

第三十二話 学年別トーナメント当日（後書き）

光：あれ？たしかこの場合だと、織斑先生を模倣したISになるはずなのに何で？

フ：私が改造したからだ。そうしなければ『武者頑駄無』が登場できないのでな。

G：『武者頑駄無』？

『G4』は知らない？あの有名なゲームのMSだよ。

サ：まあ、無理もないな。

ダ：俺もこの前知ったしな。

e：同じAIの私もそうだったからな。

今回はこのゴブニユ擬きこと『武者頑駄無』を解説するよ。次回もお楽しみに。

第三十三話 光対イレギュラー（前書き）

光がゴブニュ擬きと対決だ！

一：なあ。ゴブニュってなんだ？

箒：それになんだあのISは。あれもガンダムなのか？

光：一応ガンダムみたい。よくわからないけど。

セ：強そうですね。

鈴：でも、光なら勝てるわよ。

それでは三十三話スタート。

第三十三話 光対イレギュラー

『武者頑駄無。』

『ん？』

『今日の前にいる白い機体、ユニコーンは私たちの敵だ。倒せ。』

『そうか。わかった。』

これで『武者頑駄無』が世界で2番目の男性IS操縦者である『古代光』と戦うことになった。どうなることやら。

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認識、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す！』

「フロントル、どうする。このままではあの『武者頑駄無』とかいうやつが破壊されてしまうぞ。」

「彼はそれほど弱くはありません。それに、いざとなったら私たちが援護に行けば良いのです。」

『武者頑駄無』。見せてもらおうか、新しくなった君の力とやらを。

「ふつ。なかなかやるな。久しぶりに楽しめそうだ。」

「結構強い！シャルル、気をつけて！」

「わかった。光もね。」

こっちは2人で相手はたったの1人。なのにこっちが押されている。なんて強いんだこのISは！

「光！シールドエネルギーを補給して！」

シャルルはライトニングストライカーを展開するけど、どうみてもシャルルのほうが少ない。ライトニングストライカーは自分のシールドエネルギーを仲間へ供給するから、バッテリーで回復しても僕に回したらシャルルの身が危険に晒されちゃう。

「僕は大丈夫だから、シャルルは退避して。」

「でも、そうしたら光が……。」

「絶対戻るから心配しないで。」

「……わかった。必ずだよ。」

そう言つて、シャルルはピットに戻つていった。これでシャルルの身は安心だね。

「『G4』、システムを起動させるよ。」

「マスター、あのシステムは危険です！止めてください！」

「でも、そうしないとみんなが危ないんだ！わかつて！」

「！……わかりました。無茶だけはしないでくださいね。」

「……『G4』から許可が下りた。これで使用できる。」

「『NT-D』システム、起動！」

突如、ユニコーンの体中から赤い光が漏れだした。と同時にユニコーンの装甲がスライドして、中の赤い装甲が露になる。フェイスカバーも上にスライドし、一角が割れてV字アンテナになる。その姿にもはやユニコーンの面影はなく、ガンダムに変わった、いや『変身』した『G4』ユニット『ユニコーン』の姿であった。

「ゲオオオオオオッ！！！」

獣の咆哮染みた光の叫びがアリーナにこだまする。

「姿が変わったところで何がどうなっ！」

『武者頑駄無』はあまりの強さに言いかけた言葉を飲み込む。明らかに攻撃性が増し、その体から何とも言えないオーラが滲み出している。その戦いかたは、まるで獲物を狩ろうとする獰猛な獣のようである。

「ガアアアア！！！」

光はビームサーベルで『武者頑駄無』の胴体を切り裂く。その傷の隙間からラウラの体が露になり、光はさらに傷を大きくして人が通れるぐらいの大きさにする。そこから素早くかつ傷つけないよう

僕は2対1で戦っていた。いくら『デストロイモード』でもこれは無理だ。

そう思っていると、スライドしていたすべての装甲が元に戻り、『ユニコーンモード』に戻ってしまった。まだそのときじゃないのに！

「元の姿に戻ったか。」

「ちようどいい。一気に決めるぞ！」

あのとときの紅いISとはまた違う紅いISにビームライフルで、ゴブニユ擬きに薙刀で狙いをつけられる。

「悪いが、ここで死んでもらおう。」

「『炎山』！灼熱弾掃射！」

2機のISから攻撃を受けてユニットが『ユニコーン』から『フースト』になった。つまりはシールドエネルギーがゼロになったということ。

「ふんっ！」

「はあっ！」

ゴブニユ擬きからタツクル、紅いISから蹴りを繰り出された僕は、その衝撃を直に受けてアリーナの壁まで飛ばされて、装着していた『G4』が解除されてしまう。火の弾が当たっていたのか、肩から血が流れていてGUISスーツは至るところが血で濡れていた。・・・これ絶対みんなに心配をかけてるよね。

（ここまでなのか・・・。）

まだボーデヴィツヒさんのことわかれていないのに。みんな・・・僕はもう諦めていた。

「諦めるな光！諦めなければ、奇跡は起こる！」

・・・この声は！

僕の前に灰色のオーロラが現れて、それが消えたときに僕の知る人の姿があった。

「ソロさん！」

「よお、光。もう大丈夫だぜ。」

1ヶ月前に僕と手合わせをしたソロさんだった。

第三十三話 光対イレギュラー（後書き）

今回はゴブニユ擬きもとい『武者頑駄無』の性能紹介です。

VTシステムタウ 『武者頑駄無』

ブラックボックス化したVTシステムを元にしてフロントルが開発したシステムにより『シュヴァルツエア・レーゲン』が変異したIS。姿は頭部と右腕がゴブニユギガ、胴部と左腕がデスフェイサー、背部バーニアがグローカービシヨップ、下半身が武者頑駄無となっており、カラーリングも武者頑駄無になっている。武装は『炎山』と『ガトリングガン』である。

『炎山』

ガイアに出てきた炎山の上あごが刃部になった薙刀。形はゲルググのビームナギナタ。刀身に炎を纏わせて威力を上げることが可能。技に『灼熱弾』 『プロミネンスシールド』 『プロミネンスストライク』がある。

武者頑駄無（以後武）：こんなものか。

それでは次回もお楽しみに。

武：感想を待っている。

第三十四話 登場超古代戦士!! その名は『ティガ』!! (前書き)

光…この題名。もしかして…。

考えは大体わかるから言えるけど、あえて言わないよ。

G…では早く始めましょう。

そうだね。では三十四話スタート。

第三十四話 登場超古代戦士！！その名は『ティガ』！！

「来て・・・くれたんですね！」

「光大丈夫か？何かすごいことになってるな。ってかアレゴブニユみたいだな。」

「どうやら・・・僕の、知らないロボットが・・・ゴブニユと、融合してるみたいです。」

「強そうだな。光、どうする？」

僕の全く知らないロボットだからどんな強さかわからない。でも僕がウルトラマンだったときもそうだった。困難な出来事にも立ち向かって、いくつもの敵を倒してきたんだ。今までも・・・、そしてこれからも・・・。

「僕は・・・みんなを守りたい！自分の持てる力で！この世界を！」

すると、突然胸のポケットが光輝きだした。光に触れた傷が癒えている。なんなんだ？でも、僕はこの光を知ってる・・・。

「！光、俺が渡したカードは今どこにある？」

「それは、いつも肌身離さず持って・・・あっ！」

胸ポケットで光ってるのってまさか・・・。ポケットから出てきたのはソ口さんから貰った僕が描かれているカードで、今は眩い光を出している。

「やっぱ本物は違うな。光、今そのカードはお前を必要としている。」

「え？」

「そのカードで変身してみる。」

僕にできるのかな？でも僕はみんなを守りたいんだ！

「僕に力を、光を！」

いつもやってきたあのポーズを、今ここでまたやる。そして「ティガ~~~~~！！！」

僕は光に包まれた。

突如、アリーナを光が照らす。その光は力強く、そして暖かかった。光が収まってくると、そこにはとある世界を守ってきた巨人の姿があった。

「テヤア！」

ISアリーナに『ウルトラマンティガ』が出現した瞬間であった。

「アレが・・・光なのか・・・。」

俺はモニターで起こったことが信じられなかった。だっていきなり光が変身してあんな姿に変わったんだぜ。普通ありえないだろ？

「あれはたしか前に来たやつが変身していたはずだ。」

「ですがあのとき着けていた服がありませんわ。」

たしかソロっていう人が変身してたはず。なんで光が？

「一夏！説明しなさいよ！あれは光なの！？」

「ああ、たぶんな。俺もわからん。」

だがこれだけは言える。アイツは敵じゃない。

「おおお織斑先生！古代君はどうしたんですか？」

「落ち着け、山田先生。それに古代はそこにいるじゃないか。」

あのソロとかいうやつから貰ったカードで『ティガ』に変身したかな。

「そこって・・・、ええええっ！あ、あのソロさんの隣にいる人がですか！？」

「ああそうだ。さっきの動作からして間違いない。」

なるほどな。さすがは『ティガ』だったことがある。構えが自然だ。

「そうなんですか。・・・古代君、大丈夫かなあ。」
「何心配するな。古代なら大丈夫だろう。」
見せてもらうぞ。『ティガ』の強さを。」

「そんじゃ、俺も変身だ。」

そういつてソロさんは、ゼロイドライダーをだして腰に装着する。

『カメンライド！ゼロイド！』

ソロさんは仮面ライダーゼロイドに変身する。

「よし光！いくぜ！」

「はい！」

ゼロイドは紅いISに、僕はゴブニユ擬きに戦いを挑む。

「今度はガンダムではないのか。面白い！」

ゴブニユ擬きは薙刀『炎山』で斬りかかってくる。でも今は僕はウルトラマンだ！

「ハアツ！！」

すれすれで『炎山』を避けると、高速で相手にパンチする。『電

撃パンチ』だ。

「な、何っ!?!」

誰だつて驚くよ。一撃で相手の装甲を壊したんだから。

「まだまだっ！」

それから『電撃パンチ』のラッシュが続く。ゴブニユ擬きは火花を散らしながらもまだ立っていた。やっぱり強い。並みの攻撃じゃ倒せない。よく見ると、紅いISはゼロイドに押されていて、ゴブニユ擬きのところまで来た。今だ！

「ソロさん！」

「いくぜ光！」

当たれえ！僕たちの必殺技！

実にまずい。こつも押されるとは。あの仮面ライダーとかいう乱入者のせいで古代光も別の何かに変身してしまった。こちらの方が間が悪い。

『ギンガナム様。お逃げください。状況は悪くなる一方です。』

『そうか、残念だ。では隙を見つけ次第脱出するから、フロントルも来い。』

『わかりました。』

そういつて回線を切る。しかし、逃げられるかどうか。

『フロントルいけ。ここは我に任せろ。』

『だが、それでは『フロントルのおかげでもう1度生を貰ったのだ。これくらいやらせる。』・・・武者頑駄無。』

すまない武者頑駄無！ここは引かせてもらっぞ。

僕は両腕を前で交差させて左右に開いていく。すると手先から光の筋が伸びて腕と一体になる。僕がいつもやってきた必殺技だ。ソロさんもいつでも出せる体勢で待っている。

「『いけえ！ゼペリオン光線（デイメンションシユート）！！』」

し字に組んだ右腕から圧縮した光の奔流が飛び出す。ソロさんもゼロイドのライドブツカーをガンモードにして必殺技のデイメンションシユートを発射する。

ゼペリオン光線とデイメンションシユートは途中で混ざりあって、更に大きな光の奔流になった。

「『炎山』！プロミネンスストライク！』」

そのまま相手に当たると思ってたら、ゴブニュ擬きが薙刀を回転させてそれにより生じた竜巻を光線にぶつけてきた。その間に紅いISはさつきエーカー先生と戦っていた緑のISと共に離脱しようとしてる。

「くつ。・・・フロントル。私の代わりに一矢報いてくれ・・・。」

「

薙刀が破壊されて直撃し、倒れるゴブニユ擬き。そしてゴブニユ擬きはシュヴァルツェア・レーゲンの待機形態のレッグバンドになった。すると、カラータイマーが点滅し始めた。傷が癒えても、体力はすぐには回復しない。

「はあはあ。逃げられる前に早く追わなドカアアン!!」
突如、アリーナのシールドバリアーが破壊されて穴が開く。そこにいたのは黒いユニコーンだった。どうしてユニコーンがそこにいるんだ?

「失敗したか。少しはできると思ったのがな。」

黒いユニコーンはそう喋った。・・・なんなんだ? 何故か懐かしい感じがする。

「なっ! お前はティガ! なぜここにいる!!」

えっ? ティガを知っている!? 僕の知っている人なのか?

「・・・まあどうでもいい。フロンタル、ギンガナム。帰るぞ。」

そういつと黒いユニコーンは煙幕を出して、煙の中に隠れる。煙が晴れたときには、すでにそこにはいなかった。3分経ったのか、変身が解除されて疲れが襲ってきた。

「・・・おっ。時間だな。そんじゃな!」

灰色のオーロラが現れてソロさんを包み、本来の世界に帰っていた。

「はあ・・・はあ・・・。勝った、の・・・か・・・?」

視界が暗くなって、僕を意識を失った。

第三十四話 登場超古代戦士！！その名は『ティガ』！！（後書き）

とうとう光がチート能力を手に入れました。

サ：まさかウルトラなんたらになるとはな。

フ：そこはしっかり言うところではないのか？

？：少し、私の計画に支障をきたすな。

今回はこれで。次回もお楽しみに。

サ&フ&？：感想を待ってるぜ（いる）。

第三十五話 トーナメント後の出来事（前書き）

光：とうとうティガになれた！！

G：マスターがウルトラマンになれたのなら、他の人もなれるの
ですか？

一：それは俺も聞きたい。（興味津々）

まだ未定です・・・。

G：早く始めようではないか。

そうだね。では第三十五話スタート。

第三十五話 トーナメント後の出来事

強さとは なんなのか。

『うーん。たぶん心の強さが強さと比例していると、僕は思うな。』
『・・・そう、なのか？』

『誰かを助けたい、守りたいっていう気持ちで自分を強くすると思うんだ。少なくとも、前の自分はそうだったよ。』
『・・・なるほどな。』

『君にも見つかるよ。誰のために強くなって守れるのか、その理由がね。』

『・・・だが、私は闇の中で生きてきた。そんな私になにができる。僕だつてもとは闇の世界で生きてきたよ。だけど周りのみんなが僕を救ってくれた。だからこうして、ここに僕がいる。』
『・・・私にも、できるだろうか。』

『もしその理由が見つからなかったら僕も手伝うよ。だから一緒に探していこうねボーデヴィツヒさん。』

そう言われて、私は ああ、そうか。これが・・・そうなのか。
ときめいて、しまったのだ。

古代、光。

どうやら私は、こいつに惚れてしまったようだ。

『いつまで寝ているつもりだ。』

突如、僕は誰かにそう呼ばれた。誰だろう。

『挨拶が遅れたな。俺は溝呂木だ。ノアに頼まれて来た。』
やっぱりノアさんか・・・。なんのようですか？

『よく頑張ってるそうだからプレゼントを用意したって言うていた。ったくそれだけのために俺を使うなよ。』

溝呂木さん。ノアさんにありがとございましたと、伝えてください。

『わかった。さてと、もう俺はもう行くからな。頑張れよ。』
そう言って溝呂木さんは帰っていった。さてと、僕もそろそろ起きようかな。

「う、あ……。」

ぼやっとした光が天井から降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました。

「気がついたか。」

その声は、ラウラが教官と敬愛する織斑千冬のもだった。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理をするな。」

千冬はそれとなくはぐらかしたつもりだったが、さすがは元教え子。簡単に誘導されてはくれなかった。

「何が……起きたのですか……？」

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだかな。」
千冬はここだけの話であることを沈黙で伝えると、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「VTシステムは知っているな？」

「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあは……。」

「そう、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている、古代なら解析したいだろうシステムだ。それに似たシステムがお前のISに積まれていた。」

「……？」

無理もない。VTシステムによく似たシステムなど存在しないは

ずで、況してやそれが自分のISに積まれていたのだから。・・・もつとも、光は本気でVTシステムを解析したいだろうが・・・。

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志・・・いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。」

後にドイツに問い合わせたところ、何者かに襲撃されてそのシステムを無理やり組み込まされて、脅迫までされたことがわかることになる。

「私が・・・望んだからですね。」

織斑千冬を模倣した姿でなくても、力を望んだことに変わりはない。言葉には出さなかったが、千冬には伝わった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

突然名前で呼ばれ、ラウラは驚きも合わせて顔を上げる。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……。私、。。。は。。。。」

その言葉の続きが出てこない。自分がラウラであると、今の状態ではどうしても言えなかった。

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。それに古代がいるから、そいつを手本に頑張れよ、小娘。」

なぜ光を手本にしるなどと言ったのかはわからないが、今のラウラには効果てきめんだ。

「あ・・・き、教官。」

「ん？なんだ？」

「その・・・私は誰かのために強くなれるのでしょうか？」
今一番聞きたかったことを、千冬に聞く。

「・・・それは、古代に聞いてみる。あいつならいい答えが期待できる。」

そう言って、千冬は部屋を去っていった。なんとも他人任せであ

る。だが今のラウラにとっては、それがたまらなく嬉しいのであった。

うーん。よく寝た。あの戦いのあと、3時間ぐらい寝ていたみたい。しかも確認してみたんだけど、どうやら『変身』できるようになったみたい。このことをノアさんに聞くと、『できるだけ人前で変身するなよ。』って言っていた。その事は、充分に心掛けています。

それからテレビでは、トーナメントの中止、だけど個人データ指標と関係するみたいで全ての1回戦はやるみたい。

今僕がいるのは食堂で、さっきまで教師陣に事情聴取されていたほとんどのことが『ティガ』のことだった。しまった！アリーナってカメラが回ってたっけ。変身してるところを見られちゃった。まあ、織斑先生がうまくまとめてくれたから大丈夫なんだけどね。

だけどあのあと、一夏たちに『ティガ』のことをさんざん聞かれた。もういや！

「そうだったんだ。そのとき来たソロさんに貰ったカードで変身したんだ。」

「そういうこと。」

「てか光！肩の傷はどうした？」

「『ティガ』になったら、治癒能力で治っちゃった。」

これは本当。ガゾート戦で使ったよ。あのときは左手を添えたけど。って、さっきまで僕たちの食事が終わるのを今か今かと心待ちにしていた女子一同がひどく落胆している。シンジヨウ隊員顔負けの沈みかたです。．．．もう堕ちてないよねあの人。

「．．．交際．．．チャンス．．．消え．．．。」

「交際．．．無効．．．。」

「．．．うわああああんっ！」

バタバタバターっと数十名が泣きながら走り去っていった。．．．

何かあった？

「どうしたんだらうね？」

「「さあ・・・？」」

おお、一夏とシャルルの返事が重なった。このところ偶然が続きすぎ！

「・・・・・・・・。」

「ホウキ、ゲンキダセ。ゲンキダセ。」

女子が去ったあとに、八口を抱えた箒の姿があった。1人呆然と立ちつくしている。そこに一夏が近づいていった。

「そういえば箒。先月の約束だが付き合ってもいいぞ。」

「。。。。なに？」

何ですと！もうそんな仲なのか？・・・これは時間の問題だな。

「だから、付き合ってもいいって・・・おわっ!？」

箒はいきなり身長差のある一夏を締め上げる。その拍子に八口を落としてしまった。

「デジャブ。デジャブ。」

そんなこともあったなあ。確か僕が投げたんだっけ。

「ほ、ほ、本当、か？本当に、本当に、本当なのだな!？」

真剣だな、箒ったら。もうそんな仲なんで・・・、いや一夏は鈍感2号（ちなみに1号は僕）だからねえ。

「な、なぜだ？り、理由を聞こうではないか・・・。」

なんでだらう。聞いちゃいけない気がする。

「そりゃ幼なじみの頼みだからな。付き合っさ。」

「そ、そうか!」

「買い物くらい。」

「・・・・・・・・。」

はい。聞いちゃいけない発言聞いちゃいました。僕は知りません。

「・・・・・・・・だらうと・・・・・・・・。」

「お、おっ?」

箒はガシツと八口を掴む。何をやる気!?

「そんなことだろうと思っただわ!」

八口を掴んでいた方の腕で一夏に腰の捻りを加えた正拳を当てる箒。・・・八口の装甲が壊れる!!

「ふん!」

更に爪先で一夏の鳩尾をさす。・・・絶対箒の下着を見たな。変なことを考える前に・・・。

「電撃パンチ!!」

一夏の腹に渾身のパンチを叩き込む。すると一夏は顔を真つ青にして気を失った。・・・力の加減を間違えたかな?箒が看病するかに思えたが、ご立腹のようで帰っていった。・・・どうしよう。

「あ、古代君にデュノア君。って織斑君!?大丈夫ですか!」

山田先生登場。一応頼んでおこうかな。泡を吹き始めてるから本当に心配してきた。

「あの、山田先生。保健の先生に頼んでつれていってもらいましょう。」

「で、でも・・・私は一応先生ですし。でも古代君の言うことも正論だし・・・。」

一刻の猶予がないと感じたから、山田先生の手を取って顔の近くで話す。

「山田先生!保健の先生に連絡を!早急をお願いします!」

「え／＼。そんな／＼。って、は、はいっ!直ぐに連絡します。」

最初はおろおろしてたけど、今はすっかりとした先生に見える。

「ところで山田先生。何のようですか?」

連絡し終わったのを見て、山田先生に質問する。

「そうでした!お2人に朗報です!」

・・・あえて言うけど。山田先生って狙っているのかな?その・・・お、大きな2つの膨らみが、強調されて・・・。もういや!

「電撃パンチ!!」

さっきの数倍の威力の電撃パンチを僕の顔に叩き込む。ふう。少しふらふらするけど、迷いは消えた。

「こ、ここ古代君!?何か辛いことでもあったの!?!」

「光!?いきなり自分を殴るなんて!大丈夫!?!」

「だ、大丈夫だから。き、気にしないでください。」

2人を説得させるのに、十分掛かったよ。

山田先生が朗報と言った意味は、今日から大浴場を使えるということ。正直嬉しい。

・・・ちよつと待つて。さっき一夏は撃沈してお風呂に入れない。つまりシャルルと2人だけで入るってこと!?!

「え、えーと・・・。」

「どうしたんですか?ほらほら、2人ともはやく着替えを取りに行ってください。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣場で待っていますね。じゃあ。」

そういつてすたすたと歩いて行ってしまふ。どうしよう・・・。

第三十五話 トーナメント後の出来事（後書き）

また突然ですが、今回をもってアンケートの受付を終了したいと思います。

光：今までアンケートに答えてくれた作者の方々。

作&光：ありがとうございます。

G：これからも頑張っていくので。

A：ヨロシクお願いします。

それでは次回もお楽しみに。

光&G&A：感想待ってます（ツテマス）。

第三十六話 いざ、大浴場へ！！（前書き）

更新が遅れました。

A：サツキマデ『げーむ』ヲシテイタカラデスカ？

光：更新もしないで、ゲームをしてたんだ。

光の殺気が恐い・・・。

G：ところで何のゲームをしていたんですか？

『ガンダムアサルトサヴァイブ』だよ！！

グ&サ&フ：違うのをやれ〜！！（渾身のパンチが作者に炸裂）

ギャ〜！！！！

e：なるほど。スサノオにアルケー、シナンジュが出ていないからか。

ダ：はああ。作者に代わって言うぞ。三十六話スタート。

第三十六話 いざ、大浴場へ！！

「あ、来ましたね。それじゃあどうぞ！一番風呂ですよ！」

「ど、どうも……。」

来ちゃった。やっぱりお風呂の誘惑には勝てなかったよ。そして、幾分テンション高め山田先生に見送られて、脱衣場のドアが閉まる。うーん。どうしよう。

「光が先に入っているよ。」

「え、いいの？」

「うん。今日は頑張ったからね。」

「でも……。」

「光はお風呂が好きでしょ。だから、お先にどうぞ。」

嬉しいよ、シャルル。僕はシャルルの手を取って、その嬉しさを伝えた。

「ありがとうシャルル！この恩は忘れないよ！」

「ど、どうも！？とにかくっ、光はお風呂にどうぞ！」

「うん！」

僕はシャルルの視界に入らないところで着替えて、大浴場に入る。「おおー。」

あまりの広さに、ダイゴ隊員と同化してたときより驚いちゃった。……これが檜風呂っていうんだ。一夏から聞いていたけど気持ち良さそうだな。

「とにかく先に体を流そう。お風呂に入るのはそれからだ。」

大浴場のマナーに、『大浴場に入る前は体を流してから入ってください。』ってあるからね。

全身を洗い流して、僕は湯船大に身を沈める。

「はあああ~~~~」

さすがはお風呂だ。シャワーと違って全身が温まるこの感覚がいんだよね。生き返る~~~~。

カラカラカラ……。

ん？誰だろう？一夏かな？いや電撃パンチが当たって、こんな短時間で覚醒することなんてまず……いや、そういえばいたな。ガゾートとか。あのときはびっくりした。

「お、お邪魔します……」

「!？」

湯気の向こうに薄手のスポーツタオルを体に当てているシャルルの姿があった。スポーツタオルだから、肌の色がうつすらと透けて見えていて、逆光のせいでボディラインが……もういや!!

「電撃パンチ!!!」

本日15回目の電撃パンチを僕の顔に叩き込む。ふらふらするけど、迷いは消えた。

「光、本当にどうしたの？」

「……み、見えてるよ……」

「……あ、あんまり見ないで。光のえっち……」

「……ごめん……」

でもなんでシャルルがここにいるんだろう？

「そ、その、話があるんだ。大事なことだから、光に聞いて欲しい……」

「そ、そうなんだ。」

なるほどね。だから入ってきたんだ。

「その……前に言っていたこと、なんだけど。」

「たしか学園に残る話だよね。」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにしようと思う。僕はここだって思える居場所を見つけられていないし、それに……」

そうシャルルは言って沈黙する。言おうか迷っているのかな。僕がそう思っていたのは、ぴとっ……と、僕の背中にシャルルの手が触れてくるまでだった。そしてそのまま、手は僕を後ろから抱きしめる。

「しゃ、シャルル!？」

「光が、ここにいてって言うてくれたから。そんな光がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ。」

「そうだったんだ。」

僕は、ただみんなの幸せを守るために戦ってきた。ただそれだけのために今までも、そしてこれから戦い続けていくと思う。それでみんなの幸せを守ることができたら。」

「それに、ね。もう1つ決めたんだ。」

「もう1つ・・・？」

「そう。僕のあり方。光が教えてくれたんだよ？」

「そうだった？」

いつも戦いに専念してたから、そこまで覚えていなかったよ。

「そうだよ。ふふっ、光って自分に関することはどこまでも鈍感だね。憎たらしいくらい。」

「・・・なんか、ごめん・・・。」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕のことはこれからシャルロットって呼んでくれる？2人きりのときだけでいいから。」

「それが本当の名前なんだね。」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前。」

「わかった　シャルロット。」

「ん。」

シャルロットは嬉しそうに頷いた。この顔を見るたびに、僕はやっていることがいいことだと思えてくるよ。そのとき、僕はそう思った。

余談だが、冷静になった光はシャルロットが密着していたため、のぼせてしまい3時間ほどふらふらしたようである。

第三十六話 いざ、大浴場へ！！（後書き）

な、何とか生きてた……。

光：すごいことになってるね。作者といい、シャルロットといい。

シャ：そ、そんなことないよ……。

いや、普通ありえないでしょ。密室に男子と女子が……。

光：もうそこまですて。

はいはい。で今回の光の部屋は、ゲストにシャルロット・デュノアさんが来てます。

シャ：どうも。

光：シャルロット。単刀直入に言うけどね、どうだった？『ストライク・リヴァイブ』の性能は。

シャ：ばっちり。機体が僕の反応についてきてくれて、戦いやすかったなあ。

光：それ良かった。改造した甲斐があったよ。

シャ：しいて言うなら、このPS装甲っていうのを改良してもらいたいな。

光：ああ、フェイズシフト装甲ね。そうだな……。じゃあ、あ

とでVPS装甲と変えておくね。

シャ：光、ありがと。

今回はここまで。次回もお楽しみに。

光&シャ：感想待ってます。

第三十七話 新たな展開 そして更なる転校生（前書き）

今回は、新たなキャラが出てきます。

A：楽シミデス。

G：モバイルスーツは出ますか？

光：転校生って誰なの？

一&篤&セ&鈴&シャ：気になる！！

まあまあ落ち着いて。全ては話の後ね。

A：三十七話、すたーとデス。

だから！！それは僕の台詞！！

第三十七話 新たな展開 そして更なる転校生

翌日。僕の部屋の片隅に箱が2つ置いてあった。

「なんだろうっねこれ。」

「多分・・・僕の知り合いからのプレゼントだと思っよ?」

「そうでしょうね?」

「なんで疑問形なの?」

だってこの箱がノアさんからのプレゼントだっていう証拠が・・・ん?なんだろうっこのカードは?

『光へ』

何かと頑張っているようなので、これは私から君にプレゼントだ。まあ、誕生日プレゼントだと思ってくれ。そしてこれからも頼む。

ウル

トラマンノアより『』

やっぱりノアさんでしたか。こんなことできるのはそうそういいよね。

「とりあえず、開けてみようよ。」

「そうだね。」

僕は大きい方の箱を開ける。すると中には犬みたいなロボットが寝て(??)いた。ちよつと可愛いな。

「か、可愛い・・・。」

シャルロットもそう思うよね。なんて名前だろう?」

「これはたしか、『バクウハウンド』ですよ。」

ああ、たしか『機動戦士ガンダムSeed Destiny』の動物型MSだったね。でも呼吸してるし、なんだか生きてるみたい。

「~~~~。」

あ、起きた。バクウは目を覚ますとこっちを見て、「ワンッ!」と吠えた。可愛い・・・。

「ねえ光。名前を付けてあげようよ。」

「そうだね。それじゃあ、シャルロットが付けてあげて。僕じゃネーミングセンスが悪すぎって言われたから。」

この前、一夏のイグニツシヨン・ブーストを『エクシード・ダツシユ』って名付けようとしたら全力で拒否されたんだ。・・・結構悲しかったよ。

「わかった。バクウだから・・・、クウはどうかかな？」

「クウか。いいね。それじゃ、これから君の名前はクウだよ。」
するとクウは喜んで擦り寄ってきた。可愛くて倒れそう・・・。

「もう片方の箱も開けてみようよ。」

「そうだね。クウ、ちよつと待ってて。」

躑がなっているのか、お座りして待つ。あとで何かあげよう。そう思いながら、中くらいの箱を開ける。すると中には卵があった。

「何の卵だろう？」

「うーん・・・。」

2人に聞いてもわからなかった。でもこの形、どこかで・・・。
つてもうこの時間！？急がないと。

「シャルロット、早くいかないと遅刻する！！」

「本当だ。光、先にいつてて。少し遅れるけど大丈夫。」

「わかった。じゃあ、また教室で。」

そう言って部屋をあとにした僕だった。

「きゅ〜」。

なんだこの小動物は。私が起きたとき、この小動物はすでに机の上において鳴いていた。見たこともない動物だ。その前に、なぜここに動物がいるんだ。昨夜はしっかりと鍵をかけて寝たはずだが・・・。

「きゅきゅ〜」。

しかしこの小動物は可愛いな。飼いたいくら・・・、いかにかん。そうではない。どこの誰のペットか調べないと。

「きゅ〜」。

ん？元気がないな。どうしたというのだ。・・・古代に聞いてみたら、何かアドバイスをくれるかもしれない。

私はその小動物を抱えて、部屋をあとにした。

「ワンワンッ。」

「ヤダ何この子。可愛い〜〜〜！」

「黒色の仔犬だ〜〜。」

「なあ光。この仔犬、お前になついているようだが、何でだ？」

さて、何故このような状況になったのだろう。理由は簡単。クウがついてきたからだ。僕とシャルロットを飼い主と見たらしく、離れようとしなない。まあ、そのところが可愛いんだけどね。

「み、みなさん、おはようございます・・・。」

「諸君、おはよう。」

教室に入ってきた山田先生と織斑先生だった。そこまではいい。

問題は織斑先生が持っている動物なんだけど。

「モラちゃん！？どうしてここに？」

「〜〜〜モラちゃん？」「〜」「〜」

ああ、みんな知らないよね。この子は『キングモーラット』のモラちゃん。僕がセルチェンジビームで縮小した変異怪獣だよ。

「古代。さつきから元気がないのだが、どうしたというのだ。」

「ちよつと貸してみてください。」

僕は織斑先生からモラちゃんを抱き抱える。

「きゅ〜。」

え〜つと・・・、もしかしてお腹が空いているのかな？だったら

「お腹が空いていたようなので、ご飯をあげてもいいですか？」

「わかった。SHRまでに終わらせるよ。」

僕は靴から粉ミルクとお湯（みんな僕がしたことに驚いていた）を出して、ミルクを作る。

シヤカシヤカシヤカシヤカ・・・。

出来たミルクをモラちゃんに近づけると、ミルクを飲み始めた。

ああ、みんなこの仕草が可愛いと思うんだよね。

「「「いいなあ、モラちゃん。」」」

そっち！？てつきりミルクをあげれる僕がうらやましいと思うんだけど。

「終わりました。はいどうぞ。」

「きゅ〜〜〜！」

元気になったモラちゃんを織斑先生に渡して、SHRが始まる。

「今日は、ですね・・・みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと・・・」

あれ？シャルロットの姿が見えないな・・・もしかして・・・。

「じゃあ、入ってください。」

「失礼します。」

2人もいるの！？しかもその1人は・・・。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願います。」

予感的中！！みんなぼかんとしてるよ。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということですが。」

はああ・・・また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります・・・。

僕がするのも変ですが、山田先生すみません。気を取り直してと、それからもう1人は・・・。

「俺は御之方慶一だ。よろしくな。」

なんかすごい元気な人が来ました。

「おお。お前が光か。慶一って呼んでくれ。1年間仲良くしような。」

「ど、どうも・・・。」

まあ、元気はいいことだね・・・あれ？どうして僕の名前を

知ってるんだ？

「え？デユノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね。」

「あれ？そういえば光って、シャルルと同室じゃなかったか？」

「ちよつと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

「・・・非常に不味いことが起こりそう・・・（滝汗）。

バシーン！教室のドアが蹴破られたかのような勢いで開く。

「ひい〜かあ〜るう〜!!!」

「こら鳳！まだSHRは終わっていないぞ！」

鈴とエーカー先生がその後ろにいた。何この殺気は！！

「死ぬ!!!!!!」

ISアーマーが展開されて、僕に衝撃砲がフルパワーで開放される。僕は無意識にウルトラシールドを展開しようとしたけど、シールドは展開できないみたい。・・・ああ。短い転生人生だったな。ズドドドドオンツ！

・・・あれ？僕生きてる。誰が助けてくれたんだろう？

間一髪で僕と鈴の間に割って入ってきたのはボーデヴィツヒさんだった。ボーデヴィツヒさんの『シユヴァルツエア・レーゲン』は予備パーツで組み直したんだろう。

「ありがとう。ボーデヴィツヒさ・・・はっ！」

何か不穏な気配を察して、バックステップをしようとした。

「させるか！」

だけどボーデヴィツヒさんにAICを展開されて慣性が停止する。つまり空中で浮いている状態。

「ちよつと、何する・・・むぐっ!？」

いきなりだった。まさかボーデヴィツヒさんに・・・唇を奪われた。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「・・・嫁？婿じゃなくてか？」

慶一さん。突っ込むところはそこじゃないでしょ。・・・もう何を言っても聞いてくれそうもない・・・。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いたからだ。」

「誰だよ。そんなデタラメを言ったやつは。笑えねえよ。」
良かった。慶一さんが僕の言いたいことを代弁してくれた。

「あ、あつ、あ・・・！」
・・・危険な予感しかない。シーリザーとか、リトマルスとか・・・。

「アンタねえええつ！！！！」

ジャキン！再び衝撃砲が開く。よし・・・、逃げるよ！！

「クウ！鈴は頼んだ！」

「ワンツ！！・・・ガウツ！」

鈴に飛び掛かって足止めするクウ。今のうちに教室の後ろ側出口から脱出だ！

ビシュンツ！

うわっ！？危なかった。もう少しでレーザーに当たるところだった。

「誰？レーザーを撃つたの・・・って、セシリア！？」

「ああら、光さん？どこかにお出かけですか？私、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。」

笑ってるけど、血管が・・・たくさんある。セシリア大激怒バージョンだ！即この場所から逃げないと・・・。
ゴツツ。

ん？この固い物体はなんだろう？そう思って後ろを向いた僕は見てはいけないものを見てしまった。

「にこっ。」

「ワンツ！」

天使の笑顔なのに禍々しいオーラを纏っている、『ストライク・

リヴァイブ』のランチャー・ストライカーを展開したシャルロットに、何故かご機嫌のクウがいた。よく見ると、クウはチヨコクッキーを食べていた。・・・シャルロット、物でクウを釣ったんだね。

「光って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしたな。」

・・・ああ、僕は生き残れるのかな？もし死んじゃったら火葬してね、一夏。

その日のHRでISを装着しないで空を飛ぶ光の姿と、「たーまやー。」と呟く慶一の姿があったそうだ。

第三十七話 新たな展開 そして更なる転校生（後書き）

慶：俺、IS学園に転校！！

光：それ、某ライダーネタ！！

G：慶一さんが転校ですか・・・。

A：答工八聞イテナイ！！

光：皆が毒されてる・・・。

ダ：まあ、今回はここまでだな。

e：感想を待っている。

また取られた！！

第三十八話 八口量産！？（前書き）

ハロ：ドウイウコト？ドウイウコト？

光：僕が一夏たちに専用の八口を作ったんだよ。

今回はその八口を皆に渡すところから始まります。

G & A：ではどつぞ。

第三十八話 八口量産!?

「ううーん。．．．もう朝か。」

時刻は早朝6時。昨日は早く寝たから、いつもより起きる時間が早い。でもまだ眠い。もう少し寝てようかな。

ふに。

ん？僕ってベットにこんな柔らかいものを入れたっけ。．．．まさかね。

僕はそう思っただけ。そこにはやっぱりラウラがいた。あ、なんでラウラって呼んでいるかというよね。HRで飛ばされたとき助けてくれたのがラウラで、そのとき助けてくれた代わりにラウラって呼ぶことにしたんだ。で、なんでやっぱりかと言うと、あのHRの後からちよくちよくこういうことをするようになって、この前なんか入浴中に入ってきたんだから。はああ。

「ん．．．。なんだ．．．？朝か．．．？」

ラウラ起床。予想してたけど、やっぱりラウラは全裸だった。身につけているのは左目の眼帯と待機形態のISである右太ももの黒いレッグバンドのみ。女の子なんだから隠すところは隠そうよ。

「なんで何も着てないの？せめて下着ぐらいはつけてよ。」

「おかしなことを言う。夫婦とは包み隠さぬものだぞ。いやいやいや。僕たちは夫婦じゃないし。なんで僕が1人部屋なっただろう。．．．あ、これが1人になる恐怖か。一夏には悪いことをしたな。」

「しかし、朝食までにはまだ時間があるな。」

「うーん。あ、そうだ。ラウラに渡すものがあつたんだ。」

そうそう。本当ならみんなが揃ったときに渡したかったけど、渡しちゃえ。そう思いながら、ラウラに色がグレーのアレを手渡す。

「なんだこれは？」

「八口だよ。ラウラ専用の。」

「ヨロシクラウラ。ヨロシクラウラ。」

ちなみに一夏には白の、箒には赤の、セシリアには蒼の、鈴にはマゼンタの、シャルロットにはオレンジの八口を渡すつもり。

「これが八口か。可愛いな。大事にするぞ。何せ嫁から貰ったものだからな。」

「あ。そろそろ時間だから食堂にいこうか。」

みんなにも八口を渡したいからね。

「はい一夏、箒。前に頼まれていた八口だよ。」

「ヨロシクバナージ。」

「おう、よろしくな。って俺はバナージじゃなくて織斑一夏だ。」

「ヨロシクホウキ。」

「うむ。よろしくな。」

場所は変わって、1年寮の食堂。

僕は一夏と箒にそれぞれ専用の八口を渡す。なんかメタ発言が聞こえたような……。まあいつか。

みんなのメニューは、一夏が納豆と焼き魚定食で箒が煮魚とほうれん草のおひたし、ラウラがパンとコーンスープ、そしてチキンサラダ。僕？いつも通り納豆定食ご飯大盛りだよ。

「ヒカル。ボクモボクモ。」

「八口は食べれないでしょ。我慢して。」

「ブーブー。」

僕の緑八口は、一夏と箒の八口と食堂の片隅まで行って遊んでいる。そういえばなんでクウは食べれるんだろう？

「わああっ！ち、遅刻っ……遅刻するっ……！」

「クウウン……。」

これは珍しい。いつも早めに起きるはずのシャルロットがクウと一緒に食堂に駆け込んできた。僕たちより遅いなんて……。

「シャルロット、おはよう。」

「あつ、光。お、おはよう。」

近くにあった朝食をとって、僕たちの席までくる。僕はクウに煎餅をあげる。するとクウはものすごい勢いで食べ始めた。よっぽどお腹が空いてたんだね。

「あ、そうだ。シャルロット、今忙しそうだけど、はいこれ。シャルロット専用のハ口だよ。」

「あ、ありがとう光。」

「ハジメマシテ。ボクハ口。」

今さらだけど、僕の造ったハ口には性格があって、一夏のは真面目、箒のは寂しがり、セシリアのは甘えん坊、鈴のはトリニティのを参考、シャルロットのはおっとり、ラウラのはおせっかいだよ。

「どうしたのシャルロット？寝坊？」

「う、うん、まあ、ね……。その……。二度寝しちゃったから。」

シャルロットが二度寝？うーん、世の中には不思議なこともあるんだね。

キーンコーンカーンコーン。

ああっ！予鈴だ！でもまあ、食べ終わっていたからもつたいなくはないんだけどね。って一夏！なにばーっとしてるの？はやくしないと置いてくよ！

「クウいくよー！」

「ワンツ。」

シャルロットはここでクウと別れる。あと5分しかない！しようがない。『G4』！

「わかりました。ダブルオーライザーの動力部分のみ展開。」

僕の肩にGNドライブが展開されて高速で飛行。その際、一夏とシャルロットを抱えて一気に教室まで飛ぶ。

「ま、間に合った？」

「まあ、時間的にはな。だけど相手が悪かったな光。」

そう答えてくれたのは、今一夏と同じ部屋にいる新しい転校生の

慶一。相手って？

「御之方の言う通りだ。古代、学園内でのIS展開は禁止されているぞ。意味はわかるな？」

「すみませんでしたああ！！！」

僕はISを収納して土下座をする。変身したら今のと同じくらい速く移動できるけどね。

「古代とデユノア、織斑は放課後教室を掃除しておけ。2回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな。」

「……はい……。」

3人揃って意気消沈。はあ。八口で癒されたい……。

第三十八話 八口量産！？（後書き）

突然ですが、GN粒子の色は何色がいいですか？

一：本当に突然だな。

篤：なぜ聞くのだ？

ちよつとした参考に・・・。

セ：でしたら光さんの『ダブルオーライザー』の粒子の色がいいですわ。

鈴：私は癪に障るけど、襲撃してきた『アルケー』の粒子の色がどちらかというといいわね。

シャ：僕はオレンジかな。前に言ってたけど粒子の色は3つあって、その3つ目がオレンジなんだって。

皆様はどう思われますか？感想にどの色がいいか書いてくださるとうれしいです。

刹那：ガンダムだったら、オリジナルを選べ！！

ちよつと！！呼んでない人いるけど！？

第三十九話 新たな人物との出会い（前書き）

光：新たな人物って？

この物語で重要な人物だよ。慶一はあったことがあるけどね。

慶：・・・まさか、あいつか！！

まあ、続きは三十九話を見てからね。

第三十九話 新たな人物との出会い

前回言えなかったことを言うね。実はこのIS学園7月頭に郊外実習、即ち臨海学校があつて、3日間の間学園を離れるんだ。まあ臨海学校だから水着を買わないといけないから、また外に出ないといけないんだ。

放課後、夕暮れ色に染まる教室で僕とシャルロットは2人で掃除させられていた。え？一夏がいないって？ああ、一夏は今保健室で寝てるよ。あのあと、セシリアや鈴に八口を渡したんだけど、鈴の八口の性格ってトリニティの八口と同じでしょ。だから鈴と喧嘩しちゃって鈴が八口を投げたんだけど、運悪く一夏の鳩尾にクリーンヒット。一夏が気絶しちゃって簿が保健室までつれていったんだ。だから2人だけ。

「そ、そういうえば光？臨海学校で使う水着って買った？」

「ああ、買ってないよ。・・・そうだ。シャルロット、今日の日曜日に一緒に買いにいこうよ。」

「え、いいの!？」

シャルロットがいい笑顔でそう聞いてくる。そんなに嬉しいかな？

「うん、いいよ。シャルロットだって水着を持ってないでしょ。」

男装してたから男物しかないでしょ、きつと。

「ハロモイク。ハロモイク。」

「ツレテツテ、シャルロット。」

八口も行きたがってるね。外の景色を教えるいい機会だ。つれていこう。

「じゃあ、今日の日曜日ね。」

「うん。」

はやく買って準備しないと。

夕食を食べたあと、僕は学園の屋上にきた。何故か風に当たりたくなつたんだよね。

「ああ、気持ちいい。・・・ん？」

変だ。僕が来たときには誰もいなかったし、誰も屋上にいく人もいなかったはず。でも今は誰かの視線を感じる。

「そこにいるのは誰？」

僕はGUTSハイパーガンをその方向に向けたけど、そこには誰もいなかった。

あれ？おかしいな？僕はそう思ったけど、その考えは聞こえてきた声で一瞬で捨てた。

「流石だな。特殊ミラージュコロイドで機体を隠して、更に気配を殺していたんだが。」

すると下の方から何か粒子が離れて行って脚が出てくる。その脚はISのものであったが、先端にはクローがついていた。そう言っているうちに胸の部分まで現れる。色は紫でまるでMSみたいってMSじゃん！

「まさかミラージュフレームサイドイシュー！？」

「おっ、知ってたんだこの機体を。」

「まさか・・・亡国企業！？」

『G4』に聞いてみたんだけど、僕が戦ってきた相手にはアルケイガンダムやシナンジュ、ターンX、つまりMSが存在しているみたい。あの紅いISと緑のISだよ。

「その名前を言っちな！！」

突如目の前の彼（声から男性と判断）は声を荒げる。その殺気に僕はたじろいでしまった。冷や汗がでちゃった。

「俺はあの企業が嫌いなんだ！あんな奴等と一緒にするな！」

「ご、ごめんなさい。」

「あ・・・いや・・・。すまん。俺も熱くなっちゃった。」

凄いな彼は・・・あれ？僕と同じ声・・・？

「僕と声が似てる・・・。」

「ギクッ!!」

ん？声を出して驚くなんて何か変なこと言ったかな？まあいいや。

「いえ。なんでもありません。」

「そ、そうか。ならいい。」

「ところで、ここに何の用ですか？」

男性でISを使える人なのに、わざわざ危険を冒してまで来るには何か訳があるはずだ。

「そうだな……。これからお前を助けてやる。これを伝えにきた。」

はい？

「簡単に言えば、亡国企業から守ってやるんだよ。」

「な、何ですか？」

「お前は一応『世界で2人のISが使える男』だろ。亡国企業はそういう奴を狙っているからな。」

そうだったんだ。知らなかった。

「……これ以上ここにいと、ここの教師にバレそうだな。じゃ、俺は帰るぜ。」

そういうと、さっきとは逆に粒子を纏って消えてしまった。これが特殊ミラージュコロイドか……。凄いな。

「亡国企業か……。警戒しよう。」

僕はそう思いながら、屋上を後にした。

「あの卵……。僕の考えが正しかったら中身は……。」

あのあと部屋に戻った僕は卵のことを考えていたんだけど、ドアを叩く音で中断された。誰だろうと思っけて開けてみると、山田先生がいた。

「山田先生。こんな遅くにどうしましたか？」

「あ、あの、古代君。たしか古代君が八口を作ったんだよね。」

「？はい。そうですけど、何ですか？」

そう聞くと、山田先生は急にそわそわし始めた。・・・もしかして、ハ口が欲しいのかな？

「山田先生。ハ口のことでしたら、ちゃんと作りますよ。」

「ほ、本当に！？絶対！？約束してくれる！？」

山田先生はものすごい速さで僕の手を握ってきた。約束って、僕は1度言ったことは必ず実行しますよ

コトッ。

不意に、僕の部屋で何か音がした。すると山田先生は僕の背中に抱き付いてきた。もしかして、山田先生は恐いのが苦手なのかな。

「こ、古代君・・・。」

やっぱり。恐さの余り震えてる。まあ、僕には原因がわかっているけどね。

僕はそのままの体勢で部屋のなかに入ると先ず卵のほうを向いた。よく見るとその卵には亀裂が入っていた。もうそろそろかな？

「こ、古代君。この卵は？」

「まあ、待っていて下さい。もうすぐ生まれますよ。」

そして遂に卵が割れて中から1匹の生き物が出てきた。ゾイガーである。このゾイガーは僕がガタノゾーアと戦う前に倒したゾイガーを鳥の大きさにまで縮小していた。

「ギヤア。」

無論、ゾイガーは鳥類なのでそりこみがあるんだけど。どうやらこのゾイガーは僕と山田先生を親だと思っているようだね。

「ど、どうしよう。」

「それなら私の部屋で飼ってみるよ。私、1回だけでいいから生き物を飼ってみたかったんだ。」

いや、でもゾイガーですし・・・。まあ、ノアさんのことだ。大丈夫でしょう。

「じゃあ、お願いします。」

こうして、ゾイガーは山田先生が飼うことになったのでした。

第三十九話 新たな人物との出会い（後書き）

慶：ここであつたが運のつきだ！！大人しくやられる！！（ISを起動させる）

ダ：俺はここで死ねねえ！！（同じくISを起動させる）

暴れるなあ！！！！（レジエンドガンダムになってドラグーン一斉射）

慶&ダ：ギャアアア！！！！

光：・・・作者が一番チートみたいだ・・・。

G：気にしたら負けです。

A：次回ヲ才楽シミニシテイテクダサイ。

第四十話 臨海学校の準備 前編（前書き）

今回はすごいゲストが出てきます。

光：気になるな。

G：早く始めましょう。

それじゃあ、四十話スタート！！

第四十話 臨海学校の準備 前編

週末の日曜日。天気は晴天。飛行日和だ。

僕は今、シャルロットと一緒に街に買い物に来ている。いつもなら裏道のお店で買い物するため、全てが新しく見える。

今日のシャルロットの服装は半袖のホワイト・ブラウス。その下にはライトグレーのタンクトップを着ている。うん。シャルロットには似合う服装だ。

ちなみに僕の服装は、下が白地に赤色のラインが入っているズボンで上は黒地に黄色のラインが入っているTシャツだ。結構気に入っている服装だよ。

「ねえ光。」

突然シャルロットがそう聞いてきた。なんだろう？

「ん？どうしたの？」

「この前僕は、2人だけのときはシャルロットって呼んでってたよね。」

たしかそうだったね。それがどうしたんだろう？

「でもね。みんなに僕のことを言っちゃったから、みんながシャルロットって呼ぶようになったんだ。だから、これから2人だけのときは、僕のことをシャルって呼んで。」

なるほど。そういうことか。

「わかったよ。シャル。」

「うん！」

やっぱりシャルには笑顔が似合う。そしてみんなにも笑顔が似合う。うん。悪くない。

「光。は、離れないように、・・・て、手を繋いで行こうよ。」

「そうだね。そうしようか。」

僕はシャルの手を握って、歩き出したのだった。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

「……………なあ。俺達何してんだろうな。」

駅前へと向かって歩き出す光とシャルロットの姿を物陰から見つめる10の影があった。セシリアに鈴、一夏、箒、慶一、そしてそのハ口達であった。しかしハ口達は自由に動き回っている。

「なあ箒。あの2人に付いてきたんだけどさ。」

「一夏。言いたいことは私にもわかるが、言っな。」

「イチカ。ナニスルノ？」

「ホウキ〜」。コドコ〜」。

「何か和むな。このハ口には。」

どうやらこの3人と2つのハ口は、あの2人に付いてきたみたいだ。問題はその2人であるセシリアと鈴である。

「……………あのさあ。」

「……………なんですか？」

「……………あれ、手え握ってない？」

「……………握ってますわね。」

「セシリア〜」。ダツコ〜」。

「ミレバワカル。オマエラ、バカダナ。」

セシリアは自分のハ口を抱えながら、持っていたペットボトルを握りつぶして、鈴のハ口はそう悪態付く。このとき既に一夏、箒、慶一の姿はない。

「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。……………よし、殺そう。」

鈴はISアーマーを部分展開して準戦闘モードにする。何とも恐ろしい10代乙女の純情である。

「ほう、楽しそうだな。では私も交ぜるがいい。」

「マゼテ。マゼテ。」

「「!?!」」

いきなり背後からかけられた声に、驚いて振り返る2人。そこに立っていたのは、忘れもしない先月鈴とセシリアが敗北を喫した相手・・・ラウラとその専用のハ口だった。

「ナンダ、オマエカ。」

「ハ口ハ口。」

どうやらハ口同士は仲が良いみたいで、鈴のハ口もまんざらでもない様子で話しかけた。でもその所有者は考えが違ってみたいで・・・。

「なっ!?!あ、あんたいつの間に!」

「そう警戒するな。私は、お前たちに危害を加えるつもりはない。」

「し、信じられるものですか!再戦というのなら、受けて立ちますわよ!?!」

とまあ、こんな感じなのである。1度は戦った相手。そう簡単に信用できないのもわかる。だが、次に言ったラウラの言葉に鈴とセシリアは自分の耳を疑った。

「先月のことはすまなかつた。この通りだ。」

いきなり頭を下げて謝るラウラ。2人はその行為に戸惑ってしま

う。
「あのあと嫁に言われたのだ。悪いことをしたと思っているんだ
つたら、謝らないといけない。私はお前たちを攻撃して、大怪我
を負わせてしまった。許してくれるとは思っていないが、謝らせて
ほしい。」

ラウラは再度頭を下げる。その姿に嘘偽りはなく、心から思っ
ての行為だった。

「い、いいわよもう。終わったことだし。」

「そ、そうですね。光さんがそう言っていたのでしたら。」

ラウラが謝ってきたことと許さないとあとで光が怖くなるのをわ

かっていたので、2人はラウラのことを許すのであった。

「ラウラ。ヒカルガミエナクナルヨ。」

「何？そうか。では私は光を追うので、これで失礼する。」

そう言つて、ラウラは本当にすたすたと歩き始めたので、鈴とセシリアは止めにかかる。

「ちよつ、ちよつと待ちなさい！未知数の敵と戦うには先ずは情報収集が先決よ。」

「アタリマエダ。アタリマエダ。」

「ふむ、一理あるな。」

「ドウスル。ドウスル。」

「ここは追跡の後、2人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですわね。」

「なるほどな。では、そうしよう。」

かくして、2人の追跡者・・・いや、ストーカーに新たに1人加わったのだった。

「先ずは水着をかうんだよね。」

「そうだよ・・・あれ？」

「どうしたのシャル？」

急に立ち止まったシャルに声をかけてみた。

「ねえ見て光。人が集まってるよ。」

「本当だ。たぶん何処かの一座が来てるんだと思うよ。」

・・・そういえば、デバンは今でもお芝居をしてるのかな？

「行ってみようよ光。」

「そうだね。行ってみよう。」

僕たちはその人だかりの中に入っていった。

僕は啞然とした。

『黒ヤギさんから貰った手紙を白ヤギさんに届けるために、郵便屋さんは走る走る走る・・・転ける。』

そこでは一座がお芝居をしているんだけど、その郵便屋さんが問題なのだ。どう見てもデバンなのである。気になって一座名を見ると・・・、『ゆかいな仲間達』なのである。なんでここにいます！！

「あの着ぐるみの人、頑張ってるね。」

「う、うん・・・。」

あれ本物なだけだね・・・。

僕とシャルはお芝居が終わるまで見ていたのであった。

第四十話 臨海学校の準備 前編（後書き）

光：デバン……。

G：マスター……。

A：打ちヒシガレテマスネ。

ダ：エノメナが出てくるよりマシだろ。

e：人々が錯乱するのだな？エノメナという怪獣の怪電波で。

後編もよろしくお願いします。

第四十一話 臨海学校の準備 後編（前書き）

光：作者が後書きで何かを企画してるみたい。

一：重要なことなのか？

篤：私に聞くな。何も聞かされていないのだから。

セ：またアンケートではないでしょうね？

鈴：あの作者ならあり得そう・・・。

シャ：と、とりあえず楽しみにしておこう？

ラウラ（以後ラ）：ではスタートだ。

第四十一話 臨海学校の準備 後編

「はああ。何か疲れた。」

今僕は駅前のシヨツピングモール、その2階にいるんだけど、一座『ゆかいな仲間達』のお芝居が終わるまでシャルと見て、ここまで来たんだ。それにしても広いな。一夏が言っていたけど、交通網の中心らしくて電車に地下鉄、バス・タクシーと何でもござれみたい。まさに言葉通りだ。名前は『レゾナンス』だって。・・・恥ずかしいけど、僕は初めこのシヨツピングモールのことを間違えて『レグナント』って呼んでたんだ。ごめんなさい。

「じゃあ、ここからは別行動でもいい？僕は自分の水着を買ってくるから、シャルも買っていてよ。」

「え？あ、うん。わかった。」

ここで1度シャルと別れる。自分の買いたいものを早く買わないと。

そう思った僕は人混みの中を走って行こうとする。そんなことをすると、人とぶつかることは必然。よって・・・。
ドンッ。

「うわっ。す、すみません。」

「・・・大丈夫だ。問題ない。」

こう人に当たってしまった。僕は1度謝ってまた走り出す。

「ごめんごめん。良いものが見つからなくて。」

「シン。大事なのは贈り物自体じゃない。その物に込める想いだ。それを忘れるな。」

「ありがとうヒイロ。ためになるよ。」

へえ、さつき当たった人の友達は誰かに贈り物をしたいんだ。・・・

・そうだ、シャルに何か買ってこようかな。

僕はそう思いながら走り続けるのでした。

「ごめんごめん。待った？」

「う、ううん。全然待つてないよ。」

僕が水着を買って戻ってくるのに20分かかった。ちなみに僕の選んだ水着はトランクスタイルで色合いはティガのカラーリング。まさかこんな水着があつたなんて……。

しかしよく見るとシャルはまだ水着を買っていないようだ。どうしたんだろう？

「シャル、水着は？」

「えつとね、光に選んでほしいなあつて思つて。」

僕が選んだ水着で良いのかな。僕つてセンスないんだけど……。

「マスター。ここはシャルロットさんのために水着を選んであげてください。」

『え？どうして？』

『女性のために何かを選ぶことは男性のすることです。』
そういうものなんだ。知らなかったな。

「ダメかな？」

「ううん。全然いいよ。」

そう言つとシャルは顔をぱあつと輝かせたけど、良いことあつた？

『……やはり一夏以上の唐変木ですね……』

『ん？G4、何か言つた？』

『いいえ。何も。』

変なの。まあそれは置いておいて、早くシャルのために選んであげようつと。

「あれ？古代君にデュノアさん？」

「君たちも水着を買いに来たのだな。」

「お前たちだけか。」

シャルの水着を選んで買ったあと、店を出たらエーカー先生、織

斑先生、山田先生とばったり出会った。ちなみにシャルの水着はオレンジ色のビキニタイプだ。シャルは2つ選んで（もう片方は水色だった）、どっちかって言われたからこっちを選んだんだ。

「も、ということとは、先生方も水着を？」

「そういうところだ。」

エーカー先生たちも水着がないから買いに来たんだ。・・・はあ。

「そろそろ出てきた方がいいと思うよ。」

ギクツという音が聞こえた・・・はず。

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ。」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ。」

物陰から出てきたのは、セシリアと鈴の2人。・・・あれ？1人足りない。まあいいか。

えーつと・・・ここにいるのは僕とシャル、セシリア、鈴、織斑先生、山田先生、エーカー先生。・・・ミツシヨンスタート。

「そうだ。いままですっかり忘れてた。たしかもう少し買うものがあったんだ。山田先生、心配なのでついてきてください。みんなも来る？たしかセシリアは知ってると思うよ。」

ミツシヨンとは、織斑先生とエーカー先生を2人つきりにさせること。そのためには、僕たち部外者は退散というわけ。それに、いつかガロードたちにもみんなを教えたいと思ってたんだよね。丁度良い機会だ。

「では織斑先生、エーカー先生。僕たちは行ってきますので買い物を楽しんでください。」

そうして僕たちはガロードのジャンクショップに行くのだった。

「あ・・・、光君・・・だ。」

初めまして。簪です。DVDショップで目当ての物を購入して出てきたとき、道路をはさんだ向こう側に光君が見えた。・・・近くにデュノアさんにオルコットさん、鳳さん、山田先生がいたことに、

少しだけ不機嫌になったけど。

(それにしても光君の技術は凄いなあ・・・)

私のIS『打鉄式』を完成の1歩手前まで手伝ってくれた光君。何故1歩手前までなのか聞いてみたら・・・。

『だってこのISは自分の手で完成させたいんですよ。だったら仕上げは自分でやらないと。』

って言ってた。そのときは純粹に嬉しかった。

(・・・どうなんだろ。)

光君のことが好きかと聞かれたら好きかもしれない。でもその気持が本物という訳じゃない。どちらにせよ、次に光君に会ったら自分の気持ちをはっきりさせよう。

「・・・早く帰って・・・『ULTRAMAN』を見よう。」

この映画は絶対見てみたかったの。私って特撮ヒーロー物が好きだから。

私はラウラ・ボーデヴィツヒだ。先程まで嫁である光を追っていたのだが、途中で嫁に気づかれたため諦めた。一緒にいたセシリアと鈴は気づかずに続けていたが。

「そういえば、私も水着を買っていなかったな。」

「ドウスル？カッテク？」

ハ口はそう言っているが泳げれば何でもいいので、指定水着でいいだろう。

「いや、買わぬ」シテイダメ。ヒカルオトセナイ。「な、何!？」

ハ口曰く、男というのは水着で女性を判断するらしい。指定水着でも悪くはないみたいだが、それではまだ1押し足りないようだ。

「そういうものなのか。そういえばたしか、私の部隊にはクラリツサがいる。クラリツサに頼めば・・・。」

すぐに私は携帯を開き、ドイツにいるIS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の副隊長である、クラリツサ・ハルフォース大

尉にコールするのだった。

第四十一話 臨海学校の準備 後編（後書き）

どこぞの誰かが予想した通りアンケートですよ〜だ。

グ：不貞腐れているな。

サ：そんなことどーでもいいから早く内容を言えよ。

わかったよ。またアンケートになりますが、原作三巻が終わるところまで来たら、番外編で次の三つの内1つを出したいと思います。その3つは、

- ・サーシエスとフロントルの出会い編
 - ・『D4』のパイロットの亡国企業所属の理由編
 - ・ダーク、『e x -』の生い立ち編
- です。

フ：いよいよか。

期限は福音戦後までです。

e & ? : : よろしく頼む。

第四十二話 そのころ・・・（前書き）

サ：久々の俺たち視点だ！！

フ：実に長かったな。

？：どんな話なのだ？

それでは行ってみましょう。スタートウ！！

第四十二話 そのころ・・・

光たちが買い物に出掛けているのと同時刻。

ここは表に出ることのない、いわば裏の軍事工場。

本来そこでは最低でも数百人が仕事をしているのだが、代わりにもがれた腕や引き千切られた胴体、そしておびただしい血の海という光景が広がっていた。

その中にまだ生きている女性の姿があつたが、その顔は恐怖で引きつっており、息切れしていた。どうやら何かから逃げていたようだ。

ガシャン・・・ガシャン・・・。

何処からかロボットが歩くときに出す音が遠くから聞こえてきた。女性はこの音の正体から逃げていたらしく、体を縮めて隠れようとしている。

ガシャン・・・ガシャン・・・。

その音はだんだんと大きくなっていつて、遂に女性の近くまで近づいて来る。

ガシャン・・・。

不意に音が途切れる。不思議に思った女性が確認しようと出てきたそのとき、何者かに捕まれてその体が宙に浮く。女性を掴んだ者の正体は、光のISと同様、全身を装甲に包まれたISであつた。

姿はデュアルアイにV字アンテナと、『G4』のユニット『ガンダム』に似ていた。

「正直に答えろ。返答次第では助けてやる。」

そのISが不意にそう喋り出した。声質は男性のもので低かつた。

「ここに軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘルが置いてあるはずだが見当たらない。何処に移した。」

どうやら目的は、軍用ISのようである。しかしこの女性はここで働いていたものの、軍用ISがここにあつたことなど知らない。

故に答えることが出来なかった。

「お願い……、命だけは……。」

それは、何も知らない彼女が言える唯一の言葉であった。

「そうか。知らないのだな。まあ良い。ここに関連する場所を当たれば見つかる。」

そう言つてそのISは掴んでいた手を離す。解放された彼女の顔は安堵に包まれるが一瞬だけであった。

突如彼女の胸に何か貫通する。それは離れたはずのISの腕であった。貫通したことにより血肉が飛び散り、骨が碎ける音が鳴った。心臓やその周りの内臓は全て駄目になっただろう。

「私の姿は見られてはいけないのでな。私の姿を見たものには全ては死んでもらう。」

彼女は即死。自分の身に何が起こつたのか知らない間に事切れていた。

「『銀の福音』。私の更なる進化のために生け贄になつてもらおう。」

そう言つたISの目は、緑色に怪しく光るのであった。

「そうかい。見つかなかつたか。そいつはとんだ無駄骨だったな。」

紅い傭兵こと、アリー・アル・サーシエスは先程『銀の福音』（以後『福音』と呼ぶ）の搜索に出たあのISと通信していた。

「場所を移すとは、小賢しい真似をする。」

今この部屋にいるのは、サーシエスにフロントル、そして学年別トーナメントで強襲に失敗したサーシエスとギンガナムを連れて帰ってきた黒いユニコーン（本当の名は『バンシィ』という）のパイロットがいた。先程の言葉はそのパイロットが発したものであった。

「となると、『福音』は今何処に？」

「たしか太平洋の一部の領海はアメリカの領海じゃなかつたか？」

「恐らくそこだ。奴等はそこで『福音』の試験稼働をするだろう。そこを一気に叩き、軍用IS『福音』を強奪する。」

知識から導き出した作戦は、試験稼働中の『福音』を強襲。行動不能状態までダメージを負わせたあと、『福音』を強奪するというもの。

「よし、ここは俺のアルケーの出番だぜ。」

たしかに1対多のISには同じ1対多のISが効果的で、筋は通っている。しかし……。

「いや、俺が出よう。まだアルケーの修理が終わっていないからな。それに俺の『D4』のユニットにはアルケーと同じ1対多用のユニットがある。」

そう言ったのは、先程のパイロットである。学年別トーナメント前に襲撃したサーシエスは、ここに帰ってくるときに何者かと交戦。満身創痍で帰還したのだ。アルケーはそのときの傷が癒えていなく、まだ出撃出来ない状態だった。

「わかってるわかってる。それじゃ頼んだぜ、一輝。」

「ああ。必ず捕獲してくる。そして願わくは、ティガを倒す。」

『バンシィ』をユニットに持つIS『D4』のパイロット、影山一輝はそう答えたのであった。

第四十二話 そのころ・・・（後書き）

?&サ&フ：残酷だな！！

一輝：そう言う要素が欲しかったのか？

まあ、シリアス面が足りないと思ったから。

一輝：まあいい。とりあえず今回は終わりなのだな？

そうなります。次回もお楽しみに。

一輝：アンケートを行っている。詳しくは四十一話を見てくれ。

第四十三話 臨海学校！！（前書き）

海だ！海水浴だ！水陸両用MSだ！！

光：何か違うよ！！

G：水陸両用MSと言ったら、アツガイですね。

F：ゼー・ズールであろう。

サ：たしか人革連にMAでいたような・・・、忘れたわ。

G：グダグダだが、スタートだフラッグファイター諸君！！

第四十三話 臨海学校！

「海っ！見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声をあげる。やっぱり女子って、元気だなあ。

臨海学校初日は、天候にも恵まれて無事快晴。海に反射する光が眩しい。これぞ海！！だな。

え？俺か？俺の名は御之方慶一。IS学園1年1組の生徒だ。あの事情にてIS学園に通ってる。

「光。海が見えるぞ。・・・あ。光のやつ、寝てたんだよな。」
「すう・・・。」

隣にいるのは噂では一夏以上の唐変木とも言われる、『世界で2番目にISを動かせる男』の古代光だ。今は疲れて寝てるんだけど、まあ仕方ないことだよな。

昨日は俺と山田先生のハ口を作ったり、GUTS何とかっていう銃を改造したり、しまいには『パッケージ』を作ったりしてたら、疲労がピークになってたんだろな。

「なあ。まだ起きないのか？」

「昨日は張り切ってたからな。着くまで起きないんじゃないか？」
今俺に話しかけてきたやつは、本来は『世界で唯一ISを動かせる男』だった、世界最強で俺と光の担任の『織斑千冬先生』の弟の織斑一夏だ。で、その隣にいるのは、その一夏のファースト幼馴染みで、一夏にゾッコンの篠ノ乃箒だ。・・・今のは、箒に内緒な。

「ケイイチ。ツイタラアソボ、アソボ。」
「わかってるって。」

俺のハ口は金色（どこぞの大使とは違うぞ）で、性格はお調子者だそう。あと、山田先生のハ口は、深緑でしっかり者らしい。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ。」
どうやら目的地に着くみたいだ。そろそろ起こすか。

「おーい。起きろー。」
「ん？・・・もつ着くの？」
「そうみたいだ。光、寝ぼけて転けるなよ。」
「・・・目的地に着いて降りようとしたとき、俺が転けちゃった。
情けねえなあ、俺。」

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。一般客もいるから、全員従業員の仕事を増やさないように注意しろ。」
「・・・よろしくおねがいします。」
「ここは毎年お世話になっているみたいで、着物の女将さんが丁寧にお辞儀をした。」

「はい、こちらこそ。今年の1年も元気があってよろしいですね。」
「流石は本職だ。お辞儀の仕方が自然で綺麗だ。・・・そういえば、イルマ隊長の着物姿も綺麗だったな。ムナカタ副隊長が惚れるのもわかる。」

「あら、こちらが噂の・・・？」
「ええ、まあ。今年は3人男子がいるせいで浴場分けが難しくなっ
てしまって申し訳ありません。」
「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。し
っかりしてそんな感じを受けますよ。」
「感じがするだけです。挨拶をしる、馬鹿者共。」
「古代光です。3日間お世話になります。」
「御之方慶一です。よろしく願います。」
「お、織斑一夏です。よろしく願います。」
「一夏の場合、織斑先生に頭を押さえられていた。御愁傷様。」
「うふふ、ご丁寧にどうも。清州景子です。」
「やっぱり本職の人だ。僕もああいう風になつてみたいな。」
「不出来の弟と男子達で迷惑をおかけします。」

「あらあら。織斑先生つたら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね。」

「いつも手を焼かされていますので。」
それは言えてる。一夏っていつも問題を抱えてくるからね。・・・特に幕関連で。

「光、それはお前にも言えてるぞ。」

「なんで？僕、そんなことした覚えはないよ！？」

「・・・はあつ。本当に唐変木だな・・・。」

「うーん・・・。僕って唐変木なのかな？」

『今更気付いたんですか？』

酷いよG4！あんまりだ！

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし。」

「よし！すぐ着替えて海に行こう！・・・海獣とかいないよね？」

「ここは花月荘の1部屋。」

「あれ？団体客でも来てるのかい？」

「今日から3日間、IS学園の生徒が泊まるらしいわ。」

「たしか彼処には男子が3人入学したのよね。」

「はいですう。そのうちの1人はあの『ブリュンデヒルデ』の弟さんみたいですけど。」

「しかし、ISは女性にしか反応しないのでは？」

「世界は変わっていくのだろう。男で扱える者がいてもおかしくない。」

「でも一気に3人も。誰かが意図的にやっみたいみたいです。」

「しかしISかあ。わしも弄ってみたいもんだ。」

「またですかイアンさん？情熱を捧げるのもいいですけど、程々

「お願いしますね。」

「気になるアニー。今に始まったことじゃないさ。」

「どこの私設武装組織のクルーと同じ人たちが泊まっていたという。」

第四十三話 臨海学校！！（後書き）

グ：少年っっっ！！！！

サ：俺と同類・・・の奴と少し違うな。

・・・はつきり言いますけど、別の人間ですよ・・・。

フ：やめておけ。今の彼らには届いていない・・・。

光：と、とりあえず、次回もお楽しみに。

第四十四話 いざ海へ！！（前書き）

題名はこうなってるけど、まだ海へ行きません。

光：早く泳ぎたいな・・・。

G：私は泳げないのに・・・。

A：ソレデハドウゾ。

第四十四話 いざ海へ！！

「ね、ね、ねー。おりむゝ、ライライゝ、けいゝ。」

後ろを向くと、何故かレイロンス似の水着？を着たのはほんさんが異様に遅い移動速度で尻尾を振りながらってなんで尻尾が動いてる！？って水着を着るの早っ！！

「3人って部屋どこ？一覽に書いてなかった！。遊びに行くから教えて。」

？僕たちの部屋の場所を知ってどうするの？いいことでもあるのかな？

「いや、俺たちも知らない。廊下にも寝るんじゃないの？なあ。」

「……。」

「えっ？どうした？」

「……一夏って人の迷惑にすることをしたいの？」

「俺が言うのもなんだが。一夏、お前バカだろ。」

「なっ！？慶一、それはないだろ。」

大有りです。いつ気付くんだろう？

「織斑、古代、御之方。君たちの部屋はこつちだ。」

エーカー先生が僕たちの部屋まで案内してくれるみたい。何処なんだろう？2人も気になってるんだらうか、あちこち見渡してる。

「着いたぞ。ここが君たちの部屋だ。」

「……はい？」

「えーっと……、先生？ドアに『教員室』と書かれた紙が張られてるんですけど……。」

「最初は3人で1部屋ということになっていたが、就寝時間を無視して女子が押しかけると思ってな。織斑は織斑先生と、古代は山田先生と、御之方は私と同室にしたのだが。」

ちよつと残念だ。一夏や慶一と夜遅くまで話し合いたかったなあ。

「それから大浴場なのだが。男女別になっているので問題ないだろう。」

「……わかりました。」

僕たちはそれぞれの部屋に入って、持っていた荷物と電源を切っているハ口を置いて、ハ口を起動させる。

「アソボ。アソボ。」

「わかってるよ、ハ口。ちゃんとアルミ被膜コーティングをしてからね。」

そうしないと錆びて修理にも時間がかかるし、パーツの換えも少ないからコーティングは大事。念入りにしないと。

「……………」

「……………」

「……2人共、これは何？」

「ヘンナノ。ヘンナノ。」

慶一はもう少し時間がかかるって言うてたから、一夏と一緒に更衣室のある別館に行く途中に箒とばったり出会った。それから3人+1つで向かってたんだけど……。

「ねえ、これって「知らん。私に聞くな。関係ない。」ってちょっと待ってよ。」

箒に聞こうとすると、言い切る前に即否定された。一夏は正体がわかってるようだけど……。

ちなみに今僕が見ている光景は、道端に『ウサミミ』が生えていて、それをクウとホークがつついたりしている。危険だよ。

「えーと……抜くぞ？」

「わかった。クウ、ホーク、ハ口。危ないからこっちにおいで。」

クウは躡がなっていたから、ホークは僕が親だから、ハ口は何かを悟ったのかちゃんとこっちに来てくれた。取り敢えず『ウサミミ』からは離れよう。

「光、先に行つててくれ。直ぐに追い付くから。」

1人で大丈夫なんだろうか。でも一夏はいいって言ってるから、クウとホーク、八口を連れて更衣室に行くことにした。・・・途中何かが墜ちてきた音が聞こえたけど、気にしないでいいんだよね？

「キニシタラマケ。キニシタラマケ。」

・・・そうだよな。

僕はクウ。本当の名前は『バクウ・ハウンド』なんだけど、主人に命名してもらったんだ。僕は気に入ってます。

「クウ。今から海に行くんだけど、コーティングしてないと錆びちゃうから、じつとしててね。」

この人が僕の主人である、古代光さんです。もう1人はシャルロット・デュノアさんだけど、シャルロットさんは古代さんに好意を持っています。その事を古代さんに伝えたいのですが、あいにく僕は喋れません。

「ギャウ。（苦労してるんだね。）」

こっちは古代さんのペット、ホーク君です。僕の親友です。

「クウウン。（主人の古代さんの鈍感、いつになったら直るんだろうなあ。）」

「ギャ〜。ギャギャウ。（さあ。おいらにはわからないよ。）」

「タブンナオラナイ。タブンナオラナイ。」（ボソッ）

まあ、今は置いておこう。さあ、海でいっぱい遊ぶぞ〜！

「ギャ？（ところで僕たち、海で泳げる？）」

・・・さあ？

第四十四話 いざ海へ！！（後書き）

海と言ったら、どんなことを思い浮かべる？

光：海って言ったら、ガタノゾーアと戦った時だね。

グ：フラッグカスタムあの少年を初めて追い込んだ場所だな。

結構色々なことが起こる場所なんだね。海って。

G：物騒なことを言わないでください！！

第四十五話 G4の想い(前書き)

今回はG4がメインです。

サ：あー。早く戦いてえな。

フ：では久し振りにやるか？手合せ。

一輝：だったら俺も混ぜてくれ。

？：前書き後書きでは平和だな・・・。

そうですね・・・。

第四十五話 G4の想い

「あ、織斑君に古代君だ！」

「う、うそっ！わ、私の水着変じゃないよね！？大丈夫だよね！？」

「織斑君の体もだけど、古代君の体かっこいい。鍛えてるね。」
皆様お久しぶりです。マスター光のIS、G4です。今はマスターの部屋で待機していますが、八口を媒体にマスターの近くで行動しています。

「2人ともー、あとでビーチバレーしようよ。」

「おー、時間があればいいぜ。なあ光。」

「そうだね。それじゃあ、慶一も誘おうよ。」

「そうだな。」

・・・なんでしょう、この気持ちは。マスターが他の女子と仲良くしているのを見るとイライラしてきます。

「ギャウ。（ライバルが増えそうだな。）」

「ワンツ。（そうみたいだね。）」

クウにホークが何か言っているようですが、私にはどうでもいいです。今はマスターに数人の女子が近づいていることが気になって仕方ありません。

「マスター、油を売っていないで早く泳ぎましょう。」

「えっ、G4なの？ああ、八口を通じて話してるのか。そうだね泳ごうか。」

これでマスターに誰も近づかないd「ひ、か、る~~~~っ！！」っ！こ、この声はっ！！

「おー高い高い。遠くまでよく見えていいわ。ちょっとした監視塔になれるわね、光。」

しまった！！安心してして存在を忘れてました！！2組の専用機持ちの鳳鈴音を！！

「鈴、降りてやれよ。光が迷惑だろ。」

「いいじゃない、光が気にしてなければ。ねえ。」

「う、うん……。」

マスター！そこははつきり断ってください！！曖昧にするから漬け込まれるんです！！

「あ、あつ、ああつ！？な、何をしていますの！？」

……また出てきました。マスターと同じクラスの専用機持ちの1人のセシリア・オルコットが。彼女の手には簡単なビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持って……、まさかマスターに塗って貰おうと思っではいませよね？

「何って、肩車。あるいは移動監視塔ごっこ。」

「ごっこかよ。」

「そりゃそうでしょ。あたし、ライフセーバーの資格とか持っていないし。」

「そう言われると、そうか。」

「ねえ……、いい加減に降りて。疲れる……。」

ほら見なさい。いくらマスターでも長時間担いでいれば疲れるのも無理ないです。

「ん。まあ、光がそう言うなら。」

鈴音はマスターからまるで猫みたいに飛び降り、ひらりと手のひらで着地して、そのまま前方返りで起立する。さすがは小柄な体型と云えるのでしょうか。

「ま、まあそれはさておき。光さん、その……た、頼みごとをしてもよろしいでしょうか？」

「……悪いことしか思い浮かばないのはなんででしょう。」

「ん？何？」

「そ、その……もしよろしければ、サンオイルを塗っていただけませんか？自分では手が届かない所とかあるので。」

「いいよ。やるんだったら、しっかり塗りたいよね。」

……頭はないのに、頭が痛いようです。塗って欲しければ、女

子に頼んでくださいよ。例えば鈴音とか……。

『ねえG4。サンオイルってどうやって塗ったらいいかな。』

突如マスターがプライベートチャンネルを開いてそう聞いてきました。……そうか。その手がありました!!

『そんなの簡単です。コーティングするのと同じですよ。』

『そうなんだ。わかった。』

フッフッフ。セシリア・オルコット。さあ、貴女の罪を数えなさい……。

さつき『G4』に聞いてみたから、サンオイルの塗り方はバツチリ……、としたいんだけど本能が許可を出してない気がする。取り敢えず塗りますか。先ずサンオイルを手のひらに出して背中……。

「ひゃっ! ? ひ、光さん、サンオイルはすこし手で暖めてから塗ってくださいな。」

「そうなの? だったらごめんね。」

まさか『G4』、嘘を言ったの?

『あれえ〜? おかしいですねえ〜。』

……恐い。何か関わつちやいけないように思えてきた。

「えーっと、背中だけでいいんだよね?」

現実逃避をするためにセシリアにそう聞いてみたんだけど……。

「い、いえ、せつかくですし、手の届かない所は全部お願いします。脚と、その、お尻も。」

さらに現実逃避したくなるような答えが返ってきた。……滝行でもしようかな……。無の境地に行くほどの。

そのあと鈴が乱入してセシリアにサンオイルを塗ってきたので、

邪魔されたセシリアは怒って体を起こしてしまう。その際、サンオイルを塗ってもらったために紐をほどいていたため、セシリアの水着が落ちて大事な所をさらしてしまう。間一髪で隠したセシリアは、光が目を瞑って座禅をしていたのを見て安堵したのと同時に惜しかったと思うのであった。

第四十五話 G4の想い(後書き)

あー。久し振りにウルトラマンFEE3やりたくなってきた・・・。

光：じゃあ、やりますか？

いいね。やってみるか。

G：のほほんとしていますね。

ノ：いつも通りとは、いいことだ。

グ：あとで私も混ぜてくれ。

第四十六話 鈴と競争（前書き）

さつき感想で『Aって誰』という質問見たいのが来ていたので紹介します。高性能AI『ALICE』です。

A：忘れナイデクダサイ！！

光：何回か前書きと後書きで出てたけどね。

G：それはともかく、早くお願いします。

はいはい。では、スタート！！

第四十六話 鈴と競争

こんなところでセシリアには負けられないわ！

「光、勝負よ！」

「ん？いいけど、何で勝負する？」

「ここまではいいわね。光が食いつきそんな勝負っていったら・・・」

「向こうに見えるブイまで泳いで、負けたほうが駅前の『@クルーズ』で奢るの。わかった？」

「・・・わかった。全力で行くよ！」

「そうこなくっちゃ。 よーい、どん！」

不意をついて先に泳ぎだそうとしたけど、反射神経がいいからか光も同時に海に飛び込んできた。

（サンオイルか・・・。いいとは思うけど、もうダメね。多分耐性がついたはず。）

アイツは恥ずかしいことを一度経験すると、二度と同じことをしなくなるのよね。何でかしら？

（ええい、鳳鈴音、しっかりしなさい！がんばってアイツを振り向かせせるんでしょ！）

よしっ！と気合いを入れた瞬間、思わず力いっぱい吸い込んでしまふ。しかしここは水中。入ってきたのは海水であり、空気ではない。

「！？」ぼほっ！

そうして、鈴は溺れたのである。

この勝負、負けられない！勝負するんだったら、勝たなきゃ。

（それにしても鈴はどうしたんだろう？さっきまで並走してたのに。）

そう思つて、光は後ろを向く。すると、溺れている鈴の姿が目に入ってきた。

(大変だ！すぐ助けないと。)

光は急いで鈴のところまで泳いでいき、その体を海面まで引き上げる。

「鈴！大丈夫!？」

「ごほつ！けほつ！だ、大丈夫……。。」

「取り敢えず岸まで行こう。はい。」

溺れると普通に泳ぐより疲れる(少なくとも僕はそう思つてる)から、背中に乗せないと。

「な、なに?」

「乗つて。運んであげるから。」

「だ、大丈夫よ。別に、戻るg」乗つて。「……。ふ、ふんだ。

わかつたわよ……。。」

そう言つて、鈴は背中に乗った。たしか一夏にこのときの対処法を教えて貰つてたな。自分が思うよりやや高めにして……。。

「きゃっ!ど、どこ触つてんのよ!？」

「ごめん。でもこうしないと鈴を助けてるのに、溺れさせちゃうから。」

「そ、そう……。。」

「あと口に水が入ってくるようだったら肩を叩いてね。喋ると溺れるし。」

「ん。」

本来なら飛んでいったほうが速いんだけど、正体がバレると困るからできない。だからゆっくり泳いでいこう。

「あ、あのさあ、光……。。」

「なに?」

「その……。あ、ありがと……。。」

「どういたしまして。」

そうこうしているうちに岸についた。ゆっくり鈴を降ろして近く

にいる女子に預ける。何か前にこんなことしたような……。うん、いつだっけ？

「あ、光。ここにいたんだ。」

深く考えていたところに、ふと声をかけられたから後ろを振り向く。そこにはシャルと……。

「えーっと、どなた様ですか？」

全身にバスタオルを巻いたお化けみたいな人が立っていた。はっきり言うとミイラっぽい。

「ほら、出てきなつてば、大丈夫だから。」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……。。」

今の声は……。ラウラ？

「何でそんな格好してるの？」

「ラウラがね、光に自分の水着姿を見せたいんだって。」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあつてだな……。。」

「もー。そんなこと言つてさつきから全然出てこないじゃん。一応僕も手伝つたんだし、見る権利はあると思うけどなあ。」

たしかあのあと、シャルとラウラは同室になったんだよね。初めはライバルとして戦つたけど、今じゃルームメイトとして仲良くなつてる。なんか姉妹みたいだ……。ん？何か大事なことを忘れてる気がするんだけどなあ。何だっけ？ま、いいか。

「うーん、ラウラが出てこないんなら僕も光と遊びに行こうかなあ。」

「な、なに？」

「うん、そうしょ。光、行こう。」

いや、その……。一夏や慶一と約束があるんだけど。僕の意見は無視なんだね……。はあ。

「ま、待てつ。わ、私も行こう。」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

そう言つて、ラウラは一気に数枚のバスタオルをかなぐり捨て、

水着姿を現せる。

「わ、笑いたければ笑うがいい・・・！」

ラウラが着ていたのは、レースがふんだんにあしらわれた黒の水着で、僕からしたら似合う方だと思う。

「おかしなところなんてないよね、光？」

「うん。似合ってるよラウラ。」

「なっ・・・！」

・・・ん？何か恥ずかしいことでもあった？カーツと赤面してるけど。

「しゃ、社交辞令ならいらん・・・。」

「真面目にいいと思うけどなあ。ねえ、シャル？」

「うん。僕も可愛いつて褒めてるのに全然信じてくれないんだよ。あ、ちなみにラウラの髪は僕がセットしたの。せつかくだからおしやれしなきゃってね。」

まあ、たしかにそれは言ってる。せつかくの（臨海学校とはいっても）旅行なんだし、決めてみないと・・・って慶一がいった。

「あつ、今さらだけど、このプレスレットありがとね。」

「それなんだけど、どう？手首に合ってる？」

「うん。ちょうどいいよ。しかも既に保護コートしてあるから錆びる心配もないしね。」

実はあれ、僕の手作りなんだ。材料を買って、自分の工具で1から頑張ってみたんだよ。

「光。」

「ん？」

さっきまで赤面してた人とは思えないほど、いつもの落ち着き払ったラウラの声が僕を呼んだ。何だろ？

「ずるいぞ、それは。私にも何かプレゼントを・・・その、して欲しいのだが・・・。」

そんなに欲しいのかな、僕からのプレゼント？セシリアに続いてラウラまでねだってくるなんて。

「じゃ、何かの記念日にあげるよ。」

「む、そうか。では、機会があれば必ずくれ。絶対にだぞ。」

「了解。」

おっ。慶一と一夏が揃ってる。それじゃ、約束してたビーチバレーをしますか。

第四十六話 鈴と競争（後書き）

光：人の姿って何かと便利な時や不便利な時があるよね。

グ：たしかにな。人と違うことをしていると、奇怪な目で見られるからな。

ノ：同感だ。絶体絶命の時にのみしか使えんというのは困る。

人の姿も大変なんですね。

G：次回もお楽しみに。

第四十七話 対決ビーチバレー（前書き）

前に約束していたビーチバレーの話です。

サ：俺も海で泳ぎてーな。

フ：休みが取れたらな。

？：始まるぞ。読んでくれ。

第四十七話 対決ビーチバレー

さてと、メンバーを確認しましょうか。

こっちのメンバーは僕に慶一、それから一夏の3人。一方相手のメンバーは榎灘さんに、シャル（急遽参戦）、のほほんさん（本名布仏本音）の3人だ。・・・のほほんさんは戦力として数えるべきか否か。

「んじゃ、お遊びルールでいいよね。タッチは3回まで、スパイク連発禁止、キリのいい10点先取で1セットねー。」

なるほど、そういうルールなのか。わかった。これも全力で行かせてもらうよー！！

「じゃあ、こっちからってことでっ！」

当たれっ、見よう見まねのジャンピングサーブ！

「まだまだだね。それじゃあ7月のサマーデビルと言われた私には・・・勝てないわよっ！」

なんと！？たしかに見よう見まねだったけど、スピードには自信のあったあのサーブをレシーブするなんて。

「はいっ。」

「とうっ！」

見事なコンビネーションだ。シャルのトスがいいところについて、アタッカーの補助になってた。そしてそこからのスパイク。止められるか！？

「たああー！」

ナイス慶一！飛び込んでボールが落ちるのを防いで、高く上げてくれた。・・・今だ、一夏！

「いけえ、光！」

「はああああー！！！」

一夏のトスから相手にスパイクをかける。目標は・・・のほほんさんのいるところだ。

「わっ、わっ。」

いきなりの不意打ちに焦ったのか、そのボールを避けてしまった。つまり……。

「……1点ゲットっ!!」「」

櫛灘さんはたしかに強いけど、コンビネーションを大事にすればきつと勝てる。この調子で……!

「楽しそうだな。」

「やはり、夏と言ったらビーチバレーですね。」

「私としては、スイカ割りを所望したいのだが……。」

この声は、織斑先生に山田先生、エーカー先生の3人だ。先生ともやってみたいな。そうだ!

「先生。このあと僕たちとビーチバレーをしませんか?」

ダメ元だけど、聞かなきゃ損!

「悪くないな。織斑先生、山田先生、やってみましょう。」

「……エーカー先生がそう言うのであれば。」

「頑張ります!」

OK貰っちゃった!!それだったら、この試合に勝利して先生たちとの試合にも、勝って見せる!!

そのあと、光たちは先程の試合を10対4で勝利したものの、先生たちとの試合では織斑先生とエーカー先生のコンビネーションの前に、為す術が無かつたらしい。

時間はあつという間に過ぎて、今8時。夕食を食べ終わった僕は、海岸に来ていた。そうそう、夕食の時シャルがわさびの山を食べて悶絶してたり、セシリアが脚の痺れを我慢していて、このままだと残しちゃうと思ったから食べさせてあげてたら、皆が騒ぎはじめて何故か僕が怒られたり、色々なことがあったんだ。……周りには誰もいないな。

「もう出てきてもいいですよ。」

「そうか。わかった。」

すると、あのときと同じように下から粒子のようなものが離れていって、数秒でミラージュフレームサードイシュー似のISが現れた。

「今度はどんな用件ですか？」

「新情報だ。亡国企業の『男』のISがお前のISと似ている」とが判明した。」

なっ！？それは本当ですか！？しかも男のISパイロットなんて「気を付ける。そいつは結構腕がたつみたいだ。生半可の気持ちじゃ勝てねえぞ。」

「・・・わかりました。教えてくれてありがとうございます。」

「気にするな。俺たちは仲間だろ？」

それは重々承知しています。

「・・・時間が。じゃあな。」

そう言うと、その人は帰っていった。まさか、僕と同じ境遇の人じゃないよね？・・・そうだといいいけど・・・。

目の前には、大声で泣く1歳ぐらいの赤ん坊。自分は何かの装置に手をかけている。

その装置を起動させると、光が集まって赤ん坊を覆い尽くす。光が消えたときには、既に赤ん坊の姿はなかった。

そして意識は消えた・・・。

「・・・おい、起きろ。そろそろ時間だ。」

目が覚めると、まどかの顔が俺の目の前にあった。・・・夢か。

「ああ。わかった。」

時刻は午前3時か。俺は体を起こすと、ISスーツに着替える。スーツは・・・、たしかGUISスーツだったか。それに着替えてから、カタパルトデッキまで歩いていく。

「またあの夢か？」

「ああ。このごろ最近、良く見るようになってきた。悪いこと
起こる前兆か？」

「そうならないことを祈ってしよう。」
まどかとそう他愛のない話をしながら歩いていると、カタパルト
デッキに着いた。まどかはオペレーターだ。

『一輝。お前の弟が見つかる可能性は0ではないことを忘れるな
よ。』

「ああ、ありがとな。」

そうさ。この戦いが終わったら弟を探し出して、そしてまどかに
。。。いや、まだ先の話だな。『D4』、俺に力を貸してくれ。

「リポオオンズウウー!!」

そう言いながら、天に向けて『D4』の待機形態『イーヴィルス
パークレンス』を掲げる。すると、光が俺を包み1つの機体を構築
する。これぞ俺のIS『D4』のユニットの1つ、『リポーンズ』
だ。

『発進タイミングを『リポーンズ』に譲渡する。』

「了解。『リポーンズ』、影山一輝、ミッションを遂行する!!」

そして、カタパルトから射出された俺は目的地まで飛翔するのだ
った。

第四十七話 対決ビーチバレー（後書き）

光：グラハム先生と織斑先生のコンビネーション、最強です。

慶：何だったんだ？あの反射神経といい、あのスパイクといい。

A：流石としか言いようがないです……。

次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5448v/>

I S 光の英雄

2011年12月18日02時49分発行